
化け物学園帝国

逃亡日記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化け物学園帝国

【Nコード】

N9389V

【作者名】

逃亡日記

【あらすじ】

化け物ばかりが集まる、学園。人間は恐れていて誰も近寄ろうとしない。

そんなに悪い化け物達じゃない、学園。

それがこの化け物学園帝国！

絆と友情そして時には恋愛溢れるハチャメチャストーリーが始まる！

登場人物1

緋鬼瘤 ひきりゆう 雨眞魏 うまぎ

15歳で死神とヴァンパイアの血を引く女の子。

二重人格。

普通Ⅱ明るくて元気で優しくて心配性でよく笑う。

変化Ⅱ生意気で暗くて口が悪くて冷たくて笑わない。

自分は人間だと思っているらしい。

人格が変わると『瞬慧』という女の子になる。

幸杜 ゆきもり 梓 あずさ

15歳で狼と天使の血を引く男の子。

生意気で優しくて照れ屋でちょっとキツイ時もある。

雨眞魏の幼馴染で二重人格モードの雨眞魏の世話をしている。

いつも苦勞している。人の記憶を喰う事が出来る。

青柳 あおやぎ 黒 くろ

15歳の悪魔とヴァンパイアの血を引く男の子。

生意気で口が悪いけど本当は優しい。

白の双子の兄。白と血は繋がっていないが双子。

雨眞魏を気に入っている。

青柳 あおやぎ 白 しろ

15歳の天使とヴァンパイアの血を引く男の子。

明るくて元気で優しくて甘えん坊。

黒の双子の弟。黒と血は繋がっていないが双子。

雨眞魏にいつも甘える。結構嫉妬深い。

紀来 きらい 滯 みお

14歳の極普通な人間の女の子。

真面目でしっかり者の優等生。

化け物ばかりの学園の唯一の人間。

両親の都合でこの学園に無理矢理転校させられた。

西院等 由梨

17歳の狐の血を引く女の子。

表は元気で明るい、裏は弱虫で怖がり。

人間紀来。

嘉応 劉禰

15歳の狼とヴァンパイアの血を引く女の子。

体は意外と弱く見た目は狼だが、体質はヴァンパイアで日光が嫌い
でしょっちゅう風邪を引く。

人間があんまり好きではない。

鈴木 乃亜

12歳の九尾（狐）の血を引く女の子。

明るくて元気。

火が苦手。

鈴峰 凌

15歳（精神年齢、外見年齢）竜人（純血）の血を引く男の子。

明るくてキツイ言い方をしてしまうが、根は優しく思いやりがあり
強い子。

澪が幼い頃に初めて会った人間意外の人型の生物。

人が簡単に入れないような山の中で暮らしている。

運動がよく、身軽。

登場人物2

闇該 やみがい 龍牙 りゅうが

16歳の狸の血を引いた男の子。

不良だけど優しくて強い。

由梨と幼馴染。

黒崎 くろさき 蒼弥 そうや

17歳（精神年齢・叔父さんなみ）ヴァンパイアと人間の血を引く男の子。

クールで冷静？な極普通の常識人。

素直じゃない上に人見知り、微妙にツンデレでたまに毒舌。

困ってる人は見逃がせないらしい。

超がくつ甘党で血を食さない所が苦手。（見るとぶっ倒れる。）

日光が苦手で常に日傘を持ち歩いている。

鬼塚 おにつか 緋那 ひな

18歳の鬼の血を引く女の子。

DSで明るい。

家事が得意。

身体能力がよく馬鹿力持ち。

黒蝶 あげは 凛 りん

年齢不明で闇族とヴァンパイア（うさぎ族）の血を引く女の子。
冷静でクールで人見知りだが、心を開く一面もあり。

連と血が繋がっていない双子。

頭の回転がよく、頭がいい。

人殺しを昔していて、何万人の人々を殺してきた。

コードネーム、『漆黒の蝶』『血に染まった少女』など言われてい

る。

顔つきに無表情だが、実際に感情を抑えている。

黒蝶あげは連れん

年齢不明で闇族とヴァンパイア（うさぎ族）の血を引く男の子。
明るくて優しくて頼りになる。

凜の双子となつ存在。

刹那せつな吹雪ふゆき

見た目は10歳で妖怪雪女に血を引く女の子。
無関心。

一般の雪女、雪男は美しい男を狙うが、吹雪は美しい女を狙う。

咲愛さきあいシルク

年齢不明で、龍ドラゴンの血を引く女の子
ミステリア

魔法を使う時は、龍ドラゴンに変心する。

羽を隠し、目には眼帯を。

過去に酷い目にあわされて人をあんまり信じれなくなっている。
意外にツンデレっぽいところも

シルク・アスタール

11歳で蛇と人間の血を引く女の子。

殺人鬼で男女（子供）問わず、関係なしに殺す。

通りすがった一般人でも殺す。人殺しの天才。

由梨の元親友。

1話 入学

タツタツ…。

足の音が聞こえてくる。

「…ここが私が今日から通う学校?…。」

一人の少女がつぶやいた。

「雨眞魏。」

「ん? あっ! 梓! おはよう」ニコッ

「お前、相変わらずテンション高いな。」

「そんな事ないよ」ニコッ

少女の名前は『ひきりゅう緋鬼瘤 雨眞魏』

「大丈夫か?」

「うん! バリバリ、大丈夫!」ニコッ

「そっか」ニコッ

「うん!」ニコッ

少年の名前は『ゆきもり あずさ幸杜 梓』

「あの…。」

「ん?」

梓と雨眞魏に誰かが声をかけてきた。

「化け物学園はここであってるかな?…。」

「うん! 合ってるよ」ニコッ

「良かった。」

「あっ私、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」ニコッ

「俺は、幸杜梓。よろしく頼む。」

「あっ、私は、きおうりゅう嘉応劉禰よろしく…。」

「うん!」ニコッ

三人は、学園に入って行った。

「誰もいないね。」

階段を上りながら言う。雨眞魏。

「そうだな。」

梓は辺りを見渡す。

「おかしいよね…。」

「教室合ったよ！二人とも！」

教室が合ったらしい。

【1―B】と書いていた。

「1―Bで合ってるのかな？？」

「入ってみるしかないだろう？」

「それもそうね…。」

三人は教室に入った。

そしたら一人の女の子が席に座っていた。

「あれ？一人だけ？」

「一人だけだろう？見渡せば。」

「うん…。」

座っていた、女の子が席を立ち、三人の目の前に来た。

「初めまして、私は鈴月乃亜^{すずつきのあ}なの。」

「私は、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね！乃亜ちゃん」ニコッ

「俺は幸杜梓。よろしく頼む。」

「私は、嘉応劉禰。よろしく…。」

「はい、よろしくなに」ニコッ

四人は挨拶をして、席に座った。

「先生来るのかなあ…？？」

「こないだろう？この気配だと。」

「そう？来ると思うけど…。」

「教室にこない先生なんて聞いた事無いなの。」

「それもそーだな。」

30分後――――。

「来ないねえ」

「ZZZZ」

「梓、寝てるよね？」

「疲れ果てたんだよ。」ニコッ

「??？」

ガラッ

「??」

教室に誰かが入ってきた。

「先生ですか??」

劉禰が聞いた。

「はい。」

と答えた。

「皆さん、ご入学おめでとうございます。これから…。

この化け物学園帝国の掟、規則などを説明します。」

「遅れてから、そんな事言うか??」

「梓、起きたんだあ」ニコッ

「説明なの？」

「そうです！質問なども受けましょう！」

「って生徒、私達だけ!？」

劉禰が大声をあげて驚く。

「そのとおりです。」

「えっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

2 話 説明

「この学園は全寮制です。」

先生が一言そう言う。

「先生、質問！」

劉禰が手を上げて言う。

「こんなボロボロの学園に寮なんてあるんですか?？」

「ありますよ。とっても綺麗な寮が。」

「おおー！」

皆、嬉しい顔。

「この寮は一人一部屋。1階～3階までは男子寮。

4階～6階までが女子寮です。」

「先生！質問したいんですけど…。」

雨真魏が言う。

「はい？」

「女子が男子寮に行ってもいいんですよね?？」

「まあ～自由です。それは男子寮、女子寮の寮長に許可を貰ってください。」

「はい！」

「寮は、お風呂も時間制になっています。」

9時～10までが女子、11時～12時までが男子、それ以降は自由です。」

先生が軽く説明する。

「先生。」

「はい？」

劉禰が先生に質問する。

「何時以降は寮から出ちゃ駄目なんですか?？」

「人間以外は9時以降は出ては駄目です。」

「じゃあ、私だけ駄目なんだあゝ」

「えっ？雨真魏、人間なの？」

「うん、まあーね。劉禰ちゃんたちはいいなあゝ」ニコッ

「じゃあ、先生。」

梓が質問した。

「なんですか？」

「俺達みたいに人間以外の奴とだったら出ていいのか？」

「はい。まあー危険がなければ。いいでしょう。」

「ヤッター！梓ありがとう！」ニコッ

「なっ！？：別に：。」

梓は顔を真っ赤にさせた。

恋？：面白そう。

劉禰はにやける。

「では、自習にします。授業は教科事に先生が変わります。でわ。」

先生はそのまま、教室を出て行った。

「暇だよな。こんなんだったら。」

「それもそうだよねえー。」

「ん？？」

「雨真魏は人間なのに、よくこの学園に入れたなの？」

「私もわかんないや。自由に生きてたから」ニコッ

「そうなの？」

「うん」ニコッ

ガラッ！

「ん？」

誰かが教室に入ってきた。

「すみません！遅れました！？」

「ハア：ハア：遅れた？。」

「あれ？先生は？？」

「いないな。」

「大丈夫だよ、今自習だから」ニコッ

雨眞魏が優しく言う。

「遅刻？って言っても…」

「私、紀来^{きらい}滯^{みお}です、よろしくお願いします！」

「俺は、涼峰^{すずみね}凌^{りょう}よろしく。」

「私は、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」ニコッ

「幸杜梓。よろしく頼む。」

「私は嘉応劉禰。よろしく。」

「私は鈴月乃亜なの。よろしくなの」ニコッ

皆自己紹介をする。

「ねえー皆で寮の確認でも行かない？？」ニコッ

雨眞魏が提案する。

「いいな。それ！」

「いいと思う。雨眞魏が提案したから。」

「私も賛成なの！」

「私も行きます！」

「滯が行くなら：俺も。」

「よし！じゃあ行こう！」ニコッ

こうして：始まった、戦と友情と絆と恋の物語ストーリー！。

3話 双子

「一人一部屋って、広すぎるようなあゝ…。」
雨真魏は、とても寂しそうな顔をする。

朝――――

「梓！おはよう」ニコッ

「おう、雨真魏。」

「おはよう、雨真魏」ニコッ

「おはよう！皆」ニコッ

皆朝からテンションが高い。

「雨真魏、昨日は眠れた？」

「うん、劉禰ちゃんは？」

「私もバツチリかな？」ニコッ

「お前ら仲いいな。」

「うん！」ニコッ

劉禰と雨真魏はとても仲がいらしい。

「雨真魏！」

「えっ！？」

「！？。。」

雨真魏に誰かが抱きついてきた。

「何？雨真魏！大丈夫？？」

「白、何してんだよ！」

後ろから一人の少年の声がした。

「白？。。」

「雨真魏、久しぶり！！！！」ニコッ

「白、いいから雨真魏に抱きつくな。」

「アイアイサー！」

「誰？」

「白！黒！」

「おお！梓！」

梓と雨眞魏の知り合いらしい。

「何！？梓の恋の敵、現れちゃった？？？」

劉禰は一人暴走中

「僕は青柳白！よろしくね！」ニコッ
あおやぎしろ

「俺は青柳黒。」
あおやぎくろ

「双子なの？」

乃亜が白と黒に聞く。

「まあ…血は繋がっていないけど、双子。」

「ふーん…そうなの。」

乃亜はうなずく。

「私は、嘉応劉禰。よろしく」ニコッ

「梓、お前ちゃんと雨眞魏守れてるんだろ？」

「うっせ、俺はお前らみたいにな、大雑把じゃねえーよ。」

「なんだと！俺のどこが大雑把だ！」

「全てだろうが！」

「何この展開！？」

梓と黒は口喧嘩、劉禰は一人暴走中？

「ねえ。」

「ん？」

「なんだ？」

劉禰が梓と黒に話しかけた。

「黒と梓は付き合ってるの？」

「なっ！」

「はあ！？」

「「そんな訳ねえーだろう！……！！！」」

二人は全否定した。

「何でそうなるんだよ！」

「何で俺がこんな奴と…。」

二人は顔を見合わせた。

「だって、二人ともホモじゃないの!？」

「ホモって何？」

「知らない方がいい。」

「??」

滯と凌は二人で話していた。

「白は相変わらず、元気だね」ニコッ

「雨真魏の顔を見たから、すっごく元気になった!」ニコッ

「ありがとう」ニコッ

「えへへへっ」ニコッ

「もう!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!黒と梓喧嘩しない!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

劉禰の声が学園中に広がった。

4話 二重人格

「雨眞魏、今日は顔色悪いよ。」

白が雨眞魏の顔を覗き込んで言う。

「そんな事ないよ。私はいつも元気だし！大丈夫！」ニコッ
雨眞魏は明るく接する。

「そう？ならいいよ」ニコッ

「うん！」ニコッ

「相変わらず、白は雨眞魏に甘えるなあ」

「黒！僕だけが！雨眞魏に甘えていいの！」

「はぁ！意味分からん！」

「はいはい。喧嘩しない。」

「雨眞魏も大変だね」ニコッ

「劉禰ちゃん：そんな事ないよ」ニコッ

「えっ？」

「毎日楽しいよ」ニコッ

「そっか。」

劉禰と雨眞魏は顔を見合わせて微笑んだ。

「雨眞魏と劉禰は何笑ってるの？」

「あっ乃亜。」

「乃亜ちゃんだ」ニコッ

階段を下りてくる乃亜。

「私も混ぜてなの」ニコッ

「うん」ニコッ

「皆さん、どうもです。」

「澪ちゃん！」ニコッ

「ってあれ？梓と凌は??」

劉禰が辺りを見渡す。

「あれ？何所行ったんだろう??」

滯は辺りを見渡す。

「梓も何所行ったんだろぅ?? 白と黒は知らない?」

「「知らない!」」

二人ははもって言った。さすが双子。

「!?!。」

「雨眞魏? どうかしたの?」

雨眞魏の様子が変だった。

「雨眞魏! どうしたの?」

「雨眞魏! どうしたの!?!」

乃亜と劉禰が雨眞魏のそばに駆け寄る。

「チツ。。。」

「えっ??」

「雨眞魏?。。。」

乃亜と劉禰が啞然する。

「何で俺が。。。」

バンッ!

「偉い、大歓迎されてないなあ。。。」

「雨眞魏?。。。」

「本当に俺が嫌いなんだな…白。」

「白! やめろ!」

「僕、あいつ嫌い。殺していいよね?」

白は銃を構える。

「俺も準備運動にはなるだろう?」

「そんな事聞いてない!」

白が銃を撃とうとする。

「雨眞魏とは違う。。。」

「誰なの?。。。」

乃亜と劉禰は焦る。

「はあゝ…お前ら何してんの？」

「梓？何でお前がここに居る？」

「瞬慧しゅんすい！。」

「ん？」

「あんまり、こんな所で騒ぎを起すな。」

「はいはい。」

「白、落ち着け。黒、頼むわ。」

「おう。白。」

白は銃を片付けた。

「……。」

「あっち行くぞ。」

白と黒はどこかに行った。

「雨真魏も駄目な人間になったな。」

「しょうがないんだよ。」

「そうかよ。」

「あなたは？誰？…。」

劉禰が違う雨真魏に聞く。

「俺は、雨真魏のもう一つの人格。名前は、瞬慧しゅんすい。まあー本当の名前ではないが。」

「どういう??」

「お前らが知る必要はない。」

「…。」

「雨真魏はどうしてるの??」

乃亜が恐る恐る聞く。

「今は眠っている。」

「…。」

「俺は普段あんまり出てこないんだが…雨真魏が俺を目覚めさせた。」

「えっ？雨真魏が??」

「そうだ。あいつにも何かあるのだろう？」

「あなたは…。」

「えっ？」

劉禰が聞く。

「瞬慧は人間なの？…。」

「違う。雨眞魏も違う。」

「えっ？…だけど雨眞魏自分で…。」

「あいつは自分自身が人間だと思い込んでいる。何も知らないんだよ。」

「!?…。」

「もう雨眞魏おきたから、俺は行く。じゃあな。」

「あっ！待って！瞬…。」

「うわぁ！どうしたの！？劉禰！大声なんか出して!？」

雨眞魏が元の人格に戻った。

「雨、雨、雨眞魏戻ってよかったよぉ」

乃亜と劉禰が雨眞魏に抱きつく。

「あわわわわわ！どうしたの?？」

雨眞魏がちよっと焦る。

「はぁ…凌どこ!!!!!」

滯は凌を探し?。

5話 喧嘩

タツタツ…ガラッ

一人の女の子が教室に入ってきた。

「転入生？」

「…。西院等由梨（さいいんとうり）と言います。」

「由梨ちゃんって名前なんだね。可愛い」ニコッ

「人間？…」

「うん！そうだよ」ニコッ

「！?…」

由梨は雨眞魏に威嚇をする。

「えっ?何?もしかして由梨ちゃん、人間苦手な人なのかな?？」

「えっ?…。」

滯と雨眞魏は焦る。

「…。」

走って教室を出て行く。

「はあ…人間苦手な人いるんだなあ…。」

「雨眞魏も気にしない。滯も。」

「うん。ありがとう」ニコッ

「!?…。」

雨眞魏の様子が変だった。

「まさか…瞬彗?…。」

「俺は、雑魚な生き物、人間嫌いなんだよバーカ!」

「空気読めてないの…。」

乃亜がしょぼんと言う。

「梓!瞬彗を止めてよ!」

劉禰が梓に狼の電波で伝える。

「俺はあんな雑魚にんげ…」

梓が瞬彗の口を塞いだ。

「お前は黙ってろ！っていいから戻れ。」

「チッ、いつか殺してやる！」

瞬慧の人格が引いて雨眞魏に戻る。

「ハア：ハア：ハア：。」

由梨は走りすぎて息が荒い。

どうやったら仲良く出来るんだろう？…。

「：。」

タッ！

由梨は教室のドアをこっそり開けて中をのぞく。

「由梨、何をこっそりしているの？中に入ってきたらいいじゃない？？」

「おわあ！！！！…うう…。」

由梨は焦る。

「謝るなら、ちゃんとね。雨眞魏はちゃんと許してくれるよ。」

劉禰が由梨の耳元で囁いた。

「あのっ…。」

由梨が雨眞魏の目の前に行く。

「あっ由梨ちゃん！どうしたの？」ニコッ

「さっきは威嚇とかしてすみませんでした…。」

由梨が素直に雨眞魏に謝る。

「ううん。私こそ、ごめんなさい。」

雨眞魏もなぜか謝る。

「ねえ、雨眞魏は直簡単に許してくれるっしょ？」
「うん。」

「雨眞魏!!!!!!!!!!!!!!」

「うわぁ! 白!」

白が雨眞魏に抱きつく。

「白って本当に、雨眞魏が好きなんだね。」

「雨眞魏好きだよ!」 ニコッ

人間に好意を抱く?…何考えているんだ?…馬鹿馬鹿しい…。

「由梨、何考えてるの?もしかして人間の事?」

「別に…。」

「何で、由梨は人間が嫌いなの?私、それが疑問に思ったわ。」

劉禰が由梨に聞く。

「誰が、あなたに言いますか。フンッ」

由梨は窓から飛び降りた。

チャリンッ…それと同時に鈴の音が鳴り響いた。

「何!その態度!ちよつと待ちなさい由梨!」

劉禰が狼の姿になって、由梨を追いかけた。

「劉禰ちゃん!由梨ちゃん!喧嘩は駄目だよ!!!!!!!!!!」

「劉禰!由梨!喧嘩駄目ですよ!」

乃亜と雨眞魏が注意する。

リンッ…リンッ…。

鈴の音と同時に由梨が狐の姿になって逃げる。

由梨が鎌を構えて火玉を2, 3発投げる。

「何で、攻撃してくるの?」

「追いかけてくるから。」

「あっそ!」

「うわぁ!…何あれ?」

滯と凌が廊下を歩いていると由梨と劉禰が元の姿に戻って戦っているのが見えた。

滯が窓を開ける。

「さすが、九尾と狼って感じだな。」

「ん？ 滯と凌見てたの？」

「ごめんなさい。気になってしまっただけ。」

「俺も。」

「そう？ 別に見るのは全然構わないけど。」

由梨はいつの間にか消えていた。

「……。」

「戦か？ 俺にも戦わせろ！」

「お前は引つ込め！ 何で今日はいっぱい出て来るんだよ！」

「俺は……いや、今日はもういい。じゃあな。」

「なんだったんだ……あれは？……。」

6話 転人生

「はぁ〜…。」

「由梨ちゃん、どうかしたの？」

「……。」

由梨が無言で教室を出た。

「雨真魏、どうかしたの？」

「私はなんでもないけど…由梨ちゃんがため息をついていたから…。」

「いつもの事じゃないの？」

「そうなの？」

「私、この間由梨を追ってたら、戦いになっちゃった」ニコッ
「知ってるよ。あんまり、喧嘩とかしちゃ駄目だよ。」

雨真魏は劉禰の頭を撫でる。

劉禰が狼の姿になる。

ガラッ

「うわぁ！狼！」

梓が驚きすぎて足をつった。

「梓、そんなに驚く事なのかな？？」

「って、驚きすぎて足つつてるよ梓。」

「その声…劉禰かぁ…痛！つるのって痛い！」

「当たり前だよ。」

「梓がへたれてるな、白。」

「うん」ニコッ

白と黒が梓の足をつつく。

「やめろおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

梓が痛さのあまり叫ぶ。

「はははは。」ニコッ

本当に平和な…日常だな…。

「憎しみで我を忘れ…。」ボソッ

「雨真魏、今何か言った？」

「あつうん。何でもないよ」ニコッ

「そう？」

「あれ？梓が白と黒にいじめられてるの。」

「足つったんだって。」

「そうなの？じゃあ私もイジメるの！」ニコッ

「やめろおとおお。」

梓は絶望状態だった。

ガラッ

一人の少年と少年の後ろに隠れる少女が教室に入ってきた。

「…。」

「凜、そんなに黙ってると誰とも喋れないよ」

「転入生？」

「この頃、転入生多いよね。」

「それ思った。」

滯と凌が二人で話していた。

「えっと…黒蝶連あげはれんよろしく！」ニコッ

「…。」

ガラッ

「えっ?？」

連と凜の後ろから少年が入ってきた。

「何か、今日で随分転入生増えたよね。」

「転入生じゃなくて、本当は登校が今日だったりしてなの」ニコッ

「そうなのかな?？」

劉禰が結構考える。

「初めまして、私は緋鬼瘤雨真魏。よろしくね」ニコッ

雨真魏は優しく微笑みかける。

「私は、嘉応劉禰。よろしく。」

「私は乃亜。よろしくなの!」ニコッ

「この学園はヴァンパイアが多いのか?…。」ボソッ

「だな!」

「うるさい…。」ボソッ

「凜、気分でも悪いの?」

「……。」

「ごめん。人見知りで。」

連が劉禰に軽く謝る。

「梓! つったの治った??」

「治った! 白! 黒! お前ら許さん!」

梓は黒と白を追いかけた。

「あれは?」

連が梓と黒と白を見る。

「あれは、気にしなくてもいいよ」ニコッ

「そっか。」ニコッ

「??」

「……。」

「で、あなたの名前は?」

雨真魏が蒼弥に話かける。

「えっ? : 俺は、黒崎蒼弥。くろさきそうや」

「うん。よろしくね! もう覚えた」ニコッ

「……。」

チャリンッ : 鈴の音がした。

「うわあ! ?」

連が驚く。

由梨が連の隣にいた。

「…。」

凜がなぜか由梨の方を見る。

「由梨、この間はごめんね…ちょっとムキになっちゃって…。」

劉禰が由梨に謝る。

「二人喧嘩したの??」

「連、口をはさむな。」

「あっ! うん…。」

「別に…気にしてない…。」

「そっか!」

劉禰は安心する。

「雨眞魏!」

「うわぁ!? 白! 何??」

「梓が追いかけてくるよ。」

「えっ?」

白が雨眞魏に抱きつく。

「蒼弥、どうかしたの?」

「いや…。」

「??」

「梓! いい加減にしてあげてよ! 黒が可哀想だから!」

「はぁ…: 本当になってうわぁ! 何か人数増えてるし!」

梓は驚く。

パリンッ!

窓ガラスが割れる。

「敵…。」

由梨が反応する。

「少し離れてるけど…確かに居る…。」

窓から飛ぼうとしている。

「由梨待って!」

「俺が行ってやろうか？」

「戦いか？…なら俺が殺してきてやろう。」

「げげえ！瞬慧！？」

「……。」

7話 敵か？味方か？

「じゃあ、俺行ってくる。」

蒼弥が教室から出ようとする。

「私も行く。」

由梨は蒼弥についていこうとする。

「駄目！全員ここで待機！」

劉禰が皆に言う。

「俺は行く！お前、邪魔をするな！」

「瞬彗はうるさい！」

「チツ…。」

瞬彗は軽い舌打ちをする。

「…。」

由梨が窓から外に出る。

「ごめんねー」ニコッ

由梨に続いて緋那も窓から外に出る。

「おい！ちょっと待て！！白！黒！外に行け！」

「アイアイサー！」

「了解！」

黒と白が窓から外に出る。

タッタッタッ！シュンッ！タッ！

攻撃してくる相手に由梨は軽くよけ着地する。

「これは酷いわねー」

森に隠れて観察している緋那。

「殺す…。」

敵が由梨に近づき襲い掛かって来る。

「遅い…。」

由梨が敵の後ろに回り、回し蹴りをする。

「蒼弥！由梨達の所に行くよ！」

「おう…。」

劉禰と蒼弥が由梨達の所に行った。

「どうして、お前は行かない？」

「俺は…。」

「俺は、ここにいます。」

「瞬慧？。」

「俺は、ちょっと寝る。」

「瞬…。」

バタンッ

雨真魏はぐっすりを眠っていた。

「何？この状況！」

「あれが、ここに侵入って所だよー」

「えっ！マジで！？」

「ニッ」

敵が劉禰達に火玉を何発も打つ。

「ああー僕、楽しい事大好きなんだよねえー！」
バンッバンッ！

白は銃を出して、火玉を撃つ。

「はあ…俺、こういうの嫌いなんだよな。」

「じゃあ、僕に任せとけば？」

「それもそうだな。」

「その代わり、ご褒美だよ」ニコッ

「はあ…お前な。いいや。俺はゆっくりしてるわ。」

「ちよっ！白いの！？」

「黒の分まで僕が働くよ！」

黒はゆっくりとのんびり、ジュースを飲んでいた。

「乃亜、濤、凌ちょっと雨真魏を見ててくれるか？」

「うん、いいよなの」ニコッ

「うん！」

「了解。」

「頼んだ！」

梓は由梨達の所に行く。

「。。。」

敵が由梨の腹を斬る。

「!?!?」

だが、由梨には効いてないらしい。

「?!?!?あれ?女の人が歩いてるう」

白が後ろを向いて言う。

「白!前！」

「:ん?」

「お前、よそ見すんなよ。」

黒が火玉を剣で真っ二つにした。

「ここ:どこ?:::」

「そうだ、由梨!大丈夫!？」

「平気:::」

「!?!?:::緋那:足。」

蒼弥が緋那の足元を見る。

「あっ!:::ごめん、踏んづけちゃった」ニコッ

緋那は思いつきり敵を踏みつける。

「お前、鬼だな。」

「私は鬼だもん。」

「:::。。。」

劉禰が敵を押さえつける。

「こっち…。」

敵が木の上に居た。

「それは幻覚…。」

「なっ！幻覚にやられたの！？」

劉禰が落ち込む。

「あらら、引っかけちゃった。それじゃあ選択肢は殺すでしょう？」
「ニコッ」

「……。」

笑顔で凄い事を言う緋那。

「…？何をやっているんだろう？」

「僕と遊ぼうよ！」ニコッ

白は少女に話かける。

「幻覚合格…度胸合格…攻撃不合格！」

敵の腹を思いつき蹴る由梨。

「ガッ！…。」

「俺も暇だなあ…。」

「同感だ。俺も休むか。」

蒼弥は紅茶を飲む。

蒼弥の隣でジュースを飲む黒。

「あんた、名前は？」

白が少女に名前を聞く。

「刹那吹雪。」

「僕は青柳白。」

「よ、よろしく…。」

吹雪とちよつとだけ仲良くなった白。

あれからちよつと、戦いは続いた。

だが、由梨と敵以外は皆のんびりしていたそうです。

8話【番外編】モテモテ魔法！？（前書き）

はい！番外編です！ちょっと早いかなとも思いましたが、いいでしょうとWW

今回は【梓】をメインにした物語です！
お楽しみくださいね^^

「まさか、あの香水本物かよ！」

「雨眞魏！私の方が梓を愛しているわよ！」

「はあ？！劉禰まで何言ってるんだよ！？」

「劉禰と雨眞魏より私の方が梓の事を大好きですよ！」

「乃亜まで！？」

「私も：梓の事好きだし。」

「はあ？！」

順々に、梓に告白する女子連中。

「この魔法！いつになったら切れる！？」

「知らないー」

「はあ！？白テメェ！」

「フンッ」

白はすねていた。

「…好き…。」

「うっさいわ！ババァ×ガギッ！」

「」「」「誰がババァ！ガキッだ！」「」「」

「何の喧嘩だよ。って何瞬慧までも効いてる！？」

女子、皆が梓に抱きつく。

「助けろおおおおおおお！！！！！！！！」

梓が助けを求めるが、誰も助けようとしない。

それから数分後、梓は女子から逃げ続けたらしい。

魔法の効果もきれ、みんな元に戻ったそうだ。

8話【番外編】モテモテ魔法!?(後書き)

次回は本編に戻ります!

9話 楽しい事（前書き）

白と蒼弥がメインです！……！！

9話 楽しい事

「つまらないなあゝ…。」

椅子に座って、窓から空を見上げる白。

「つまらないんだったら、何かして遊べばいいだろう?。」

「じゃあ、蒼弥が僕と遊んでよ!」ニコッ

「何をして?…。」

「何でもいいよ!」ニコッ

「それが一番困るんだが…。」

「じゃあ、殺さない程度で戦ったらどうだ?。」

黒が横から、蒼弥と白の会話に口を挟んできた。

「それいいね! 蒼弥! それにしよう!」ニコッ

「分かった。」

「じゃあ始め!」

「よっし! 行くよ!」

白は銃を出して連発で撃つ。

「…。」

それはかわす、蒼弥。

「ん? 何してるんだ?」

「梓と雨真魏!」

「喧嘩か?」

「違う。遊んでるんだ」ニコッ

「ふん…。」

黒と梓と雨真魏が見学していた。

「雨真魏が見てるから! 僕は負けないよ!」

「俺は勝つ。それだけだろう。」

蒼弥は白は投げ飛ばした。

「とっ…。」

「もうちょっと強く投げればよかったか？」

「いいや、結構効いてたよ、だけど僕には勝てないよ！」
銃を連発で撃つ。

一発が蒼弥の腕にかすり血が出る。

「痛ッ！」

「ヒット！」

白の銃弾は特殊な弾でかすっただけでも血が出る弾。

「行くよ！」

蒼弥に近づく白。

「甘い。」

白の腹を思いっきり蹴る蒼弥。

「ガハッ！」

壁まで吹き飛ばされた。

「痛ッ…。」

「俺も今、結構ヤバかったな。」

「そうには見えなかったけど…楽しいよ。」

「若いっていいな。」

「何言ってるんだよ！」

白が蒼弥の頭を銃で殴る。

「痛ッ！」

「僕を甘く見ないでね！」

「俺も甘く見るなよ。」

「えっ？」

バシンッ！

「!?…。」

蒼弥の杖で白の銃が地面に落とされた。

「チッ！」

白は後ろから銃を出す。

そして連発で撃つ。

「さっきのは焦ったよ」ニコッ

「焦ったようには見えなかったが…。」

蒼弥と白の顔は笑っていた。

「じゃあもう決着つけよう」ニコッ

「いいだろう。」

蒼弥が白に近づく。

「ニッ」

白が後ろから、何かを出そうとする…。

カキンッ！パシッ！

「ストップだ！やめろ！」

黒が二人をなぜか止めた。

「白、それを直せ。」

「はいはい…！？…ゲホッ！」

「白！？」

白が血を吐いた。

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！…。」

「白！」

黒がポケットから薬を出した。

「飲め。」

「うう…治まった…はあ…。」

「大丈夫か？」

「うん。ありがとう」ニコッ

「白！大丈夫？って二人ともボロボロじゃない！」

白と蒼弥はボロボロだった。

怪我もいっぱいしていた。

「手当てするから、こっちきて。」

「俺はいい。」

パシッ

梓が蒼弥の手をつかむ。

「駄目だ。ほら来い。」

「白、手当てできたね。」

「雨真魏はいいにおいがする！」ニコッ

「白? :。」

「Z z z z」

「Z z z z」

黒と白は眠ってしまった。

「蒼弥：頭を怪我したんだね。大丈夫？」

「うん。」

「あんまり無茶は駄目だよ」ニコッ

「ふわぁー：俺も眠くなった：寝るわ。お休み。」

梓は木の上で眠った。

「蒼弥は寝ないの？」

「俺は：いい。」

蒼弥はどこかに行った。

「? :? :。」

「あれ? 三人寝てる! 寝顔可愛い」ニコッ

「私も眠くなってきたの。」

なぜか、皆眠ってしまったらしい。

10話 目覚め 前編

「皆寝てるの…雨真魏は寝ないの？」

「うん。あんまり眠たくないから」ニコッ

「どうかしたの??皆寝て。」

「楽しい事をして、疲れたんだよ」ニコッ

「楽しい事って??」

「さあ…。」ニコッ

「私も寝よう。」

「私もなの！」

乃亜と劉禰も寝始めた。

「…?!…。」

「あれ?雨真魏さん、起きてたのですか?」
シルクが後ろから雨真魏に声をかける。

「うん。ちょっとみんなの事お願い」ニコッ

雨真魏はどこかに行った。

「ん?あれ?皆まだ寝てたの？」

「あっはい…。」

タツ…タツ…。

「……。」

「雨真魏は？」

「一人でどこかに行きました。」

「ん?雨真魏は?どこなの？」

「一人でどこか行ったらしいよ。」

「雨真魏が一人で?珍しい事もありますの。」

「それもそうね。」

「ん?…。」

梓がおきた。

「あっ…梓、雨真魏が一人で…!?!?…。」

「…………。」

「劉禰?」

「えっ?乃亜?…。」

「どうかしたの?」

「あっ…いや…。」

一瞬…梓じゃなかった…気配が違った…。

「あれ?雨真魏は?」

「一人でどこかに行ったの。」

「探してくる。」

「はいなの!」ニコッ

「梓…ごめんね…。」

「!?!?…雨真魏?…いや、気のせいか…。」

梓は雨真魏を探していた。

「雨真魏…誰かにとりつかれてる…。」

「えっ!?!?」

「早く…探さないと…危険だよ。」

白が言う。

「私、探してくる!」

劉禰が狼の姿になる。

「私も行くですの!」

「俺達も行くぞ！」

「うん。」

皆雨真魏を探す。

タッ！

「雨真魏！」

梓が雨真魏を見つけた。

雨真魏に手を伸ばそうとするが、誰かに弾き飛ばされる。

「ごめんね……。」

「雨真魏！」

「梓！」

「梓！雨真魏！」

劉禰と乃亜が梓と合流する。

「誰だ！」

劉禰が威嚇をする。

「雨真魏！」

「梓、元気にしてたかしら？」ニコッ

「彩歌！？」

雨真魏の後ろから女の人が出てきた。

「誰？」

「彩歌、さっさとやる事やるわよ。」

「はいはい、本当にお節介ね。」

「雨真魏を返して！」

「それは駄目。この子は殺す。」

瞬慧：起きろ。

「!?…。」

「な、何?」

「もしかして、瞬慧!?」

「俺をこう言う状況で呼ぶか?」

「別に、お前強いし。」

「なっ!…まあ、いい。俺は暴れるいいな。」

「ああ…好きにしろ。」

「合点。」

瞬慧は氷の刃を構えた。

「さあ!俺と遊ぼうぜ!」

「なっ!早ッ!…。」

一瞬にして、瞬慧は彩歌の目の前に来た。

「ヤバイ!刃!」

カキンッ!

「へえ…言霊かあ…珍しいな。」

「チッ!」

何?この殺気!?さっきはこんな殺気!?…。

「よそ見すんな!」

「!?…。」

彩歌の手に刃がかすった。

「お前狼…剣すら持っていないんでしょう?」

「だからって何!?私はただの狼じゃない!」

風菜が劉禰に剣を振りかざす。

「!?…。」

劉禰が風菜の腕に噛み付く。

「なっ!…。」

「これで…終わりだな。」

瞬慧がとどめを刺そうとする。

「ハア…ハア…。」

「死…!?!?。」

瞬慧は大量の血を吐いた。

「瞬慧…!!!!!!」

11話 目覚め 後編

「瞬慧！どうしたの！？」

乃亜が叫ぶ。

「瞬慧！」

「よそ見したら、死ぬわよ。」

風菜の剣を横腹にかする。

「劉禰！」

「…うう…このくら…ゲホッ！」

「へえ…ヴァンパイアなのに血が拒絶かしら？」

「雨真魏…逃げちゃ…駄目だよ。」

瞬慧が倒れる。

「瞬慧！」

「これでとどめ！…。」

彩歌が剣を刺そうとした…。

その瞬間――――。

パシッ

「なっ！？」

刃を受け止める雨真魏。

「そうだったね…私忘れちゃってたよ。」

「雨真魏？…。」

「私は…負けないよ…。」

氷の刃が闇と血の刃に変化。

「うう…私は大丈夫…。」

劉禰の傷が広がる。

「ヴァンパイアでも治せない傷はあるわよ。」

「雨真魏…。その刃は…。」

グサッ！

「!?!?…。」

「お前…何してるの?…。」

雨真魏が刃を風菜の背中目掛けて投げた。

「なんて…殺気…。」

雨真魏からはとてつもなく凄い殺気を放っている。

「許さない…。」

「雨真魏…。」

「邪魔をするな!…。」

風菜が雨真魏に剣を振りかざす。

「雨真魏! 危ない!」

「雨真魏!」

パシッ

雨真魏は剣を手で受け止めた。

ポタッ…ポタッ…。

受け止めた手からは血が出てくる。

「お前…誰に手を上げているのか…分かっているのか?」

「あれは…妖力…ヴァンパイアと死神の妖力じゃ悪魔だってはがたたない。」

雨真魏は剣を粉々にする。

「お前! あからさまにさっきと殺気が違う!

何者だ!?!」

「…。」

剣を投げる。

「瞬慧…。」

「…雨真魏は、死神とヴァンパイアの血を引く娘だ。」

「瞬慧？」

「雨真魏は普通の死神とヴァンパイアの血を引く者じゃない。」
「普通じゃない？　どういう…。」

「母親も父親も人間じゃない。むしろ人間との関わりもない。
母親は最強と言われた死神。父親は人を殺した証のヴァンパイア
族だ。」

「ヴァンパイア族は知っているわ。それなら雨真魏の妖力も正しい
と言える。」

劉禰が納得した。

バキューンッ！

「いい加減さ、その魔力を止めてくれないかな？」

「白！」

今がチャンス！

劉禰は風菜の足に噛み付いた。

「僕ちよっと、今凄く起こってるんだよね？　殺していい？」

「瞬慧、お前は休め。」

「チッ…借り1だ。」

「フンッ…。」

バタンッ

「雨真魏！」

「雨真魏！　大丈夫？！」

「……。」

「風菜！　お待ちなさい！」

彩歌、風菜は闇の中に消えた。

「Zzzz。」

雨眞魏は眠っていた。

「傷が再生していく…かなり早いペースで…これがヴァンパイア族…。」

「はあ…もう傷治るのに一ヶ月も掛かるのに!!!!!!」

劉禰が倒れる。

「劉禰！大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」ニコッ

「だけど、さっきは人は治らないって言ってなかったの？」

「あれはすぐ治るって意味。一ヶ月は掛かるけど治るよ」ニコッ

「やはり…ですか。」

「えっ？」

一人の人形を持った少女と少女の隣に居る人型ロボット？がつぶやいた。

「!?!?。」

「私が探していた罪人がここに居ますね。」

緋鬼劉雨眞魏、あなたを処刑します！」

12話 情報×仕切り役

「雨眞魏が処刑!？」

「…。」

「死神とヴァンパイアの血を引く娘。

私はあなたを殺します。邪魔をするものも即排除します。」

「何で、雨眞魏が…殺されなくちゃならないわけ!?!?…」

「死神とヴァンパイアの血を引く。それもただの死神とヴァンパイアじゃない。

後から、何をされるか知った事じゃありません。

今、即排除せよとの命令なのです。罪人だからと言って、容赦はしません。」

少女は構える。

冷たい空気が流れる。

「私は、騎士団長、霧隠深紅。ある人の命^{めい}で緋鬼瘤雨眞魏…。
守りに来ました。」

「えっ？」

「はあ？」

「深紅？」

「兄様、私は雨眞魏さんを守りに来ました。

騎士団の人々が雨眞魏さん目当てでこの学園にやってきます。

精々気をつけてください。」

「それなら、私だって雨眞魏を守る!」

「私もなの!？」

劉禰と乃亜が言う。

「…：深紅ちゃん?…。」

「雨眞魏さん…私はあなたを守ります…。」

「ありがとう…。」ニコッ

雨眞魏は気を失った。

「雨眞魏……」

「皆さん、これからよろしくお願いします。」

「うん！よろしく」ニコッ

「ねえー皆面白い噂、教えてあげよつか？」ニコツ
白が笑いながら言う。

「噫？」

「そう、この頃変な噂があるの知ってる？」

「知らないけど……そんなのあるんだ。」

「聞きたい？」

白が怖い笑顔になる。

「いいから！早く言ってよ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

梓は、雨真魏をお姫様抱っこして、ロビーにある、ソファーに寝かした。

「で、どんな噂なんだ？俺も結構知っているが。」

「この頃、人間じゃない生き物が、強くなったり、変化したりするらしい。」

「变化？」

「そう、本当の化け物のように、自分自身じゃなくなる変化。」

「強くなるは、どういう事なの？」

「この頃、化け物共が無意味に人間襲っているらしい。」

「それまただの化け物じゃないらしいよ。」

「ただの化け物じゃないって？…どういう？」

「僕にも分からない」ニコツ

白はソファ―に座ってジュースを飲む。

「俺は、知ってるぞ。」

「えっ!？」

梓が言う。

「ただのって言うか、美しい人間の色……美しい人間らしい、目撃情報によればだ。」

「私、その人知ってるかも…。」

「マジかよ!」

「私、人間の町に行った事があったの、それで美しいというより、綺麗な人間がいてね。」

「それも妖力が普通の妖力よりも強くて…恐ろしい人…だった。」

「うん! 分かった! 後は俺に任せろ!」ニコッ

梓がメモ帳にメモを書く。

「なら、私は兄様の護衛をします。」

「そうか? なら! 全員聞け!」

「??」

白と黒が横に首を振った。

「自分が強いからって一人になるのは禁止だ!

出歩くなら2〜3人だ! 分かったか!」?

「分かったの!」

「了解。」

皆承知した。

「濡は、人間だから複数で行動した方が良いかもしれないけど。」

「そうだな。人間も殺される確実が高い。だから! 消して、一人になるな!

部屋も一人じゃなくて二人で一部屋だ!」

梓って意外と…仕切り役が似合ってるね…。

劉禰は心からそう思った。

「えっと、白と黒は一緒の部屋。雨真魏と劉禰だ! 乃亜と深紅! 濡と凌だ! いいか?」

「雨眞魏と一緒にだね。じゃあ部屋さき戻ってるね。」

「おい！鍵！」

劉禰に鍵を渡す。

「ありがとうございます」ニコッ

「白！鍵！」

白に鍵を投げる。

パシッ

「サンキュー！」ニコッ

「滯、ほら。」

「ありがとうございます。」

滯に鍵を渡す。

「深紅！ほれ！」

「ありがとうございます！兄様！」

深紅に鍵を渡す。

梓は誰と一緒に部屋なんだろう？…。

「雨眞魏、私が運ぶよ。」

「そうか？ならいいけど。」

劉禰が狼の姿になり、雨眞魏を抱える。

「深紅！よろしくなの」ニコッ

「こちらこそ…よろしくお願いします。」

「乃亜！ちょっと。」

「何ですか？」

「深紅は人見知りだから、優しく接してやってくれよ」ニコッ
梓が乃亜の耳元で囁く。

「了解！なの」ニコッ

「部屋広いねえ〜。」

という皆の歓声の声だった。

13話 かばい

「ベッドふわふわだあ」

「そうだな。」

白がベッドに飛び込む。

黒はベッドに座る。

「……。」

深紅はずっと沈黙。

何を話したらいいのでしょうか？…。

「深紅、黙ってどうしたの？」

「あっ…いえ。」

深紅は人に気を使う人。

『全員、起きてるならもう寝ろ！今日は疲れたと思うからな！』
梓が放送流して皆に伝える。

「黒く寝よう」

「おう。」

白と黒は一緒にベッドで眠った。

「じゃあ、私達も寝るなの！」

「はい…。」

深紅と乃亜も眠りに入る。

「…Zzzzz」

「……寝れない…。」

澪はぐっすり寝ているが、凌は寝れない様子。

劉禰はベッドから起きて、ベランダに出る。

パチッ…。

雨真魏が目を覚ます。

「瞬慧…。」

「ん、行くぞ。」

「うん…。」

雨眞魏が瞬慧になり、部屋のドアから出て行った。

「涼しい〜」

劉禰が風にあたっていた。

「なんだ？」

『どうしたの？瞬慧？』

「俺らの歩いている道…魔力がどんどん濃くなっている。」

『魔力だけ？…。』

「近くだと、魔力、妖力も濃い。」

「遠くだよ妖力しか、分かん。」

『そっか…先に進んで。』

「おう。」

瞬慧は雨眞魏を会話しながら進んだ。

「妖力？…。」

ベランダにいる劉禰が狼の姿になり、屋根の上にあがる。

「!?…。」

『瞬慧？』

「人間が人間を食っているぞ！」

『えっ!?!』

「チッ!今は逃げるぞ！」

瞬慧は逃げようとする。

「誰か居ますね？」

「!?!…。」

血だらけの男が瞬慧の目の前に現れた。

「人間が人間を食うってどういうことだ！お前は何者だ！
普通の人間か！」

「質問が多いですね。」

「あれは！瞬慧！行かないと！」

劉禰が瞬慧の元に行く。

「劉禰！」

「狼とヴァンパイアのハーフ、死神とヴァンパイアのハーフ…そうですね。」

「僕は、瞬慧を連れ戻しに来ました」ニコッ

「なっ！？…。」

「行きましょう、瞬慧。」

「瞬慧！」

「白！黒！梓！って全員来たのか！？」

「瞬慧、静かに移動するのが下手なんだよぉ」

白達が瞬慧の元に来た。

「あれ？あいつが居ない！」

「チッ…逃げられたか…。」

「だけど、何であいつ、瞬慧達の秘密を…。」

「それは…。」

瞬慧は何かを言いかけるが…。

「いいから、全員学園に戻るぞ！」

「はい。」

梓が指示したら、皆学園方に戻る。

「！？…。」

「劉禰？」

「消えるわけが無い！まだいる！皆構えて！」

劉禰が指示する。

14話 目標

「瞬慧！瞬慧！」

白が瞬慧の名前を叫ぶ。

「人間が…刺したのですか？…。」

シルクがは啞然していた。

「そんな事って……。」

シルクはその場にしゃがみこむ。

「珍しい事もあるんだな…人間が化け物を平然に刺すなんて……。」

「あれは、普通の人間じゃない！」

劉禰が凜に言う。

「その人間は？…今何所に？…。」

「逃げたよ…瞬慧を刺して、余裕の無傷で消えた。」

「そう…教えてくれて…ありがとう…。」

由梨は凜と劉禰にお礼を言う。

「姿は…見ていないのか？…。」

「真夜中だったからね、分からない。」

「男か女は分かるだろう？」

「多分、男だったような？…。」

「人間は…一体何が…目的で…。」

皆いろいろと話していた。

「そんな小ざかしい話はいい！今は瞬慧だ！」

「そうとう、重傷だ！」

梓が仕切る。

「嫌だ…あの時と…一緒…これじゃあ…これじゃあ…。」

「白！大丈夫だ！大丈夫、だから。」

黒が白を抱きしめる。

「黒…僕は…。」

「白…。」

劉禰が白の隣に行く。

「ハア…ハア…ハア…うう…。」

「瞬慧…血が…。」

瞬慧は無理に体を動かした。

血は大量に落ち流れる。

「うう…帰るぞ…。」

「瞬慧、お前傷、重傷だろう？」

梓が瞬慧の心配をする。

「お前に心配される…筋合いなど…ない…。」

瞬慧は血をポタポタッと落として、よろよろと歩く。

〓木の上〓

「不思議な事も起きるのね…。」

木の上で瞬慧達を見ていたシルクがつぶやいた。

「ハア…ハア…。」

皆…俺より雨真魏の方がいいのだろう…俺より…雨真魏が…。

「瞬慧…大丈夫だよね？…。」

瞬慧の歩いた道には血が一粒一粒落ちていた。

由梨はその間に鈴を鳴らして、どこかに行っていた。

「カハッ！」

由梨は血を吐き、倒れる。

「ほらほら、僕に傷一つ付けられてないよ？」

君はこの程度の人間なんだあゝ」

不気味に笑った。

ゾクッ！

「!?!?。」

由梨は冷や汗が出た。

「……。」

「!?!?。」

由梨は相手に思いつきり腹を蹴られる。

壁までぶっ飛ばれる由梨。

「ガハッ！」

「由梨の血の匂い！」

劉禰が狼の姿になって、由梨の元に行く。

「君には、失望したよ。もう興味が無くなった。サヨナラ。」
相手がナイフを由梨に向けて投げる。

「……。」

由梨は静かに目を閉じる。

カキンッ！

「!?!? 劉禰……。」

「お前、由梨に何してるんだよ！」

由梨に手を出すな！」

劉禰が牙でナイフをはじいた。

「由梨！」

「濤と凌!?!?」

「劉禰！」

滯と凌が由梨の元に来た。

由梨は気を失っていた。

「何ごとよこれ？」

「大丈夫か？由梨！」

蒼弥は軽く由梨を揺らす。

「…だ…れ？」

由梨はかすかに蒼弥の顔を見た。

「えっと…会った事なかったか？…。」

「あなた、どちら様？」

「君に名乗る必要は無いよ」ニコッ

相手は緋那に笑いかける。

「だけど、この子は貰っていくよ」ニコッ

由梨をお姫様抱っこする。

「…あら？名前も無いのかしら？」ニコッ

「ちよっ…それは困る！」

由梨を奪い取る。

「それは、幻覚。じゃあ。」

相手は由梨を連れて、消えた。

「由梨！」

15話 守る人（前書き）

久々更新です！

15話 守る人

「由梨の匂いがまだ、かすかにある。だけど、追うのは無謀すぎる。」

〓森にある不思議な屋敷〓

「由梨、寝ててね。」

相手は由梨にキスして何かを飲ませる。

由梨は眠りに付いた。

〓学園〓

「まずは、皆と話さないかね…。」

「それが一番だよ。」

「…何か、凄い事になってるね。」

「この気配をたどったら飛べるのですが…。」

タッタツ…。

「ハア…気配が変わった…チツ…何かやらかしたな。あいつら…。」

瞬彗は胸騒ぎのせいで、学園にのろのろ戻った。

「白、黒何か分からんのか？」

梓が白と黒に聞く。

「僕は、お手上げだよ。気配が風のせいで消えかかっているからね。」

「俺もだ。」

「瞬彗…。」

梓はそっとつぶやいた。

「迷えば迷うほど…人は…闇に落ちて飲まれて死す…。」ボソッ

タッ

「ちょっ…深紅？」

深紅がどこかに行く。それを追う劉禰。

「あなたは何でここにいるのですか？」

「なんだ…騎士団娘か？…。」

「傷の再生が遅いですね。」

「今がチャンスじゃ無いのか？今の俺ならお前でも倒せるぞ。」

「私はあなたを、処刑しに参りました。」

「俺と雨真魏、いずれはどちらかが消える。」

「どちらかが消えるって…どういう…。」

「劉禰！？いつから…うう…ゲホッ！」

瞬慧から大量の血が流れる。

「瞬慧…いえ…裂闇志木！」
さやみしき

「えっ？…志木って？瞬慧？…。」

「俺はお前たちといずれ、戦う。それだけは覚悟しておくのだ…劉

禰。」

「えっ！？瞬慧！いつか戦うってどういう…。」

「瞬慧と言う名は…白が付けてくれた名前だ…。」

瞬慧は闇の中に消えた。

「志木！」

「白…。」

「まだ、傷が…。」

「志木じゃない…瞬慧。」

瞬慧はどこかに行こうとする。

何で…いつも…僕は…。

「志木！」

「なんだ？…。」

白が瞬彗を呼び止めた。

「行くなよ…。」

「！？…。」

「何で…志木が行くんだよ！何で何でいつも…。」

「白…強くなってくれ。」

「志木！…。」

「俺は、もう白の知っているあの時の志木じゃない…」
瞬彗は闇に消えた。

僕は守らないと…志木を僕が…。

「白！」

黒が白の元に来る。

「白！黒！瞬彗見なかった？」
「…。」

16話 闇無限 白編Ⅱ前編（前書き）

白の過去編です！

16話 闇無限 白編Ⅱ前編

僕の家はとても大きなお城のような、家だった。

そのせいで、両親は金にしか興味がなかった。

僕が黒と会うまでは僕はずっと、一人でただ監禁されていた。

とても寒くて、苦しくて、寂しくて、暗くて、誰も居ない。

声もしない。誰もこない。

僕は何度も逃げ出した。だけど、すぐ、つかまって。

何度も何度も逃げてはつかまって、暴力を振られた。

僕にはいつしか闇が生まれていた。

憎しみと恨みで出来た僕の闇。

そして、僕は……

憎しみを爆発させて……

人々を殺した。

血が見るのが好きだから。

殺すのが好きだから。

楽しい事が好きだから。

だから……僕は……

大切な人も殺してしまった。

無意識に殺してしまった。

悲しかった。寂しかった。

僕をずっと信じてくれた…人を…。

僕は…殺してしまった。

そして僕は…双子の兄に会った。血も繋がっていない。
僕とあの人と一緒に匂いがした。

そして僕は出会ってしまった…。

あの日、あの研究所で…『志木』と同じ気配をした『雨真魏』とい
う少女に…。

17話 闇無限 白編Ⅱ後編

僕は『危険人物』^{きけんじんぶつ}とされ。

とある、気味の悪い研究所に放り込まれた。
別に怖くもなかった。

こんな暗い部屋で一人になった方が、まだよかった。
その方が、よかった。

「君、いっぱい怪我してるね。」
一人の少女が声をかけてきた。

僕と一緒に研究所に放りこまれた死体。志木の死体は僕と一緒に研究所に放り込まれた。

「この人、死んじゃったの？」

「えっ?…。」

「可哀想…。」

「……。」

僕が志木を殺した、なんてこんな知らない人に言えなかった…。

だけど、一つだけ似ていた。

志木に…。

暖かさと優しい匂いがした…。

「私、緋鬼瘤雨真魏。よろしくね」ニコッ

「僕は…青柳…白。」

「白君か、まずはその傷の手当てからしよう」ニコッ

「うん…。」

雨真魏はとても優しくかった。

こんな暗い研究所で一人でいるなんて…”寂しく”ないのかなって？…。

「雨真魏はいつから、ここに居るの？」

「覚えてない。」ニコッ

「どうして？」

「目が覚めたらこの研究所に居たんだ」ニコッ

「そっか。」

ガラッ！

「！?…。」

「誰か来た、お客さんかな？」

「ハア…ハア…白！」

「黒兄様…。」

研究所に来たのは、黒だった。

息が荒く、足は酷く怪我をしていた。

「どうして?…こんな所に?…。」

「お前が心配だったんだよ！」

「!?…。」

「違う…色。雨真魏と違う色。」

「えっ?誰？」

奥から、一人の男の人が出てきた。

「この人は、幸杜梓。私の友達だよ」ニコッ

「青柳…白。」

「青柳黒だ…。」

「白の色は目の色と一緒に、とても優しい向日葵の色。」

黒の色は目の色と一緒に、必死で心配症な自然の色だぜ！」ニコッ

「僕が向日葵!?!…って…黒兄様が心配症?!…。」

「なっ！…ちが！違うぞ！白！！！！！！」

黒は顔を真っ赤にした。

「じゃあ、ここは4人の思い出の場所にしましょう」ニコッ
「思い出の？…。」

「場所。」

「はい。白にはこれ。黒にはこれをあげるよ」ニコッ

雨真魏は白と黒にお揃いのガラスのペンダントを渡した。

「ありがとう！雨真魏！黒！おそろいだよ」ニコッ

「！？…やっつと、名前で呼んだな、白」ニコッ

そして、僕達は旅に出てそれっきりでそして学園に雨真魏と梓がいるという噂を聞いて

学園に入った。

僕は、友達を仲間を…守る！…それが僕の誓いだから！

18話 分かり合う

白と黒はとても悲しく暗い顔をしていた。

「二人とも、どうかしたの？」

劉禰は瞬慧を探している様子だった。

「早く、瞬慧探せよ。っと！気をつけろよ！」ニコッ

「……。」

黒の微笑みは心から笑っていなかった。

「何で瞬慧、何所いるか分かるくせに隠すわけ！

確かに、私は役に立てないと思うよ！

だけど…私は私なりに頑張って…みんなの役に立とうとしているの！」

「いきなり怒るなよ！」

「…劉禰に何が…分かるんだよ。」

「白、やめろ。」

黒が白を止めようとするが…。

「僕はずっと笑ってて欲しかった！

ずっとずっと…僕と一緒に…僕の隣であの向日葵のような笑顔が見たかった！

何で仲間でもない！他人に協力しないといけないんだよ！

僕には分からない…なんで僕は…僕は…。」

白は大声で劉禰に言った。

「協力するのは当たり前でしょう！だって白と黒と私は友達でしょう！
う！」

だけど、何？白は私の事！ずっと邪魔者扱いしてたの！？」

劉禰はなきそうな顔で言う。

「友達じゃない！仲間でもない！だから、協力なんてしないよ！…。
化け物も人間も一緒じゃん！ただ、他人を裏切るだけ！
どうせ、劉禰だって、僕の事。裏切るんでしよう！？」

白も泣きそうな顔をして言った。

「私は今まで1人でいて！皆と初めて友達になれて嬉しかったけど…

白だけは私の事そんな風に思ってたんだ！」

ポルンツ…ザッーザッー

雨が白と劉禰と黒をぬらした。

「何が…分かるんだよ…僕に何が…人間もどうでもよかった。

志木以外の人間どうでもよかった…僕にとっては、志木が僕の全
てだった！」

「だったら！気持ちを言えいいじゃない！何で言わないのよ！」

白と劉禰は必死だった。

ポタンツ

白の目には、涙がこぼれていた。

「僕は…志木が居ないと…永久に迷路をさ迷うんだよ…。」

「喧嘩、している場合ない。瞬彗を追うぞ…。」

「あっ！瞬…いや…志木！」

「白！おい！」

「そうだね…追わないと…。」

皆瞬彗を追っていた。

〓その頃〓

「ハア…ハア…。」

「止まって下さい。」

「お前は…。」

「瞬慧…いや、もう志木と言ってもいいでしょうか？」ニコッ

「勝手にしろ！俺は、まだつかまらない！」

瞬慧は氷の刃を構える。

「いた！、瞬慧！」

19話 助っ人

「って、劉禰！お前ら！？」

瞬慧の後ろから劉禰達が来た。

「志木…。」

「白…。」

「志木…えっと…。」

「ごめん…。」ボソッ

「えっ？」

瞬慧は白に背を向ける。

素直じゃないんだから…。

劉禰はちよつと微笑んだ。

〓木の陰〓

「行かないのですか？…。」

「…今の状況は…どうみても無理だろう？…。」

「……。」

「なぜ、瞬慧を欲しがるんだ！」

「志木を欲しがるのは、私の興味本位ですよ。」ニコッ

「興味本位とか、馬鹿だろう？」

劉禰が相手を馬鹿にする。

「志木、私と着なさい。」

「おい！俺は志木じゃねえー！瞬慧だ！」

「！？…瞬慧…。」

「チッ…瞬慧を渡すわけないでしょう！」

劉禰が狼の姿になる。

「はぁ…俺もう、限界。」

「瞬慧!？」

瞬慧が地面に座り込む。

「お前は…俺の事、憎いんじゃないのか? 白?」

「?!…瞬慧…。」

「まあ…俺は…好きだけど…魔力戻るまで戦ってくれ!」

「アイアイサー! 黒!」

「おう!」

白と黒は武器を構える。

「なら、私は瞬慧を守る! あいつは二人に任せるわ!」

劉禰は瞬慧の前に立つ。

「僕、ちょっと楽しくなってきた!」

「俺も!」

白は相手に弾を連発で撃つ。

それと同時に黒が相手に一瞬にして近づく。

「あなた達は、私には勝てません。」

「うっせ!」

黒は剣を振る。

「瞬慧は私が…守るんだから!」

「ZZZZ」

瞬慧は木にもたれて寝ていた。

「姉様!…行きます!」

横から、深紅と深香が突っ込んできた。

そして黒はぎりぎりセーフでよけた。

「おい! 深紅! 突っ込んでくんじゃねえーよ!」

「それが、戦ですよ! 黒さん!」

「チッ! だから、困るんだよ。騎士の女は…。」

「黒! よけてね!…!!」

「ん? うわぁ!」

黒の下から白が大きな銃を召喚して何発も撃っている。

「お前もあぶねえーよ！」

「あはははは、だからよけてって言ったじゃん」ニコツ
「ムカツク…。」

「あっ！待ちなさい！」

相手が、劉禰と瞬慧の目の前に居た。

「瞬慧！」

「あなたを処刑します！」

「私は、瞬慧を守る！…あんたなんかには負けない！」

劉禰は牙で攻撃する。

「雑魚は、本当に鬱陶しいですね。」

「！？…。」

「ああ…?!」

深紅と劉禰の首を絞めた。

「うう…?!?…。」

「チッ…?!?…。」

バキューンッ！

相手の手に白の弾が貫いた。

深紅と劉禰は首を放された。

「お前の相手は僕だよ。忘れるな！」

「姉様！行きます！」

深紅と白が相手に向かう。

「雑魚はとつとと死になさい！！！！！！！！！！」

深紅、白、黒、劉禰を一瞬にして、壁の方に吹き飛ばした。

「！？…ガハッ！」

「ゲホッ！ゲホッ！…。」

「うう…瞬慧…。」

「ゴホッゴホッ…。」

白、黒、深紅、劉禰はそのまま血を流して、気絶してしまった。

「瞬彗…やっど。」

瞬彗に近づいてくる。

そして剣を出した。

そして、瞬彗を刺そうとする。

「ZZZZ」

「瞬…彗!…。」

白の小さな声が聞こえた。

カキンッ!

「本当に…お前ら、何してるんだよ。」

梓が瞬彗の目の前に来て、剣を剣で受け止めていた。

「チッ…次から次えと!…。」

「俺の許可なしに、学園の奴に怪我させてんじゃねえーよ!」

20話【番外編】料理（前書き）

再び番外編です！

今回は【料理編】！劉禰と瞬慧が主役です！

20話【番外編】料理

「よっしゃ！やるか！」

「瞬慧、やる気満々だね！」

「あったりまえだ！料理は得意分野だ！」

「そうなの！？」

劉禰と瞬慧はエプロンをして、なぜか、台所に立っていた。

「はあ……どうするよ。」

「劉禰の料理は不明として、瞬慧のあの殺人鬼の料理は半端ないよ
お」

10分前――――。

「おなかすいたあ」

「白、それ言うな。俺も腹減ってるし、梓^{シェフ}料理長は？」

「今日は、年に一度の休日だから来てない。」

「えっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ん？、今日だけは、自分自身の料理くらい作れよ。」

「なっ！？」

白と黒はとても暗い空気になっていた。

「そっか、黒と白は料理できないのか？」

「なら、俺が作ってやるよ！」

「なっ！？」

「瞬慧！？」

雨真魏が瞬慧に変化していた。

「なら、劉禰と瞬慧、今日の料理当番な。」

「了解！」

「おっしゃ！」

という、事だ。

「あずあずの馬鹿!!!!!!」

「あずあず!言うな!」

「はぁゝゝそれにしても本当に腹減ったゝ」

三人の会話は廊下に響いていた。

「三人とも、どうかしたの?」

滯が廊下から三人に話しかけてきた。

「兄様?」

深紅も来た。

「いやゝ別に。」

しょうがない!もう、こいつらにゝ殺人鬼の料理を食わせないと!

「そう?なら別にいいけどゝ。」

「そうですか?ゝ別に構いません。」

深紅と滯はあまり、気にしなかった。

「何をしているんだ?」

「ご飯まだなの?」

緋那と蒼弥が来た。

「いや!、今瞬慧と劉禰作ってるから!待て!」

「そう?なら待ってよおゝ」

「そうだなゝ。」

蒼弥と緋那が椅子に座った。

――台所――

「おお!劉禰、やるぞ!」

「うん！」
ニコッ

「」

瞬彗は鼻歌を歌いながら…。

魚の目玉や、動物の骨、皮などを次々に入れて行った。

そして、瞬慧は紫色のスープを味見した。

「うん！おいしい！」

瞬慧は一品目の料理を完成させた。

「うん。これとこれとこれ。」

劉禰は極普通の料理の作り方だった。

そして一品目を作り上げた。

そして、料理が完成した。

「料理完成したぞ！」

そして、みんなの前に料理が出て来た。

「なっ！！！！！！！！！！」

全員が後悔と絶望の顔になった。

瞬彗の料理は普通に魚の大きな目玉が浮いていた。

劉禰の料理は高級な料理だった。

そして、皆先に劉禪の料理を食べた。

そして深紅、黒以外は皆倒れた。

「うっげー！」

「まずい。」

気絶しているものもいた。そして天国に言っているものも居た…。

続いて、瞬慧の料理…。

パクッ

瞬慧の料理を食べる深紅と黒。

「おいしいですよ。」

「普通。」

と二人のコメント。

他の人が食べると…。

魂が抜けたらしいです。

こうして、不幸な料理の日は終わったのだった。

21話 守りたいから

「おやあー、これは梓じゃないですか。」

「俺の名前を気安く呼ぶな!」

「おやあー、私には厳しいですね。」

「うっせな!」

「あなたには罰をあたえます。」

「チッ…。」

どうする…俺戦えないし…。

相手は梓の方に剣を振る。

梓は軽々とよける。

「おや? どうしました? 私相手に素手はさすがにきついですよ。」

「…うっせ!」

武器持っても、俺、ヘタレだからなあ…。

シュッ!

「チッ…。」

頬に剣がかすった。

頬から血が出る。

「はあ…私も少し遊び過ぎました。では。」

「あっちよっと待て!」

「…梓やめろ…。」

凜が後ろから、梓を止める。

「チッ、手当てしてやれ。」

梓が指示すると皆動いてくれる。

重傷なのは、白と黒と深紅と劉禪だった。

「Z Z Z Z」

瞬彗は寝ていた。

起きる気配がまったくなかった。

「はあゝ…瞬彗…。」

「Z Z Z Z」

梓は瞬彗をお姫様抱っこをした。

「全員、学園に戻るぞ！」

「はい。」

そうして、長い一日は終わった。

パチッ

「ん？…あれ？私…いつの間に寝てたんだろう？」

瞬彗ではなく、雨真魏の人格で目を覚ました。

「！？…皆…凄い怪我！？」

雨真魏の隣には、大怪我をした、白達がいた。

ガラッ

梓が入ってきた。

「梓…！？…梓も怪我、してる！」

「ああ…かすり傷だ。」

「だけど…。」

雨真魏が悲しい顔をする。

「…大丈夫だって！雨真魏は心配すんな」ニコッ

「梓…ごめんね…。」

雨真魏は部屋から出て行った。

「はあゝ…間違えた…雨真魏絶対…落ち込んでるわな…。」

〓廊下〓

私は、何をしてたんだろう？皆が怪我をしてたのはなぜ？…。
何で…私、こんな時に何も知らないの？…馬鹿みたいじゃん…。

ポタンッ

「雨眞魏？」

「！?…。」

雨眞魏は顔を拭く。

「どうかしたのか?。」

「…いや!…な…なんでもないよ」ニコッ

「そうか?…ならいいが…。」

少し…ないているように見えたが、気のせいかな?…。

「じゃあ、私、用事あるから!じゃあね」ニコッ

「あっ…雨眞…?!。」

雨眞魏は蒼弥に背を向けてどこかに去った。

私は…本当に何も出来ないの?…瞬慧…あなたは一体…何をしたの?
?…。

ドンッ!

雨眞魏が誰かとぶつかった。

「梓…。」

「大丈夫か?」

「お前、目が赤いぞ?」

「あっ…ちよっとね。」

「…悪かったよ…。」

「えっ?…。」

「俺さ…。」

「??…。」

梓が真剣な顔で雨真魏に言う。

「雨真魏は俺が守るからな!」

「えっ!?!…あっ…えっ?!」

雨真魏はなぜか、顔を真っ赤にさせた。

「なんだよ…その反応?!」

梓も雨真魏を見て、顔を真っ赤にさせた。

「梓が…恥ずかしい台詞言うからでしょう!?!」

「俺は!…お前のためを思っ…。」

ハッ!

「……。」

少しの間、沈黙が続いた。

「だけど、ありがとう。梓」ニコッ

「!?!…。」

梓は顔を真っ赤にさせた。

22話 学園パーティー 前編

「あれ？雨真魏、朝から何してるの？」

「劉禰ちゃん…。」

朝、起き立ての劉禰。

そして、雨真魏は朝から折り紙をやっていた。

「折り紙だよ？」

「それは分かるけど、何で今日に？」

「ああ…：ちよつとね」ニコッ

「??.」

劉禰は首を横にかしげて、どこかに去る。

「雨真魏、これでいいのか？」

「うん。ありがとう。梓」ニコッ

梓は大荷物を持って、雨真魏に話しかける。

「本当に、俺と雨真魏二人だけですんのか？」

「白と黒はこの部屋の見張り番なの。しょうがないよ」ニコッ

「深紅は?..」

「深紅ちゃんは、お疲れなの！だから梓と私だけ！」

「ああ…：はいはい。」

梓は大荷物を机の上においた。

今日は、学園でパーティーをしようと思います。

「あれ？ロビー…：立ち入り禁止になってんだけど…。」

「そうだな。」

滯と凌がロビー前で看板を見る。

「どうしたんだ?..」

「どうしたのかしら?..」

その後ろから緋那と蒼弥が来た。

「ああ：蒼弥と緋那。この看板見てくれよ。」

「??:…ただいま、立ち入り禁止。」

「どういう事かしら?…」

「さあーな。」

「いいから、もう入っちゃいましょう。」

「おい：緋那。」

緋那がロビーに入ろうとすると…。

バキューンッ!

銃声の音が緋那達を沈黙にする。

「えっ!?:…白?」

「って、黒まで?!」

白と黒が武器を構えていた。

「お前ら、何してるんだ?」

「って、仲間に何してるのかしら?」

緋那が怒る。

「ここは、立ち入り禁止。分かってる?」

「なっ?!…。」

白が黒い顔で笑った。

緋那が白の顔を見てイラついた。

「なぜ、入れないんだ?」

「ああー：今、取り込み中だ。」

「僕達がこの番人!」ニコッ

「なっ!?:…。」

「いつになったら、入れるんだ?」

凌が冷静に聞く。

「夜だね。」

「そうか。濡ー部屋に戻ろうぜ。」

「あっ：うん!」

濡と凌が自分の部屋に戻った。

「じゃあ俺達も戻るか？」

「……ええ…そうね。」

緋那は1回白をにらんで部屋に戻った。

「雨真魏達、大丈夫かなあ…??」

「知るか。」

「ロビー」

「雨真魏、ほれ。」

「おお！ありがとう」ニコッ

「2人で夜までに出来るのか？」

「分からないけど、無理でもやる！」

「はあ…分かった。」

梓と雨真魏は黙々と作業を進めていた。

「何か、思ったんだけどさ。」

「ん？何？白、改まって…。」

「いや…だからあ…ううーん…。」

白と黒はジュースを飲んでいた。

「この学園、おかしい事件とか、おかしい事とか、おこりやすいよね。」

「それもそうだな。それも偶然だろう？…。」

「偶然じゃなかったら？…。」

「!?!?。」

「もしも…必然だとしたら？…。」

白が黒に近づく。

「白、黒。何してんの？こんな所でいちゃつかないでよ。」

劉禰が白と黒を見て言う。

「別にいちゃついてない!…。」

「そうだね。」ニコッ

「あんたら、禁断の双子かよ…。」

「そうかもね」ニコッ

白は笑って流す。

「そんな訳ねえーだろうが。」

黒はいやみっぽく流す。

「はははは、それもそーかい。って入っていい?」

「駄目だよおー」

「何で?」

「駄目なものは駄目。以上。」

「白のケチ!」

「なんとでも言えば…。」

ガタンッ

ロビーのドアが開いた。

「あっ…劉禰ちゃん!?」

「雨真魏?! 何で…立ち入り禁止って…。」

23話 学園パーティー 後編（前書き）

新しい小説始めようと思います！

皆さん是非、見てくださいね^^

23話 学園パーティー 後編

「劉禰ちゃん!...」

「何で、雨眞魏だけずるいよ! 私も入れてよ、白、黒。」

「駄目だよおー」

「そうだ。これは命令だからな。」

「命令?...誰の?...」

「!?...」ギクツ!

「まあ、誰でもいいだろうおー」

「そうだよ」ニコツ

「はあ...分かったよ...じゃあ部屋戻るね。」

劉禰は部屋に戻った。

「はあ...ありがとう。白、黒。」ニコツ

「別に...」

「雨眞魏の頼みだしね」ニコツ

「そっか。じゃあ私、さっさと準備するね!」ニコツ

「うん!」

「頑張れよ。」

「うん!」ニコツ

雨眞魏は部屋に入って行った。

||ロビー||

「梓、飾りつけ、出来た?」

「おう。あと一つそっちは?」

「もう少し...」

「ん。分かった。」

梓は部屋の飾りつけ。雨眞魏は料理全般。

雨眞魏の顔を笑っていた。とても嬉しそうな顔で。

皆のこんな事初めてだな：楽しみだし：嬉しいな！

「……。」

梓はちよつと寂しい顔をした。

「梓？…。」

「あつ：ちよつと飲み物買ってる来る。」

「うん！行ってらっしゃい」ニコッ

「おう。」

梓は部屋を後にした。

〓どこかの部屋〓

「ねえ、蒼弥。」

「ん？なんだ？」

「何か、妙に白と黒おかしいと思わないかしら？」

「どうしてだ？…。」

「何か、隠してるって思うんだけど…。」

「気のせいだろう？…。」

蒼弥は本を読んでいて緋那の話をあんまり聞かなかった。

「乃亜ー久しぶり」ニコッ

「劉禰！お久しぶりですの」ニコッ

「何してたの？」

「ちよつと、用事だったの」ニコッ

「そう。ならいいけど」ニコッ

乃亜と劉禰が二人、嬉しく会話していた。

「はあ…：僕、疲れた。」

「俺も。」

「ほら。」

「梓…。」

「うわぁー、ジュースだぁー」

「サンキュー！」

梓は、白と黒に飲み物を渡した。

白と黒は飲む。

「お疲れ様。…。」ボソッ

「!?!?。」

梓は、部屋に入って言った。

白には一瞬、何かが聞こえた。

「どうした? 白?」

「いや…」ニコッ

本当に…素直じゃないね…アズアズ。

「チツ…。」

梓はちよつと頬を赤く染めていた。

「梓、おかえり」ニコッ

「おう。料理、手伝うぜ。」

「ありがとう、助かるよ」ニコッ

雨真魏を梓は二人で料理をしていた。

そして——午後6時——

「白!、いつになったら入れるの?」

「7時じゃないの?」

「後、一時間も待たなきゃならないの!?!?」
皆苛立っていた。

ガラッ!

ロビーのドアが開いた。

「皆、お待たせ、さあ！入って」ニコッ

「雨真魏：何？」

皆、ロビーに入った。

「うわぁ！？…。」

皆ロビーに驚いた。

「何、今日は何かするの？」

「今日はね、パーティーをしたいなぁーって…。」ニコッ

雨真魏が皆に言う。

「雨真魏、ありがとう」ニコッ

「！？…。」

雨真魏は頬を赤く染めた。

こうして、学園パーティーは楽しく、面白く、終わった。

「こんな楽しい事も楽しいなぁ…。」ニコッ

23話 学園パーティー 後編（後書き）

雨真魏の口調が敬語になりかける W W
何でだろう??
W W

24話 SS級犯罪者

私は…誰?…。

お前は雨真魏。死神とヴァンパイアの血を引く者。

違う…私は…。

お前は…狙われている…いずれは、皆を見殺しにする。

!?!?…待って!?!?…どういう事!ねえ!待ってよ!ねえ…皆殺しにするなんて…いやだよ…。

ハッ!

雨真魏が目を覚ました。

「雨真魏、大丈夫?」

横から劉禰が心配そうな顔をして、聞く。

「うん。大丈夫だよ」ニコッ

「そう?うなされてたから、驚いたよ。」

「そんなに、うなされてたかな?」

「うん。怖い夢でもみたの?」

「まあ…そんな感じかな」ニコッ

「何かあったら、相談してね」ニコッ

「うん!」ニコッ

ドカ—————ンッ!

下の部屋から凄い音がした。

「何?」

「ふぁゝ…眠い。」

白が起きてきた。

「し…し…白！…！！！！！！！！」

「うわぁ！？」

黒鳥が白に抱きついた。

「うわぁ…黒鳥…！？」

「相変わらず可愛いなぁゝお前！」ニコッ

「うう…やめろ…黒鳥…。」

白は顔を真っ赤にさせて言う。
バシッ

「あれ？…。」

黒鳥の手を誰かがはじいた。

「黒鋼。あんまり俺の白に触るな。」

「黒…。」

「へっへー…相変わらず、ツンツンだねえゝ黒りんゝ」

「黒りん！言うな！ボケ！？」

「あれれゝにゃははは。」

「チッ…。」

白はちよつと頬を赤く染めていた。

「どうした？白？」

「！？…べ…別になんでもない…。」

「？？…。」

「にゃはははは、これからよろしくな」ニコッ

25話 騎士と犯罪 前編（前書き）

更新しなくて、ごめんなさい＞＜！
物語がなかなか思いつかなくてWW

25話 騎士と犯罪 前編

[illegible]

「えっ!? 何の音!?」

朝から物凄い大きな音が鳴った。

その音のせいで雨眞魏が目を覚ました。

「どうかしたの？」

「あつ、雨眞魏。おはよ」ニコッ

梓が居た。

「梓、何あの大きな音？」

「ああ……あれだ。」

「えっ？」

梓が指を差す方を雨眞魏が見ると。

「黒鳥！ あなたを牢屋にぶち込みます！」

「無理だっつゝだつて、わしにはやる事があるからなあ」

「そんな言い訳どうでもいいのです！姉様！」

「チツ：相変わらず、デカイ人型ロボ連れてんだな。」

「姉様はそんな名前なんかじゃない！」

深紅が攻撃してくるが、黒鳥は軽々しくよける。

「何で、騎士の仕事しないで。犯罪者に手を貸した？」

「! ? : ○」

「何で、お前は犯罪者に手を貸す？ それはお前も犯罪者になると分かってか？？」

「! ? : ○」

深紅は驚いた顔をして、黙っていた。

「じゃあさ、1回死ぬか？深紅？」

「！？。。」

「わしが殺してやる！」

ジャキッ！

「雨真魏？。。」

「！？。。」

深紅と黒鳥の前に一本の剣が地面に刺さった。

「いい加減にしろ！お前ら！朝から鬱陶しい！
うるさすぎて寝られないんだよ！」

「瞬慧！？。。」

「チッ。。」

瞬慧のおかげで黒鳥と深紅は治まった。

”死ぬ”…私が？…姉様を残して…死…。

「……。」

瞬慧は深紅の何かを知っていた。

人は…何か無しでは生きれない…。

「！？。。」

「瞬慧？どうかしたか？」

「いや…なんでもない。」

「そうか、それならいい。」

「おう…先に行っててくれ。」

「おう。」

瞬慧はどこかふらりと歩いていた。

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！…。」

俺の体も…もう…。

人は何かなしでは生きれない。

人は何かを隠して生きている。

人はいつでも半信半疑で生きている。

「今日は…ここまで…また、会えるかな…雨真魏…」

26話 騎士と犯罪 中編

「はぁ…暇だ…。」

黒鳥は自分の部屋のベッドで寝転んでつぶやいていた。
黒鳥は一人部屋だった。

「兎…どうしたらいいのだろうか？」

黒鳥の服の中から黒い兎が出てきた。

「何が？…。」

そして、兎は喋りだした。

「わしは…なんで、罪を重ねるのだろうか？」

「知らないわよ。なら騎士へ言って、つかまるの？」

「それは無理な話だ。わしにはやる事がある。」

「そう、なら。罪を重ねる事ね。」

「はぁ…相変わらず、兎は言い方がきついなぁ…」

「それもしないと、あなたが立ち直らないでしょう？」

「それもそうだな…。」

「ふん…私は、寝るわ。」

「分かった。」

兎は黒鳥の服の中に戻って行った。

「はぁ…瞬慧、居ないのかぁ…」

「なんだ？」

「うわぁ!？」

黒鳥の部屋の後ろの窓から瞬慧が顔を出した。

「何で、そんなに驚くんだった？お前、俺を呼んだろうが。」

「あっ…ごめん。」

「チッ…。」

「で、瞬慧は何してるんだ？」

「別に、ただ…暇だからな。」

「ふん…。」

黒鳥が窓から飛び降りた。

「お前、何してるんだ？」

「わしの相手は、あの子がやってくれるんだってさあ」

「…深紅…。」

「黒鋼黒鳥！あなたは私が処刑します！」

「やれると思う？君が？」

「黙りなさい！」

「あっおい！」

黒鳥と深紅は戦うオーラを放っていた。

「騎士団として、あなたを見逃す事は無用！排除します。」

「怖いねえ〜だけど、その瞳たまらんな。」

黒鳥はとて不気味な笑った顔を見せた。

「姉様！
ねえさま

「あれえ〜自分は戦わないのか？しょうもないねえ〜」

「うるさい！あなたに何が分かるんですか！あなたに…犯罪者のあなたに！」

「分かるわけじゃないじゃん。人間なんてとてももろい。」

「うるさい！人形！
パペット

深紅の持っている、人形が巨大化した。

「ほえ〜、その人形、戦うんだあ〜意外な情報ゲットッ！」

「うるさい！姉様！人形！
あね

深紅の人形と深香が黒鳥に襲い掛かる。

「遅い。何もかも、遅い。」

「!?!?。」

「君もだよ…深紅。」

深紅の目の前に黒鳥が居た。

「はい。終了。」

「!?!?」

深紅の首に肩車を置く。

「?!?!?何で?!?」

深紅はそのまま座り込んだ。

「何で?!?!?はあ…君は普段、とても真面目だけど。頭に血が上ると我を忘れ、

何でも発動しちゃう癖があるんだね。」

「!?!?!?」

ポタンッザーッ

雨が降って来た。

「?!?!?!?!?私は?!?!?」

「わしは、君の事情など知らない。だけど君は今、やりたい事があるんだったら

わしは、深紅に協力する。」

「!?!?!?!?」

「わしを仲間だと思って欲しい。」

深紅に手を差し伸べる黒鳥。

「!?!?!?!?」

深紅の頭にうつったのは、幼い頃の記憶…。

「僕の仲間になろうよ、深紅」ニコッ
一人の幼い少年が笑った、姿。

「うう……うう……はい……仲間……です。」

「泣くなよ。深紅！」

「うう……。」

黒鳥は優しく雨の中、深紅をそっと静かに抱きしめた。

”仲間”それは”絆”で出来た欠片。

「もうすぐ、会えるかな」雨真魏」ニコッ

後編

「姉様！」

「深紅、おはよう」ニコッ

「はい！おはようございます！」 ニコッ

姉様……凄く笑つてゐる……凄く楽しそうに……。

「姉様！姉様！嫌…父様！父様！やめて！姉様！」

「深紅、お前は模造品。だから死ね。」

「嫌……姉様！姉様……嫌！イヤアアアアアアアア！！！！！」

ハ
ツ
!

! ? : ○

深紅はゆっくりおきて、頭を抱えた。

「夢……」

隣には姉の深香が立っていた。

「姉様……ごめんなさい……」

⋮

コンツコンツ

「はい？
…。」

「あつ：深紅ちゃん、雨真魏だけど：朝ごはん出来たから、呼ぶに
来たんだけど。」

ガチャツ

「深紅ちゃん。」

「分かりました……今行きます。」

「うん…。」ニコッ

「雨眞魏さん?…。」

ボタンッ!

「!?!雨眞魏さん!雨眞魏さん!」

雨眞魏が倒れた。

「どうしたの?雨眞魏!?!」

「劉禰さん…。」

深紅は不安な顔をしていた半分焦りを見せていた。

「大丈夫、雨眞魏は大丈夫だから。」

「はい…。」

「姉様!…姉様!嫌!…嫌!姉様!…姉様!…!…!…!」

あの頃は何も分からなかった。

何も、誰も教えてくれなかった…。

私が…”模造品”だから…私が…”処分品”の出来損ないだから…。

「深紅?。」

「……。」

「深紅?」

「…痛ッ!」

「深紅!?!どうしたの?大丈夫?」

「あっはい…。すみません。」

深紅は自分の部屋に入って行った。

「……。」

深紅の腕を見てみると、道化師ロハの模様の付いた黒いマークがあった。とても濃く書かれていた。

「……。」

深紅はゆたりを座り込んだ。

タツタツ

「深紅に、雨真魏に、白は、模造品。もう引き取るか。」ニヤツ

「姉様……。姉様……。寂しい……。」

バタンツ

深紅はそつとドアの前に倒れた。

「瞬慧?!……。」

「ん?…劉禰か?飯か?なら俺は食べに行く!じゃあな!」

「ちよっ!瞬慧!」

瞬慧は食堂に向かった。

そんな瞬慧を追いかける劉禰。

「ゲホッ……。」

「大丈夫?風邪?」

「たいしたことない!大丈夫だ!」

「そう?ならいいけど……。」

雨真魏の憎しみが…また増してるな。

28話 闇の住人

真っ暗な部屋。その部屋に一つの椅子が置いていた。
その椅子に座っている。女の子。

「ねえ、咲く。もう行っちゃおう。会いたくてたんない。」

「まだ、待ってください。」

「はあ……暇だなあ」

ねえ、雨真魏。あなたはいつ死ぬの？…。

「模造品。」

「ゲホッ！…ゲホッ！ゲホッ！」

「ちよっと、瞬彗！大丈夫？」

「志木！大丈夫？」

「あっ…大丈夫だ。ただの風邪だ。」

「もう一週間だよ。そんなにせきが続くわけないでしょう？」

「別に、せきが出るからって、あまり気にする事はないだろう？」

「それもそうだけど…瞬彗。」

「もう、心配するな！俺は平気だ！ちよっと外の空気を吸ってくる。」

「あっ！瞬彗！」

「…。」

瞬彗は逃げるように学園の屋根に行った。

「はあ…。」

「何をそんなにため息になるんだ？」

「ん？…黒か？」

「そうだけど、何か、鈍くなってる。」

「何がだ？」

「反応、判断、行動が。」

「！？…気づいていたか…。」

瞬彗は深刻そうな顔をした。

「何か、隠してるだろう？」

「…どうだろうな。」

「なんだよ、それ。」

「ゲホッ！ゲホッ！…ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

「おい！大丈夫かよ？」

瞬彗は座り込んだ。

「大丈夫だ…ただの風邪だ。」

「そんなにもせきが激しいか？」

「俺のせきはそんなものだ…。」

「そうか。水と薬持ってくるから。ここにいろよ。」

「分かっている。黒。」

薬と水を取りに行こうとする、黒を引き止めた。

「ありがとう。」

「！？…別に…ここから動くなよ！」

「おう。」

黒は顔を真っ赤にして走って下の階に行った。

瞬彗。迎えに来たよお

ドクンッ！

「!?!?。」

バリッバリッ

「学園の結界を…すり抜けたか?…チッ…あっ…黒悪い!」

瞬慧は屋根から飛び降りた。

地面にちゃんと着地した。

「わあーこの結果。凄いやあーだけど。こんなんじや僕を倒せない
よおー」

カキンッ!

剣が重なった音が響いた。

「あれあー、凄い歓迎だね。って久しぶりだね。」ニコッ

「お前!何しに来た!」

「ほえー久々の挨拶がこれって酷くない?志木」ニコッ
「うっせな!」

カキンッ!カキンッ!カキンッ!

――その頃

パリッ!

「瞬慧!?!。」

黒はコップを落として割ってしまった。

「あいつ!…あんな体じゃ戦えねえーだろうが!」

黒はすぐさま、瞬慧の元に行った。

「志木ーあえて嬉しいよおー」

「相変わらず、ウザいんだよ!」

「あれれーもしかして、苛々してる?」

「当たり前だ!」

カキンッ!…

「あっ…傘があー…。」

瞬彗を相手をしている少女は武器である傘が飛ばされた。

「終わったな。」

「それはどうかな？」

「はぁ?…!?!?」

ドクンッ

「ゲホッ!ゲホッ!ゲホッ!ゲホッ!…ゲホッ!」

「貰った」ニコッ

「!?!?」

グサッ!

「志木く僕と行こう。模造品の君と僕で一緒に行こう」ニコッ

「ハア:ハア:お前は:!:」

「はぁ:相変わらず、往生際の悪い。」

グサッ!

「ああ!?!?クッ!」

「ねえ、もっと悲鳴を聞かせてよおく志木!」

「うっせ:。ハア:ハア:」

瞬彗は右肩をグサッと逝かれていた。

大量の血が流れていた。

「志木」ニコッ

「:黙れ!?!?!」

瞬彗は左手で刀を振った。

だけど、軽々しくよけられる。

「まだ、動けるのかあ?。ねえ、そんなに憎しみ、恨みたっぷりだと、

またマークが濃くなる一方だよ。」

「!?!?ゲホッ!ゲホッ!ゲホッ!…うう:ゲホッ」

瞬彗は口から大量の血を吐いた。

「瞬彗!」

「志木!」

「!?!?…白…黒…お前ら…遅すぎ…。」

「志木!」

「瞬彗!」

瞬彗が倒れた。

29話 『仲間だからです。』 (前書き)

今回のサブタイトルは、キャラの台詞にしてみました W W

29話 『仲間だからです。』

「志木！」

「あれ？志木はおねんね？」ニコッ

「お前：何者だ！結界を通り抜けたのか？：。」

黒は驚いて。

学園の結界は絶対誰も通れない。完全防壁。

「あれ？君は、白君？見つけた！見つけたよ！咲く！」ニコッ
「咲く？：。」

少女の後ろから背の高い男が現れた。

「！？：。」

白は一瞬にして、体が震えだしていた。

「おや、ここに居ましたか。白様。お迎えに参りました」ニコッ
「何言ってるんだよ！？」

「白様、帰りましょう」ニコッ

「嫌だ：嫌だ！」

「うう：。」

「志木！」

瞬彗はちよっとおきた。

「白：動けるか？：：。」

「えっ？：うん：。」

「おや、まだ動けますか？」

「お前は白のなんだ！」

「うるさいですね。執事ですよ。」

「えっ！？：：。」

黒は一瞬にして、男に吹き飛ばされた。

「ガハッ！」

「黒！」

「白：：：逃げろ：。」

黒は気を失った。

「さあ、帰りましょう」ニコッ

「嫌…嫌だ…嫌だ…。」

白はとても震えていた。

「うう…お前ら…勝手な事やってんじゃねえぞ…。」

瞬慧はよろよろ立った。

「志木!…。」

「白…黒を連れて…逃げろ。」

「だけど志木が!」

「俺は…もう逃げないよ…大丈夫。」

「志木!」

「いいから行け!…ゲホッ!」

「志木…嫌だよ!」

「白…。」

白は瞬慧の言葉を拒否った。

「僕はもう志木を苦しめたくない!志木を守るのが僕の誓いなんだよ!」

「!?!?。」

瞬慧は白の言葉に驚いていた。

「ん?…岬、何か来ます。」

「分かってるってえ」ニコッ

「姉様!」

「!?!?。」

瞬慧達の目の前には、深紅が来た。

「深紅!?!」

「騎士娘!?!」

「姉様!」

「…。」

深香が白と黒と瞬慧をかかえて学園の方に戻って行った。

「深紅！何してるんだよ！君も！」

「…皆様…今までありがとうございました。」

「!?!?。」

「騎士娘！やめろ！お前ではそいつらは倒せない！やめろ！」

瞬彗と白は大声で言った。

「私は、皆様に会えて幸せでした。だから…。」

深紅の目には一粒一粒涙が零れ落ちていた。

「深紅！」

「仲間だからです。だから、守りたい！だから、大切だと思ったのです！」

今までありがとうございました。姉様も頼みます！人形！パベット」

「やめろ!!!!!!!!!!!!!!」

そのまま、学園には特別な結界が張られた。

深紅はどうなったのかは不明だった。

「梓!…深紅は？」

「いない。もう、敵もない。」

「?!?!?。」

白はとてもショックな顔をしていた。

「……ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

瞬彗はよろよろ立っていた。

「志木!?!?。」

「…白…。」

「うう…。」

白は瞬彗に抱きついて泣いた。

「大丈夫だ。深紅は死んでない。安心しろ。」

「うん……分かってるよ。」

『仲間だからです！だから、守りたい！』

お前から…そんな言葉を聞くとはな…騎士娘…。

黒はとても重傷だった。

それから、一週間。深紅は行方不明。

そして、瞬慧の体もどんどん悪化してきたのだった。

30話 襲撃 前編（前書き）

30話行きました！

30話 襲撃 前編

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

瞬慧は雨真魏に戻っても両方の人格の体が悪化していた。

「大丈夫？雨真魏？」

「うん：大丈夫だよ：劉禰ちゃ：ゲホッゲホッ！」

「あんまり、無理しないでね。」

「うん：。」ニコッ

深紅が居なくなってから、姉、深香にも変化が出てきた。
この一週間、目から血の涙を流していた。

「白、大丈夫か？代わるぜ。」

「僕は、大丈夫。」

「そうか？」

「うん。」ニコッ

「：。」

梓と白は黒の看病をしていた。

「皆、冷たい空気なの。」

「それもそうだろう。」

「そうよね？」

階段で乃亜と蒼弥と緋那が話していた。

「どうなるのかしらね。この学園。」

「本当だな、この学園はとても不思議な事が起きすぎだと思うぞ。」

「それもそうなの！」

「はあ：。」

「：。」

「笑えないの：。」

三人は階段でとても暗い顔をしていた。

「ただだよ。」

「えっ?…。」

「本当なの。」

「深紅の姉が血の涙を流している。」

深香は目から血の涙を流していた。

「ゲホッ…ゲホッ…ゲホッ!」

「雨眞魏!」

「大丈夫なのか?」

「あっ…うん。」

雨眞魏はよろよろ深香の前に立った。

そして深香の手を握った。

「大丈夫…だよ。深紅ちゃんは生きてるよ。お姉ちゃんが信じないと、駄目だよ」ニコツ

「!?!?。」

初めて感情を表に出した、深香。

「大丈夫…夫…あなたが…深…紅ちゃ…んを信じれば…大丈夫…夫。」
ボタンツ!

雨眞魏が倒れた。

「雨眞魏!」

「大丈夫か?」

「大丈夫よ、ただ気を失っただけよ。」

「よかったの」

「ん?…。」

眠っている雨眞魏の目から涙が零れ落ちていた。

「雨眞魏…。」

「部屋まで運んでくる。」

「よろしくね、蒼弥」ニコツ

「…。」

蒼弥は雨眞魏をお姫抱っこして部屋につれて行った。

ブリッ…。

ハッ！？

雨眞魏は目を覚ました。

「雨眞魏？大丈夫か？」

「蒼弥君…うん。大丈夫だよ。」

蒼弥は雨眞魏を下ろした。

「…結界が…。」

「えっ？」

ドカーンッ！

学園の入り口から煙がいつぱい入ってきた。

「キヤァ！」

「なんなの??」

「へえ…、中って結構豪華なんだあ…」

「…。」

「ああ…！雨眞魏…！超ー可愛い！」ニコッ

「!?!?。」

「咲く、自分の目的は果たしてね」ニコッ

「分かっています。」

「ああー、自己紹介するね」ニコッ
タッ！

「お前!?!?。」

「あれ？白君もいるんだあ…」
カチャッ

「あれ?…まだ、自己紹介してないんだけどなあ…」

「うつせな、お前ら何しに来た。」

少女の後ろにいる黒鳥、頭に銃をあてている。

「ええ…？何しに来たって？それは呪マークの者を捕まえに来たんだよお…」ニコッ

「……。」

「まあ、黒鳥は要らないけど。あなたは模造品じゃない、処分品なんだよ。」

「!?…死ね!」

バキューンッ!

「今、心に空気が出来た。」

「!?…。」

少女は銃の弾を軽々しくよけていた。

「チッ!」

「咲く。」

「御意。」

「白! 雨眞魏! 逃げろ!」

「ゲホッ! ゲホッ! ゲホッ! …!?!?」

ドンッ

雨眞魏を気絶させた。

そして、抱える。

「おい! 雨眞魏!」

「チッ!」

「別に、雨眞魏が揃えば、もういらないんだけど、一応、白君もねえ」ニコッ

カシャーンッ!

「!?…なっ!」

黒鳥は鳥の檻に閉じ込められた。

「鴉にはお似合いでしょう?」ニコッ

わしも本来の力が戻れば…!。

「白! 逃げろ!」

「!?…。」

「白様、行きますよ。」

L

•

9

L

1

•

八

1

•

—

1

•

升

L

•

•

•

—

I

六、

夕陽

抵

)

L

פא

11

—

「おい！雨真魏と白を返せ！」

梓が下に下りてきた。

「あれ？あぁ～そうか。じゃあ勝負しようよ。」ニコッ

「勝負？」

「そう、君の故郷で勝負。」

「!?!?。」

「君の故郷で君と白君と黒君と雨真魏が出会ったあの、研究所。」
「?!?!?。」

「僕はそこで待ってるよ。」

「あっ！待て！」

岬と咲くは白と雨真魏と共に消えた。

出会いの研究所で勝負…。

31話 襲撃 後編

「やっとだよ。模造品が揃った。」

「うう…クツ…。」

「あれ？もう目を覚ましたの？志木」ニコッ
「うっせ…。」

瞬慧と深紅と白は三人、小さな檻に入れられていた。

「深紅…白！」

「うう…。」

「…。」

深紅と白はまだ気を失っていた。

「志木、さあ、僕と一緒に帰ろう。」

「!?!?…。」

「雨眞魏も連れて、白君も深紅も一緒に帰ろう?」ニコッ

「?!…嫌だ！俺は帰らない！あんな所に！」

「そっか、知ってる?。」

「何がだ!?!?…」

「雨眞魏、梓君、黒君、白君を出会わせたのは、僕なんだよ。」

「!?!?…。」

「一人一人がもう離れなくなる、そして離れていく屈辱をして
欲しかったのさ！」

「?!?!?…」

岬はとても憎い目をしていた。

「俺は…恨んでいるんだな。」

「当たり前だよ！僕を惨めに惨めにした君を!?!?だけど、僕は志木
が大好きなんだあ」ニコッ

「チッ…ウザイ。」

「だけど、志木も雨眞魏も僕がいないとその、病治^{やまい}らないよ?。」

「!。。。」

「雨眞魏は僕の事、覚えてなかった。」

「!?。。。」

「あれ、どういう意味？僕の事を一番恨んでいるの雨眞魏だよ？」

「…あいつに…何も教えないでくれ…。」

「どうして？」

瞬華はとても悲しい声で頼んでいた。

「…雨眞魏は…記憶喪失…一部の記憶は無い！だから…悲しい過去を教えないでくれ！」

「そんなの、しないよ。」

「!?。。。」

「僕は雨眞魏に思い出して欲しいんだもん。だからさ！」

「?!…お前は…。」

「僕はさ、あんたら極普通の化け物とは違う！」

「。。。」

「僕は…人間！僕の体は人間だよ！だから、刺されたらすぐ死ぬ。だけど…。」

それが出来ない…歪の悪魔がとりついてるから。」

「?!…岬お前！」

岬は何かをしようとしていた。

「人は…何か無しでは生きれない。」

「!?。。。」

「志木、サヨナラ」

「!?…。」

フラッ

駄目だ…目がかすんで…。

バタンッ

瞬彗は倒れた。

俺には…まだやる事が…。

「もう、時間。だけど、楽しかったよ。咲く。」

「御意。」

「志木は、闇の住人？」
ナイトメア

白君は、闇の住人？。

深紅は、闇の住人？なんだよねえ」ニコッ

32話 死と隣り合わせ

【雨真魏、大丈夫だよ。お前は俺が守る。】

誰?…誰なの?…なんで、私の名前を知っているの?…。

【知ってるよ。雨真魏の事なら。何でも。】

何でも…私の事なら…じゃあ…。

【何?】

私は…何者なの?…。

【君は、ヴァンパイアと死神の血を引く娘。】

それは…知ってるよ。自分自身が分からない。

【…。】

ねえ、何で…。

【君は恨み、憎しみがあると死ぬ。】

!?!…私が!だって私は…。

【君はいつも死と隣り合わせなんだよ。】

「!?!?。」

雨真魏の人格で目を覚ます。

目を覚ますとベッドの上だった。

「?!?。」

「起きたあゝ」ニコッ

「誰?!?。」

「僕だよおー岬」ニコッ

「岬ちゃん?!?。」

「そうそうゝ」ニコッ

「?!??!?。」

何か…この人を見ていると懐かしい…だけどとても悲しい…。

「どうかしたの?」

「皆は?!?。」

「あゝ後で来るよ」ニコッ

「そうなんだ。」

「雨真魏は、待っててね」ニコッ

「うん。」

雨真魏はそう言って、机の上においているコーヒーを口にした。

「じゃあ、また後で来るね」ニコッ

「うん。ありがとう岬ちゃん」ニコッ

「ううん」ニコッ

岬は部屋から出て行った。

「本当に記憶が無いんだね。面白くなってきたよ。また、あの顔が見れるんだあゝ」ニコッ

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ…。」

雨眞魏はとても悲しい顔をしていた。

死と隣り合わせ…嫌…死にたくない。何…なんで私は死ぬの？…。

雨眞魏の頭はそればかり廻っていた。

「…ゲホッ！ゲホッ！…。」

【雨眞魏！】

「！？…瞬慧！」

【逃げろ！】

「どうして？」

【いいから！】

「分かったよ！」

雨眞魏は部屋の窓を開ける。

「あれ？何してるの？」

「！？…岬ちゃん…。」

「雨眞魏、ここからは出ちゃ駄目だよお」ニコッ

「…。」

「真実を教えてあげる。」

「えっ？…。」

「あなたの思い出。」

「私の思い出は全て私が覚えてるよ！」

「覚えてない、あなたの記憶はかけてるの。パズルのように。」

「！？…。」

岬は雨眞魏を追い詰めるように言う。

「…。」

「思い出してよ！雨眞魏！僕と君は友達？だろう？」

「？！…違う…私と岬ちゃんは今日、初めて会ったよ…。」

「初めて？…ねえ。」

「!?!?。」

雨真魏の頭の中で何かが引っかった。

「初めて?…違う…初めてじゃない…あなたとは…。」

「そう。会ってるよ。」

「!?!?…違う!…違う!」

雨真魏は目をつぶって、頭を抱えて座り込む。

「雨真魏、私達いつも一緒だよね?」

「?!?!?。」

雨真魏は顔をあげた。

「雨真魏」ニコッ

「岬ちゃん!…嫌!嫌!」

「思い出した? 君は僕の模造品。だから、意地悪したかったんだあ
〜」

「!?!?…返してよ…私の…私の。」

「だって、雨真魏、とても幸せそうな顔してたんだもん。

あの顔を壊したかったんだあ〜僕の模造品だからさ!」ニコッ

「!?!?…返してよ…私の大切な人を!…。」

「何言ってるんだよ? あれ、殺したの、雨真魏自身だよお〜」ニコッ

「違う! 違う!」

雨真魏は頭を抱えんだ。

「咲く、運べ。」

「御意。」

咲くは雨真魏を気絶させて抱えた。

「はあ〜、実験スターとだね」ニコッ

33話 月下の満月

「雨真魏が鍵。雨真魏が宝。雨真魏が世界の全て。」
「……」

雨真魏は気を失って、ベッドの上で眠っていた。
目を覚ます事もなかった。

まるで、永遠に眠るかのように、眠っていた。

「始める。深紅ちゃんも白君も咲くに任せるよ。」

「御意。」

咲くは消えた。

「じゃあ、雨真魏。サヨナラ。」ニコッ

「……。」

「白様、もう終わりです。」

「!?!?…僕は、お前には負けない!」

「もう、逃げるのをやめてください。」

「!?!?…。」

「世界も誰もあなたの味方はいません。」

「う…黒…。」

バタンッ

「!?!?…白?…。」

「黒!早く行くぞ!」

「あっおう。」

「深紅：君はもう用済みです。」

「！？…嫌…こないで！…姉様…。」

「…。」

「姉様！！！！私は…。」

「サヨナラです。」

カキンッ！！！！！！

「！？…何！」

「お前ら、やりすぎなんだよ！」

「志木！？どうしてだ！」

「俺は、雨真魏と違って、瞬彗って名前があるんだよ！」

「？？」

意味がまったく伝わっていないらしい。

「俺の瞬は、一瞬の瞬だ！彗は彗星の彗だ！よく、覚えておけボケが！」

「あなたは、ここに来ると思いましたよ。」

「ああ？」

「死んでください。」

グサッグサッグサッ！

「？！…。」

瞬彗は体の何ヶ所を横から刺された。

「！？…う…ゲホッ…。」

瞬彗は体から血を大量に流す。

バタンッ！

「瞬彗さん！」

「深紅…逃げろ…。」

「だけど…。」

「いいから…白を連れて…逃げろ…俺は…平気だ。」

「…分かりました！」

深紅は、人形バベットを使って、白を担いで部屋から出る。

「逃がしましたか。」

「…お前は俺が…倒す。」

「無理です。」

「……梓…悪いな。」

「?!…雨真魏?…瞬慧?」

「俺…もう駄目かも知れないな。」

「死ね!」

「悪い…サヨナラ。」

グサッ!

バタンッ

瞬慧は倒れた。

そして血が大量に出ていた。

そして、部屋から満月の月光が射し込んでいた。

その満月の光が瞬慧の体に当たっていた。

「来た。」

「……。」

「志木、あんたのサヨナラだよ! 咲く、二人を追え!」

「御意。」

「サヨナラ、雨真魏! 志木!。」

「!?!。」

瞬慧は少しだけ、意識が合った。

「ガッ!…う…岬!…貴…様。」

瞬慧の周りには、雷が流れ込んでいる。

34話 君の笑顔（前書き）

更新遅れてすみません。
これから、よろしくです。

34話 君の笑顔

「ねえ、知ってる？ 雨真魏も瞬慧も世界のために死を選んだ。」

「雨真魏！」

梓は瞬慧の所に駆け寄る。

「……。」

雨真魏の髪は真っ赤な髪に染まってきていた。

「！？ …。」

梓は思わず驚く。

「これが、本心本能の姿。」

「！？ …。」

「誰も知らない。雨真魏の姿だ。」

「…。」

「雨真魏の人格は生き、志木の人格は死んだ！」 ニヤッ

「！？ …。」

「傑作だ！ 僕は勝った！ 傑作だよ！ 深紅も白ももう死ぬかもしれな

いよ？」 ニコッ

「！？ …。」

岬は満足気な顔で微笑んでいた。

「……。」

いききたいか？

誰？ …。

お前は生きなくてはならない。雨真魏。俺の分まで生きてくれ。

瞬慧…ううん。一緒に生きるんだよ。これかも。

雨真魏…ありがとう…。

瞬慧…。

「お前は、許さない！」

「あれ？怒った？」

「お前だけは許さない!!」

梓の能力が解かれる――――。

「梓！」

「劉禰、今行けば、梓に巻き込まれる。ここは梓に任せて俺達は白と深紅を助けに行くぞ。」

「分かった。」

劉禰達は、白と深紅達がいる、部屋に向かった。

ビリッビリッ

梓から電気が走っていた。

「へえ、狼って結構いいものだね。」

「…。」

「僕、ペット欲しかったんだよねえ」ニコッ

「狼と天使の血を引く者だけど、まるで悪魔と狼の血を引いているものだな。」

「…。」

梓は一瞬にして消えた。

「あれ？消えた？…なんてね。」
カキンッ！

「?!…。」

「君では、僕には勝てないよ。」

「うるせえ!!!!!!!!!!」

「そっちがうるさいよ。」

ガッ！ドカーンッ！！！！！！！

梓は岬に思いつきり腹を蹴られて、壁まで飛ばされた。

「はぁ：こりゃ、しつけしないと。駄目だなぁ」

「：。」

「だからさ、もうやめない？僕、戦うの嫌いなんだけどさぁ？」

カキンッ！

「俺は：お前を殺す！」

「殺せるものなら：殺してよ！」

グサッ！

「！？：ガハッ！」

梓は腹を思いつきり刺されて、座り込む。

「僕だって、死にたいよ。だけど死ねないんだよ！もう疲れた！僕だって！」

人生に飽き飽きなんだよ！！！！！！」

梓の体を切り刻んでいく。

梓の体は血だらけだった。大量の血が流れていた。

「：ハア：ハア：。」

岬はとても息が荒くなっていた。

「雨真魏も志木も、呪マークのせいで寿命がきつたんだよ。」

「雨真魏も瞬彗もまだ死なない！俺が一生守ると決めた相手だ！」

「！？：愛されてるね：雨真魏も志木も：。」

岬は笑ってる半分に寂しそうな顔をした。

「梓だっけ？：君は、本当に守れると思う？」

「はぁ？：。」

「じゃあさ、賭けをしようよ！」

「：なんだ：と？」

「雨真魏達を守れなかったら僕の勝ち。守れたら梓の勝ちね。」

「…チツ…。」

ヤバイ…視界がかすんできて…。

「今日は、もう終わりだよ。咲く、帰るよ。」
そう言って、岬は消えた。

バタンツ

「雨真魏……ごめんな…。」
梓も気を失ってしまった。

そして、一週間後————

ガタンツ!

「梓!おはよう」ニコッ

「おう、雨真魏。おはよう」ニコッ

あれから、一週間が経った。

梓の怪我も雨真魏の怪我も無事回復した。

そして、今を平凡に生きている。

雨真魏の髪は灰色から、真っ赤な赤毛に染まった。

「しっかし、真っ赤だねえ」

「それでも雨真魏い」ニコッ

白は雨真魏に抱きつく。

「そうだな。雨真魏らしい色だな。」

「ちよっ!梓、雨真魏らしい色って何?」

「別に。」

「ちよっと!梓!教えてよお!」

君の笑顔が薔薇のように綺麗だから…。

雨真魏は知らないけどな…。

「黒発見——！久々だな。あいつに会うのは。」

34話 君の笑顔（後書き）

次回からは、新章編です！

35話 漆黒の嘘と漆黒の真（前書き）

新章編開幕！

35話 漆黒の嘘と漆黒の真

『黒、私を守ってくれる？』

『おう！絶対守るって！』

『なら、約束。』

『おう！約束な。絶対守ってやるから。』

あの後：俺は：約束を破って死なせてしまった。

「黒！おはよー！」ニコッ

「おう。白、おはよー。」

「どうしたの？顔色悪いよ？」

「そんな事ない。俺はいつでもこんな顔だ。」

「そっか」ニコッ

俺の双子の弟。血は繋がってないけど。俺の弟だ。

絶対こいつだけは、失いたくないと思った：理由が合ったからな。

「はあ：。」

「黒？どうかしたの？」

雨真魏が黒に話しかける。

「皆、聞くな。別になんでもないけど？」

「そう？それならいいの」ニコッ

雨真魏は優しく微笑んだ。

「甘いんだよ！お前！」

ダンッ！

「瞬慧！？」

瞬慧の人格に変身した。

そして、瞬慧は机を強く叩いた。

「男なら、飯は5杯は行け！」

「…何の話してんだよ。お前。」

「何！黒！お前、少し生意気になったぞ！」

「俺は、いつもこんなんだ。」

「ムカツク！！！！」

いつもより、なぜか騒がしかった。

人数が増えたからか？…。

「黒鳥、お前起きるの遅い。」

「悪いっす！梓先輩」ニコッ

「はぁ…。」

梓はため息を吹いた。

「お前、もう”梓先輩”って呼ぶな！」

「何でっすか！？」

「俺は、別にお前の先輩じゃねえーし。」

「分かった！じゃあ梓ー」ニコッ

「それでいい。」

梓は納得。黒鳥は嬉しく微笑んでいた。

俺は…皆が明るくて、明るいほど…いやになる。

冷めて来る。鬱陶しくなる。何もかも壊したくなる。

「悪い、外の空気吸ってくるわ。」

黒はそう言って、外に出て行った。

「ん？…深紅？」

学園の屋上に来た、黒。

上から深紅の姿が見えた。

「姉様！…。」

深紅は姉の事を呼んで叫んでいた。

「来るんです…。」

「…。」

「来るんですよ…あいつが…あの憎しみが…。」

深紅はとも震えていた。

上から見ている黒でも分かっていた。

ビリッ

「!?!?。」

ドカーンッ!!!!!!!!!!

黒に直撃した。

「あれ?当たってないやあゝさすっが!」

黒は一瞬にして、よけていた。

「誰だ、お前!」

「はははははは、黒。会いたかった。」

「はあ?」

「黒く変わらないなあゝ。」

「はあ?」

「覚えてないの?私の事、守るって約束してくれたのに。」

「?!?!。」

黒は一瞬黙り込んだ。

「お前…何言ってる!あいつは死んだ!」

「死んでないよ。今目の前にいるじゃん。」

「!?!?…しずく…。」

「そうだよ。雫だよ。黒、会いたかったよ」ニコッ

「!?!?。」

「イヤアアアアアアア!?!?!?!?!」

「深紅!」

屋上から黒は深紅を見た。

深紅の目の前には仮面をかぶった男が居た。

「姉様!。。。」

「久しぶりだな。深紅。ほら、母さんにも挨拶しなさい。」

「!?!?…母様…。」

男の横から深香と同じ人型ロボットが出てきた。

「深香も元気か。そうか。」

「違う!嫌!やめろ!やめろ!やめろ!」

「深紅、どうした?父親に会えて嬉しいか?」

「貴様などに会えて嬉しくなんかない!」

バチンッ!

「?!。。。」

「口の聞き方をわきまえろと言っているだろう!」

深紅の父を名乗る男が深紅の頬を叩いた。

「…何しに來たんですか?…。」

「いや、深香を連れ戻しに來た。後深紅、お前もだ。」

「!?!?…嫌だ…。」

深紅はとても悲しい目をしていた。

「おいで、深紅。」

「!?!?…母様…。」

バタンッ

深紅はそのまま倒れてしまった。

「ほらね、深紅ちゃんも一緒に行くの。黒も一緒に行こう」ニコッ
雫という少女は黒に手を差し伸べた。

「!?!?…俺は…。」

「黒、私とずっと一緒に居てくれるよね?」

「…!?…。」

白…。

黒の頭の中に浮かんだのは笑っている白だった。
ガタンッ!

「黒!」

「白!」

「…行こう、黒」

「…悪い!白!」

「?!…黒!」

黒は雫と消えてしまった。

「黒!黒!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!」

36話 真紅の薔薇 前編（前書き）

深紅編から、始めます。
WW（過去編）

36話 真紅の薔薇 前編

私は、姉様が…世界で一人しか居ない…姉様が大好きだった…。
いつも、私を笑わせてくれる。姉。

とても大好きだった。私の大切な人だった…。

世界で一番もつとも、私が信頼できる相手だった…。

「姉様！」ニコッ

「深紅、今日も元気だね。」ニコッ

「姉様！おそぼう！おそぼう！」ニコッ

「そうね。遊びましょう。」

「うん！」ニコッ

いつも二人で笑い合っていた。

いつも二人で花畑に行って、遊んでいた。

ただ、ただ、その日々が楽しかった。

「姉様、どこ？姉様？」

そして、ある日。

不幸で絶望する日が来た。

私はまだ、知らなかった。

私はただ築きもしなかった。

「姉様！どこ？姉様？」

私は探した。姉様を。必死に。
不安と願いで頭がいっぱいだった。

ガタンッ！

「姉様？」

一つの扉を開けた。

真っ暗な部屋だった。

そして、いやなにおいがしみていた。

「おお？深紅か？どうしたんだ？寝ないのか？」

「父様：なんでここに？何をしているのですか？」

「深紅、見てなさい。お前の姉と母が命を欠けて、この私の実験に参加してくれた。」

「！？。。。」

父の目の前の台には深香が眠っていた。

「姉様！」

「深紅、静かにしなさい。これから実験なのだから。」

「いや！姉様！。。。」

タッ！

深紅は深香の所に来る。

「深紅！来るな！」

バシッ！

深紅は頬を叩かれる。

「駄目！」

「深紅！やめなさい！」

深紅は父の手をつかんだ。

「姉様！いや！やめて！……！」

「うるさい！もう、深紅を殺しなさい。」

「!?!?」

父の後ろから、人型のロボットが出てきた。

「母様……」

「深紅……」

「姉様……」

深香の意識は朦朧としていた。

「一緒に……居てあげられなくて……ごめんなさい……」

「!?!? 姉様! いや! 死なないで! 私を! 私を!……」

深紅の目から涙が溢れていた。

「私を……一人にしないで!……!」

ガタンッ!

「?!?!」

「渡さない……姉様はあんたなんか渡さない!」

この時に、深紅は”ヴァンパイア”の血が覚醒した。

「殺してやる! お前を!」

「母! 戦え。」

「死ぬ……殺す。」

深紅はそこら辺に落ちている刃物を手に取る。
そして、母に向かって切りかかった。

そして一瞬。

「深紅…父様を消して、恨まないでください。」

「母様…。」

そして、人型ロボット《はは》は倒れた。

「殺す…。」

「やめろ…深紅！やめてくれ！」

「うるさい…お前は私が殺す！」

そして、深紅は父の左目を刺した。

父の左目からは大量の血が溢れ流れていた。

グサッ！！

「!?…。」

深紅の肩に刃物が刺された。

「はははは、深紅！お前は負けた！」

そして母は立ち、父を担いで、どこかに消えて行った。

「…姉様…。」

バタンッ！

深紅はそのまま姉の隣で倒れて、眠ってしまった。

パチッ

「…姉様…。」

「深紅。」

「！貴様！」

深紅の目の前には父の姿が。

「おいおい、まだ。お前を処刑するのにはまだ早い。」

「私が、貴様を処刑してやる！」

「出来るか？ そんなガラクタのお前に。」

「許さない！ お前だけは！」

37話 真紅の薔薇 後編

私の大好きだった…姉様…。

もう居ないの？…あんなに笑顔で笑っていた…深香姉さんは…もう。

「お前だけは許さない！」

「深紅、お前に出来るのか？」

カキンッ！

「母様…。」

「…。」

「邪魔をしないでください！」

深紅は母を吹き飛ばした。

「深紅。お前は哀れだ。」

「貴様を殺して、私は姉様を人間に戻す！」

「それは無理だ。あれはもう戻れない。」

「戻す！絶対戻る！」

「そうか。ならやってみるがいい。」

「貴様を殺して、なってやる！」

グサッ！！！！

「！？…。」

「お前は負けたんだ。深紅。」

「貴様…。」

「私も、もう人型のロボットだ。」

「！？…。」

深紅が刃物で刺された。

バタンッ！

深紅は倒れた。

「…私の…家族は…皆…ロボット?…。」

「そうだ。お前だけが唯一のヴァンパイアの血を引く娘だ。」
「!?…。」

深紅はとても悲しい顔をした。

「深紅、もう疲れただろう? もう、帰ってきなさい。」

「私は…帰らない。」

「そうか。それは残念だ。」

グサッ!グサッ!

「!?…。」

深紅の背中を刃物が2発突き刺す。

深紅はそのまま、顔をあげはしなかった。

「お前は、ヴァンパイアだ。」

姉様…姉…。

ハッ!

「…ん?」

深紅は血だらけの体で立ち上がった。

「……。」

そして、深紅の髪が漆黒髪に真紅のような瞳に輝いた。

「……。」

深紅は背中から、刃を出した。

「これがヴァンパイアの落とした、娘。」

「……。」

「これが、ヴァンパイアの子の本心。」

「……。」

「!?!?。」

一瞬にして、父の前から深紅の姿が無くなった。
カキンッ!

「!?!?。」

一瞬にして、深紅は父の目の前に現れた。
母が父の前に立ち、深紅の刃と重なっている。

「…邪魔だ。どけ。」

深紅は母を吹き飛ばした。

「!?!?…お前何をしてるか!分かってるのか!」

「…うるさい。」

深紅は父を躊躇なく刺した。

「!?!?。」

バタンッ

父はよろよろと倒れた。

「…。」

深紅は母を元に向かった。

「待て…深紅…母さんだけは…殺さないで…くれ。」

「…。」

深紅は父の話を無視して、母に刃を振ろうとする。

「やめろ!深紅!」

ポタンッ

深紅の様子がおかしかった。

「!?!?。」

深紅は刃を落とした。

「…なぜ?。」

深紅の目からは一粒一粒の涙が溢れていた。

「殺せない…私には…家族を…。」

グサッ!

「グアッ！」

「父様！」

深紅が振り向くと、一人の少年が父を刃で刺していた。

「君じゃ、王にはなれない。」

「…父様！貴様！何をする！」

「ヴァンパイアはいいな。」

「?…。」

グサッ！

「!?!。」

一瞬にして、少年が深紅の目の前に来て、深紅を刺した。
バタンッ！

「君、結構良い匂いがする。君が王になればいい。」
少年は消えた。

姉様…もう会えない?…寂しいな…姉様…。

『深紅…。』

「…姉様…。」

『大丈夫だよ。姉さんはここにいるよ』ニコッ

「深香姉さん…。」

深紅はとても優しい顔で眠った。

38話 闇無限 黒編Ⅱ前編

そうだ…あいつと出会ったのは…夏の朝。

太陽がまぶしすぎて、目がまともに開けられなかった日。
そして、あいつに出会った…。

”雫”という少女に————。

雫は、森から出てきた。白いワンピースに身を包んで、ドロだらけで俺の前に。

あいつは、笑っていた。

俺と出会ったときも、笑っていた。

向日葵のような微笑むで…。

「黒君、何で私のためにこんな夜でも来てくれるの？」

「別に…お前、いつもここに居ると思ったから。」

「いるよ。いつまでも。」

「???。」

雫と黒は川の側で座っていた。

「雫、俺の家で住まないか？」

「ううん。黒君の迷惑にはなりたくないの。だからいい。」

「そうか？お前、何かどんδροだらけになってる。」

「ああ…気にしないで、ちょっと遊んでるだけよ」ニコッ

「そうなのか？ならいいけど…。」

「ほら、黒君。もう帰らないといけないんじゃない？」

トント

雫は黒の背中をポンツと押した。

「!?!?。」

黒には一瞬、寒気が漂った。

なんだ今の?…。気持ち悪い…。

「じゃあね!黒君」ニコッ

「おう!…。」

雫は優しい笑顔で黒に手を振った。
そのまま黒は、走って家に帰った。

俺は、予感がした――――。

「じゃあ、母さん行ってくる。」

「ちょっと待ちなさい。黒!」

「ん?何?」

「今、ちょっと奇妙な事件が勃発してるらしいのよ。」

「事件?…。」

「そう、周りの村、全ての村人が心臓だけを取りぬかれて死んで
いるって事件よ。」

「!?!?…。」

黒は少し分かっていたと半分恐怖心が合った。

「気をつけてね。」

「分かってるって!」ニコッ

「そう。ならいいわ。明日から双子になる弟が来るのよ。楽しみに
していてね」ニコッ

「おう!弟か、楽しみだ!」ニコッ

黒は家を出た。

「雫!」

「ん？黒君？どうかしたの？」

雫は焼き魚を食べていた。

「あっ…悪い、飯だったか？」

「ううん。大丈夫だよ」ニコッ

「そうか？、なあお前やっぱり俺の家に来い！」

「どうして？」

「今、奇妙な事件が勃発してるんだ！時期ここにもそいつが来る！」

「大丈夫だよ。」

「えっ？」

雫は焼き魚を捨てて、立ち上がった。

なんだ？…雫がいつもと…違う！

「その事件やったの私だよ。」

「！？…。」

「心臓取ったら、死ぬかと思ってたら。あの恐怖心に沸いた顔がたまなくなつてさ！

殺しているうちにその恐怖心の顔が見たくなるんだ！

ああ！黒君にも見せてやりたいなあ…だけど、ここで死ぬから。

いっか。」

「?!…。」

「死んでくれる？」

「俺は…。」

雫は血だらけの刃物を手に持っていた。

「?!…。」

俺は…生きる！弟の顔を見て、弟を守るって…。

「黒君…私を守ってくれるよね？」

「?!…。」

「ごめんね、黒君。」ニコッ
雫は目から涙を流していた。

「雫!…。」

グサッ!グサッ!ググサッ!

「…失せろ。」

雫の体が剣が何本も刺さっていた。
バタンッ!

雫の体からは血が流れていた。

「……チッ。」

一瞬黒には黒い羽が生えていた。

「……。」

雫はそのまま死んでしまった。

黒はそうして、白に出会った。

38話 闇無限 黒編Ⅱ前編（後書き）

ぐろくてごめんなさい／＼！

39話 闇無限 黒編Ⅱ中編

ジャリッ…。

「ん?!?!?!」

黒は目を覚ました。

手には鎖が繋がっていた。

「起きた?」

「?!?!…雫?!」

「黒君、久々だね。こんなにかっこよくなって」ニコッ
「……。」

「あっ!鎖、外すよ!ごめんね!忘れてたの。」

雫は慌てて、黒に繋いでいる鎖を外した。

「お前、何が目的だ?」

「目的??.」

「何、考えている!」

「私は、ただ。黒君と一緒に居たいだけだよ」ニコッ
「!?!?。」

違う…こいつは…あの日の雫…。

「黒君?」

「…お前、俺を殺せるか?」

「えっ?そんなの無理だよ!何で、私が黒君を?」
「嫌…言ってみただけだ。」

「……殺せる。」

「!?!?。」

「だってさ、ずっと黒君を殺したかったんだよ?」
「…雫…。」

「この日を待っていた！いつも待っていたんだ！ははははは！」
「!?!?。」

雫は落ちていた、刃物を手に取った。

「!?!?。」

「黒君…死んでくれる？」

「?!?!?雫！」

俺はまた…大切な人を…殺すのか?…。

「黒君は、また私を殺すの？」

「!?!?。」

「ははは…無理だね?無理に決まってる。あんたの弟すっごくウザイよ?」

「白は関係ないだろう!」

「いやあゝ。黒君が私を殺した後。君にそっくりな男の子が来たんだよねゝゝ」

「?!?!?。」

何で白が!?!?。

「あの子は、血だらけで一生、神にも天使にも魅入られない存在だよ。」

「!?!?…白はそんなじゃない!」

「あの子、私にこういったの…。」

【兄上に次、近づいたら。君殺すから。】

「白はそんな事言わない！」

「言ったんでしょう？ あれは、もう絶望の顔！ だけど瞳はとても寂しい顔！」

あの顔たまらない！ もう1回みたいな。」

バキューンッ！

「?!:。」

「来たね。」

「白！」

白は黒と雫の家部屋のドアの前に居た。

「あれれ？ 兄が名前呼んでるのに、返事もなし？」

「君、昔言ったよね？ 兄上に近づいたら殺すって？」

「白!:。」

何で:あいつが雫を殺すんだ?::。

「知らないよ。だって私は黒君より君に会いたかったんだもん」ニ
コッ

「!?::白に？」

黒は顔を上げた。

「僕に会いたかったんだ。僕は会いたくなかった。」
バンッ！

「?!:。」

「雫！」

バタンッ！

白は躊躇なく、雫を撃った。

雫は倒れた。

「:~:。」

白は倒れている雫に銃を向ける。

40話 闇無限 黒編Ⅱ後編

「黒！大丈夫？？」

いつもの白だった。

「白…。」

雫は血を大量に流して、そのまま動かなかった。

「…」ニコッ

ポタンッ

「黒？？どうしたの！？」

白は黒の顔を見て、焦った。

黒の目からは涙が溢れていた。

「…黒？？」

「…悪い…。」グズッ

白は優しい…だから俺は…。

「う…ごめんな…白。」

俺は、それにすがってるだけなんだよな？…。

雫…ごめんな…。

「ごめんな…白…。」

黒は泣いていた。

白の目の前で。

たった一人の弟の目の前で。

「…黒」ニコッ

「!?!?。」

一瞬黒には、白と誰かの顔が重なった。

「…雨眞魏…。」ボソッ

黒は白の頬に触れる。

「黒?!?。」

「会いたい…雨眞魏…。」
バタンッ

黒は気を失ってしまった。

「黒…。」

白は黒の頭を優しく撫でた。

「白!黒!飯だぞ!」

梓が呼んでいた。

「白!行くぞ!」

「うん!」

黒と白は手を繋いだ。

「あっ、白、黒!おはよう」ニコッ
目の前には雨眞魏が居た。

「雨っ眞魏——!!!!!!!!!」

白は相変わらず、雨眞魏に抱きついた。

「黒、どうかしたの?」

雨眞魏が黒に問う。

「別に：なんでもない。」

「そっか」ニコッ

ドキッ！

「?!…。」

黒は頬を赤く染めた。

「恋だな。」

「そうね。」ニヤリッ

「……。」

「恋なのね。」

「恋なの??」

「お前ら！後ろからうつせ！」

別に：恋も悪くない…。

41話 鬼の血を引く者（前書き）

今回は緋那がメインです♪

41話 鬼の血を引く者

私は、人間が好きじゃない。

…私は、自分が憎い。
だって…。

”鬼”の血を引く者だから――――

「…はあ…つまんないわ。何もかも。」

ベッドに寝転んでいる少女、緋那。

あまり、他人にも物にも興味をあまり示さない。
ガチャッ

「はあ…ん？」

「…何、してる？」

「凜。久しぶりじゃない？」

「…徹夜続きで寝てたな。」

「へえ。」

緋那の目の前には凜が居た。

「あれ？凜ちゃんに、緋那ちゃん？？」

「雨真魏。どうかしたのかしら？」

「ううん、何でも無いよ。ただ呼んでみたかっただけだよ」ニコッ

「それ、洗濯物？？」

「えっ？…うん。」

雨真魏は学園のみんなの洗濯物が入った巨大なかごを持っていた。

「…手伝い。」

「ありがとう、凜ちゃん」ニコッ

「しよいが無いわ。手伝うわ。」ニコッ

「ありがとう。」ニコッ

三人は屋上に行った。
ガタンッ

「あれ？梓？」

屋上では、梓が寝ていた。

「Zzzzz」

「可愛い寝顔だね」ニコッ

「そうね。こんな顔だから、いじめちゃくなるわ。」ニヤリッ

「：分かったから、早く洗濯物干すぞ。」

「あっうん」ニコッ

「そうね。」

三人は洗濯物を干し始めた。

太陽の日差しが差し込んでくる。

「まぶしい：。」

緋那は座り込んだ。

「：：：闇の：空：光の：太陽：。」

小さな声で歌を歌い始めた。

「緋那ちゃん？？」

ハッ！

「？！：何かしら？？」

「大丈夫？影で休んでもいいよ」ニコッ

「そう？分かったわ。」

緋那は日陰に座り込んだ。

人間とよく似た、化け物：皆変わらないのになあ：：。

緋那は少し寂しそうな顔をした。

バタッ！

「???。」

緋那が顔を上げると、雨眞魏が座り込んでいた。

「雨眞魏！大丈夫？」

「ハア：緋那ちゃん?：ははは：大丈夫だよ」ニコッ

「全然、大丈夫じゃないでしょう？」

「はははは：。」

バタンッ

雨眞魏は倒れてしまった。

「軽い、熱中症だな。まあ、この頃太陽が出てきたからな。」

「そうね。」

パチッ

「：? 緋那ちゃん?：?。」

「もう、雨眞魏は無理しすぎなんだから。」

「ごめんね：」ニコッ

「もう、寝ろ。雨眞魏。」

黒鳥が横から言う。

「うん：。」

雨眞魏はすぐ、眠りに付いた。

人は単純。だから、化け物も単純なのかもしれない：。

緋那は自分の部屋のベッドに寝転んだ。

「ははは：やっぱり：私は、自分嫌いね。」

42話 過ち

「緋那！」ニコッ

笑ってる…あの人が…。

「緋那！」ニコッ

凄く…笑ってる…嬉しい…。

パチッ

「あれ？…私寝てたのね。」

緋那は目を覚ます。

「はあ…。」

トントントンッ

ガチャッ！

緋那の部屋のドアが開いた。

「おい、緋那。」

「何かしら？蒼弥？」

蒼弥が緋那の部屋に入ってくる。

「雨真魏が…。」

「えっ？…。」

緋那は廊下を走っていた。

ガラッ！

「雨真魏！」

「緋那…。」

梓が不安な顔で緋那の顔を見る。

雨真魏はベッドで静かに寝ていた。

「雨真魏…。」

「ただの熱中症じゃ無かった。」

「…呪マークの副作用だ。」

「黒鳥!?!」

黒鳥が突然現れた。

「呪マーク?」

緋那がきよとした顔で黒鳥に聞く。

「呪マークは呪いのマーク。憎しみや恨みが心に貯まった時、その呪マークが付く。」

「わしも付いている。」

「えっ?!?!」

黒鳥が腕にある呪マークを見せる。

「白と深紅にも付いている。」

「?!?!」

「副作用。二、三日安静にしていれば、すぐ元気になる。大丈夫だ。」

「そうか…ありがとうな。」

「別に」ニコッ

君のせいかも知れないよ?…。

ドクンッ!

「!?!?!」

君が人間を嫌うから…。

「!?!?!違う…。」

君が仲間を拒んで裏切って殺すんだ!…。

「違う!!」

「緋那？」

ハッ!

「あっ…。」

「大丈夫か？ 顔色悪いぞ？」

「あっ…大丈夫よ。心配しないで。」

緋那は屋上に向かった。

「…。」

緋那は日陰の所で立っていた。

「君のせいじゃないよ？」

「!?!?。」

緋那の目の前に一人の少年が下りてきた。

「誰?!?。」

「君の大切な人を生き返らせてあげようか？」

「?!?!?。」

「まあ、信じなくてもいいんだけどね」ニコッ

「…何者なのかしら？」

緋那は少し動揺していた。

「鬼は、血を見れば。本来の力を解放すると聞いた。」

「!?!?…何を…。」

「君の鬼の力が必要なんだ。僕と来てくれる？」

「無理だと言ったら、どうするのかしら？」

「それは、ちょっと困るな。」ニコッ

少年は指を口にあてた。

「!?!?…。」

「血を見せて本来の力を取り戻してもらわないと。」
少年は自分の血を緋那に見せた。

ドクンツ！

「?!:○」

血：欲しい：人間：。

「違う！……いや！……過ち《あやまち》を繰り返すなんて……出来ない……。」

緋那は苦しんでいた。

ドクンツ！

緋那の動きが止まった。

「目覚めた。鬼の血が開放した！」

[illegible]

43話 雨と鬼

「ウガアアアアア！……！！！」

「鬼はやっぱり、いらないや。やっぱりヴァンパイアか。

じゃあね。化け物の鬼」ニコッ

少年は消えた。

ガラッ！

「緋那！どうしたんだよ！お前？！」

心配して、梓が屋上に来た。

「ガアアアアアア！……！！……！！！」

緋那には言葉が通じなかった。

「おい！緋那！おい！」

「アアアアアアアア！……！！……！！！」

緋那が梓に襲い掛かる。

「おい！」

梓は軽々しくよけるが。

やめて……やめて……逃げて……梓……。

「チッ！……。」

梓は空中で1回転して、綺麗に着地した。

「グワアアアアアアアアアアアア！……！！……！！！」

「おい！緋那！」

梓は緋那と呼ぶがまったく反応が無かった。

まるで、本物の”鬼”のように。

我を忘れて、誰にもとらわれず、ただただ。人を殺す化け物……それが”鬼”

グサッ！

ポタッ…ポタッ…。

「ハア…ハア…緋那…。」

梓は斧が肩に刺さっていた。

梓…いや…いや…もうみたくないわ…。

ポタンッ

緋那の目から、涙が流れていた。

「緋那…お前のせいじゃ…無い…。」

「梓…。」

「大丈夫…。」

「梓！」

緋那は元の姿に戻った。

ボタンッ

「…はは…かっこ悪いな…俺。」

「梓…ごめん…ごめんなさい…。」

緋那は涙を流した。

「うう…。」

「…大丈夫だって…俺は…。」

梓は眠りに付いた。

「梓…ありがとう…。」

44話【番外編】PCのお友達（前書き）

久々の番外編です！

44話【番外編】PCのお友達

学園には、PC室パソコンがある。

その部屋に一人の男の子が来ていた。

ガラッ

ドアが開いた。

「今日も疲れたなあ〜。」

その人はなんと白だった!?

「パソコン〜」ニコッ

テキパキパソコンを動かしていく。

「あっ居た!」

白はパソコンでチャットをしていた。

そして、いつも話しているのが”雨”って人らしい。
ちなみに白のチャット名は”氷白”らしい。

———氷白さんが入室しました———。

雨【こんにちわ】

氷白【こんにちわ^^】

雨【今日は、何の話をしますか??】

氷白【何でもいいですよ^^】

白は結構早くキーボードを打つ。

雨【じゃあ：氷白さんがどんな人ですか??】

氷白【そうきますか?? ww】

雨【駄目でしたか!??】

氷白【別に構いませんよ^^】

雨【ありがとうございます^^】

氷白【ううくん…甘えん坊?】

白は自分の性格に自覚あるらしい。

雨【そうなんですか? 私のお友達にもそんな人がいますよ^^】

「えっ!?!」

白は思わず、声を上げてしまう。

氷白【そうなんですか。どんな人なの?】

雨【甘えん坊だけど優しくて明るくて兄が大好きな人です^^】

「!?!」

白はなぜか顔を真っ赤にさせる。

もしかして…僕の事??!

氷白【そうなんだあ…ww後何か特徴ありますか?】

雨【特徴ですか?…楽しい事が大好きな子ですよ^^】

「なっ!?!」

白は驚く。

絶対これ…僕だよね??!

氷白【その人のいいところがありますか?】

雨【仲間思いと兄思いな所が私、大好きですよ^^】

「!?!?。」

これ…絶対雨眞魏…はあ…。

氷白【すみませんが、今日は落ちます。でわ。】

雨【はい^^でわ。】

——氷白さんが退室しました。——

——雨さんが退室しました。——

「はあ…。」

白はP Cを消して、部屋を後にした。

「ん?何か、喋った事あるような人だったなあゝまあ、いいか」ニ
コッ

雨眞魏は結構鈍感らしい。

44話【番外編】PCのお友達（後書き）

活動報告にも気軽にコメントしてくださいね^^

45話 蒼の冷（前書き）

蒼弥編行きます！！！！
w
w

45話 蒼の冷

俺は、ただ一人でいきてきた。

それだけが…俺の道だったから…。

そんな事だけが俺に必要なから…。

「蒼弥！蒼弥！」

白は朝から蒼弥に付きまっていた。

「なんだ？…。」

「おそぼうよ！この前みたいに！」ニコッ

「今は忙しいと思う…。」

「ブッ…。」

「白、雨真魏が呼んでるぞ！」

「雨真魏が？？今行く！！！！！」

白は雨真魏の元に行った。

白には…悩みがなさそうだな…。

ドンッ！

蒼弥が誰かにぶつかった。

「あっ！蒼弥！」

「劉禰と…乃亜と濡か？…。」

蒼弥は劉禰とぶつかった。

「大丈夫なの？劉禰？」

「大丈夫？蒼弥も？」

「大丈夫…だと思いが…。」

意外なメンバーが集まった。

「何してたの??」

「いろいろだと思う…。」

「何それ??」

「劉禰。早くしないと雨真魏に怒られるの!」

「そうだったわね! 滯! 行こう!」

「あっ! ちよつと劉禰!」

滯は劉禰と乃亜に引っ張られて雨真魏の元に行ってしまった。

「…。」

過去にとらわれるのも…俺は…馬鹿だな…。

タッタッ

「??…。」

蒼弥の目の前には肩を包帯で巻いている梓が居た。

「梓?」

「ん?…あつ蒼弥! どうした??」

「どうしたんだ? その肩…。」

「ああ…ちよつとな。」

「?…。」

蒼弥はぽかんとした顔をした。

「そうだ…、お前も来い!」

「はあ?!…どこに??」

「いいから!」

蒼弥は梓に手を引っ張られた。
ガタンッ

きたのは、学園の教室だった。

「何で、教室なんだ?…。」

「いいから!」

ガランッ

「ん？梓と蒼弥君！」

雨眞魏は嬉しそうな顔をしていた。

「???.」

蒼弥は何がなんだが意味が不明だった。

「なんだ？これは?。」

「雨眞魏が考えた学園の交流会。」

「……。」

蒼弥は黙り込んだ。

交流会?。

【化け物！こっちに来るな！】

【人間！お前はどこかに死ね！】

「蒼弥君。はい。」ニコッ

雨眞魏がコップを渡す。

「?。」

蒼弥は黙り込んでいた。

「蒼弥君??」

パシッ！

パリンッ！

「!??。」

蒼弥はコップをはじいて割ってしまった。

「?俺は?そんな交流会なんか?しない!」

「!??蒼弥君?。」

「うざい?そんな事して、俺が楽しく笑うとでも思ったの?…」

あいにく?そんな事しないし?だから、いい加減。やめてくれな

いか？

そんな幼稚みたいな事。」

蒼弥は教室から出て行った。

「雨真魏。大丈夫？？」

劉禰が雨真魏に近づく。

「はははは…私やっぱり駄目だな…。」

雨真魏はとても悲しい顔をしていた。

「……。」

ダッ！

「！？…白？！」

白が蒼弥を追った。

「……。」

屋上で空を見ていた蒼弥。

バキューンッ！！

「?!…。」

後ろから誰かが銃を弾を撃ってきた。

蒼弥はとっさに後ろを向いた。

「白！?…。」

「…蒼弥、遊ばない？僕と…。」ニヤッ

いつもの白じゃない…。

46話 哀れな苦痛

バンッバンッ！

「おい！白！…。」

「…ねえ、よけるだけじゃ面白くない！」

「白！？…。」

白は躊躇もなく蒼弥に向かって弾を撃つ。

蒼弥は軽々しくよける。

「！？…。」

蒼弥の目の前に白が消えた。

ガッ！

「ガハッ！」

白は蒼弥の目の前に来て、腹を思いっきり蹴った。

「白…。」

「僕は…雨真魏を傷つける奴が嫌いなんだよね。」

白は不気味に微笑んでいた。

「…ハア…ハア…。」

どうするか…こんな白俺が止めれるのか？…。

ズキッ！

「！？…。」

蒼弥の様子がおかしかった。

俺は…優しくされただけなのに…俺は…人に八つ当たりしたただけか？…。

「…蒼弥！おそぼう！。」

「……。」

今、一番考える事は、白だよな…。

バンッバンッ！

「チッ…。」

蒼弥は軽々しくよける。

「見切った…。」

白が蒼弥を蹴るが。

「…。」

蒼弥はよける。

ガラッ！

屋上のドアが開いた。

「！？…蒼弥君！白！」

雨眞魏が様子を見に来ていた。

「雨眞魏！危ない！」

「えっ！？…梓！」

カタッ！バンッ！

白の弾が雨眞魏方面に跳ね返ってくる。

梓が雨眞魏を助ける。

「…白…。」

「雨眞魏。危ないから。ここで待ってろ。俺が行く！」

「あっ！…梓！」

梓が蒼弥と白の元に向かった。

「……。」

雨眞魏は不安な顔で梓の背中を見ていた。

「!?!?。」

「雨真魏の気持ちも知らないで!雨真魏に謝れ!」

「:俺だって:悪かったって思ってる!::。」

「嘘つくな!!!!!!!!!!!!!!」

「おい!二人とも、やめろ!」

梓が蒼弥と白向かって叫ぶ。

「「お前は黙ってる!!!!!!!!!!」」

「うわぁ!?!」

白と蒼弥は梓目掛けて攻撃する。

「お前に雨真魏の優しさなんて分かるわけないよね!」

「分かるわけが無いだろう!:俺なんかに!」

「いい加減!逃げるのやめろよ!」

「!?!?。」

「いい加減に:しろ!!!!!!!!!!!!!!」

「?!?!?。」

「!?!?。」

ドカーンッ!

蒼弥と白が吹き飛ばされた。

「!?!?::志木!」

「::ん?:瞬慧::。」

「いい加減にしろ!お前らがガキ以下か!ああ!。」

瞬慧は蒼弥と白に怒る。

「::::。」

蒼弥は暗い顔をする。

「お前に…何が分かるんだよ…。」

「はぁ？」

蒼弥は立ち上がった。

「お前に何が分かるんだよ！ろくに差別も何も受けた事無いお前に俺の何が…。」

「…分かるか。お前の気持ちなんか俺に。」

「！？…。」

「誰にだってな！過去を背負って生きてるんだよ！お前だけが辛くて悲しい思いしてるんじゃない！

皆！同じくらい辛いんだよ！！！！分かれよボケ！

「？！…。」

瞬彗は蒼弥の目の前に来た。

「…俺は…一生償えない過ちを犯した事がある…。」ボソッ

「えっ？…。」

「お前は一人じゃないんだぞ。蒼弥。何でもかんでも一人で抱え込むな。」

分かったか？？」

「…分かった…。」

「…よかったな。」

俺には仲間がいるんだな…。

47話 聡明

俺は、ヴァンパイアと人間の血を引くからと言って、差別を受けていた。

人間にもヴァンパイアにも認めてもらえなかった。必要とも、してくれなかった。

だから、今まで一人で生きてきた。

誰にも頼らずに。ただ一人で。

誰にも認めてもらえないなら、一人で生きていくしかなかった。人間の血を引くからと言って、ヴァンパイアには拒絶され。

ヴァンパイアの血を引くからと言って、人間には怯えられた。それがいやで、何もかも一人でやってきた。

「化け物！化け物！お前なんか、死ねばいい！」

「近づいてくるな！この汚れた人間め！」

ずっと、一人だった。

寂しいなんて思ったことも無かった。

泣いた事も無かった。

ただ、必死だった。自分の事で。

誰にも関わらず。誰にも頼らないで一人で生きてきた。

そして、一枚のチラシを見た。

” 化け物学園帝国 ” のチラシ。俺はこうして、転入した。そして、仲間も出来た。嬉しかった。

$$\begin{array}{c} \vdots \\ \circ \end{array}$$

蒼弥は少し怪我をしていた。

「蒼弥君。」

「雨眞魏……」

「傷、大丈夫？」

「あっ……うん。」

「よかった。」ニコッ

「…雨眞魏…あのつ…。」

「ごめんね。」

「えっ？」

雨眞魏は突然謝った。

「これからも、一緒に頑張ろうね」ニコッ

「??:…どういう意味だ??:」

「だから……蒼弥君は一人じゃないって意味だよ！」ニコッ

「雨眞魏、ちよつと。」

「あっ！ うん今行く！」 ニコッ

雨眞魏は梓に呼ばれ、去って行った。

「……参ったな……。」

一人じゃないか…それもそうかも知れないな…。

「ありがとう…。雨真魏。」

47話 聡明（後書き）

次回から、新章編！！！！

48話 嵐の予感

俺は…なんで、一人じゃないんだ？。
何で、俺は今。誰かというんだ…？。

俺は…償えないくらいに…事をしたのに…。

バキューンッ！！！！
バタンッ！

「雨真魏。ごめんね。だけど僕は君を殺しに来たんじゃない。」

ハッ！

「…！？…。」

梓は驚いて、起きる。

雨真魏！？…。

ガチャッ！

「あっ、梓。おはよー。」

「梓…。」

「どうした？そんなに慌てて…。」

「変ね。」

「大丈夫？？」

「雨真魏は？…。」

ガラッ

「どうかしたの？梓？」

「雨眞魏がどうかしたの？」

「あっ…いや。なんでもない。」

「?？」

雨眞魏は台所から出てきた。

お前のせいで、雨眞魏は全て失った。

「!?!。」

「梓？」

雨眞魏は梓に近づく。

「:!!?。」

「梓??どうかしたの？」

「殺意の色:。」

「えっ?::。」

梓は何かをつぶやいた。

「悪い…雨眞魏。」

「あっ…梓！」

梓はどこかに去ってしまった。

「なんだったんだろう？」

「:私のせいなのかな?::。」ボソッ

雨眞魏はとても寂しい顔をしていた。

「うわぁー…砂時計が壊れたぁぁー!!」

一人の少女が、真っ暗な部屋の中で叫んでいた。

「うっさい！」

もう一人の少女が一人の少女は軽く殴る。

「酷いなあ…:ねえ、殺意の色って何？」

「殺したいほど、憎いんだろうね。」

「そんなものなの??」

「あたしが知るわけ無いだろうが!」

「それもそーか。」

一人の少女はなんとなく納得した。

「そろそろ、遊びに行っていない?」

「いいよ。行こう。」

「♪」ニコッ

その頃梓は屋上に居た。

「殺意の色…。」

梓は空を見上げていた。

「空には色が無い…。」

「空には、色が無いんだあゝ」

「?!…。」

梓の顔に少女の顔が急に出てきた。

「ねえー殺。こいつでいいんだっけ?」

「ああ…そいつでいいと思うぞ。」

「お前ら誰だ!」

「ねえー名前は?」

「幸杜…梓。」

「僕は、死。」

「あたしは、殺。」

梓は武器を構える。

「お前、戦えるの?」

「!?!…。」

「無理に決まっている。」

「チッ…俺にだって!」

梓は酷く動揺していた。

「無理だな。あたし達は殺せないし倒させない。」

「! : : : なんて、お前等が俺と雨眞魏の事知ってるんだよ!」

「: : : 知ってるよ。何でも。」ニコッ

「: : : ? ! : : : 。」

ガタンッ!

「梓! : : : 。」

雨眞魏が屋上に来た。

「雨眞魏! 逃げる!」

「そっか、雨眞魏殺せば、梓の封印解けるんだあゝなんだ。」
死は、銃を取り出す。

「殺、やっていい?」

「勝手にしろ。」

「おっしや! ! ! ! ! ! !」

「! ? : : : 雨眞魏! 逃げる!」

「梓! ? : : : 。」

バキューンッ! !

「? ! : : : 。」

雨眞魏が銃の弾で撃たれた。

俺は: : : 何も守れない: : : 。

バタンッ!

「雨眞魏! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

目の前の奴一人: : : 守れない: : : 。

49話 死に掛けのヴァンパイア（前書き）

雨真魏メインかもWW
WW

49話 死に掛けのヴァンパイア

「おい！雨眞魏！」

雨眞魏は動かなかった。

「ヴァンパイアと死神の力もこんなものかあゝ」
死は銃をなおそうとする。

「雨眞魏！雨眞魏！起きろ！雨眞魏！」

誰？…泣いてる？…。

梓…泣かないでよ…お願い。梓…泣かないで…。

「…赤…色…。」

「血の色か？。」

「怒りの色…。」ボソッ

雨眞魏が立ち上がった。

「雨眞魏?!」

梓は驚いていた。

「……。」

雨眞魏は一言も喋らなかった。

「久々だな。お前らは俺が殺してやる！」

「瞬彗!?!」

雨眞魏の人格ではなく、瞬彗の人格だった。

瞬彗は刀を構えた。

「ははは。僕に勝てると思っててるのお前。地獄見てみろ！はははは
!!!!!!」

死は銃を瞬彗に向けた。

「梓…。」

「瞬彗？」

「…皆を連れて、逃げろ。」

「!?!。な、何言って!」

「俺の力じゃ、あいつには勝てないんだ。」

「?!?!瞬…。」

「俺が死んだら、お前の封印も解ける!雨真魏も承知の上だ!」

「!?!。俺は…。」

梓は何かがいたげだったが。

「あんずるな。俺は、貴様らのために死んでやると言っている。だから行け!」

「!?!。瞬彗…ごめん!」

梓は屋上のドアから下に下りた。

「いいの?」

「構わないが、目の前の敵は殺せ。」

「了解だよお!」

ダンッダンッダンッ!!!!!!

「チッ…。」

死の弾は何発も撃ってくる。

それをよける瞬彗。

「全員、外に逃げろ!」

「えっ?どうしたの急に?」

「いいから早く!」

「分かった…。」

梓は指示をしていた。

指示と半分不安と絶望に覆われていた。

雨真魏…瞬彗…。

バンッ!

「クッ!?…。」

瞬彗の腕が弾にかすっただけなのに腕から大量の血が流れる。

「僕の弾は特集なんだよ〜だから、すぐ死ぬ。ちゃんと交わさないと。」

「チッ!…。」

バンッバンッ!

「さあ! 踊れよ!!!!!! さあ!」

死は二本の銃を使いこなしていた。

「チッ!…。」

瞬彗はよけていた。

血をたらしながら。

「貫った!」

「?!…ガハッ!?!」

ドカンッ!

瞬彗は死に腹を思いつき蹴られた。

「弱いなあ〜ヴァンパイアってこんなものなの?」

「おい…。」

「?…。」

瞬彗は立ちながら何かをつぶやいた。

「俺の血は、殺し屋の血だ! よく覚えておけ!」

「そっか。なら殺さないと。」

バンッバンッバンッ!!!!!!

「!?!…ゲホッ!

瞬彗はもう動く力もなかった。

まともに、死の銃の弾を受けた。

大量の血を吐いた。

バタンッ

瞬慧が倒れた。

「あれ？死んだ？」

「さっさと、とどめを差せ。」

「了解。」

俺は…死ぬのか？…雨真魏…悪い…。

「じゃあ、サイナラ。」

バキューンッ！

49話 死に掛けのヴァンパイア（後書き）

一日2話書くと思います。

（これからWW）

気分で3話くらい書きますWW↑気分次第WW

50話 最後の願い

ごめんね…梓。

「ヴァンパイアは皆こうなの？？」

「違うな。二重人格のヴァンパイアだが、人格同士。違う血を引くのだな。」

「…？意味不明。」

「お前知らなくて十分だ。」

「う…。」

瞬彗はまだ立ち上がっていた。

「何？、まだ立つの？」

死を瞬彗の銃を向ける。

「ハア…ハア…。」

「遺言でも残す？それとも、仲間に伝えるか？」

「…なんだ…と？」

グッ！

「！？…。」

死は瞬彗の髪を引っ張って、屋上の手すりに顔をぶつけた。

「グッ！」

「おい！その雑魚共！よく聞け！」

死は梓達を呼んだ。

「えっ？」

「瞬彗?!」

梓達は、屋上の方を振り返る。

「！？志木！許さない！志木！」

「やめろ！白！」

黒が白を抑える。

「黒！ 離せ！ 志木が！ 雨真魏が！」

「頼む！ 白！」

黒はとても悲しい声で白に言った。

「全員……聞け……ハア。」

「志木！」

瞬彗の体はボロボロ。

頭からは血が出ていた。

大量の血を流して、もう体力も残っていなかった。

「……皆……。」

「雨真魏……。」

ポタッ

雨真魏の目からは涙が零れ落ちていた。

「……。」

梓はずっと下を向いていた。

俺は……また……。

「幸せに……平和に……生きてね……私の分まで……。」

俺はまた……大切な奴一人守れないのかよ！

「……今まで……ありがとう……サヨナラ。」ニコッ

バキューンッ!

死は雨真魏の頭を正面から撃った。
バタンッ

雨真魏はそのまま倒れてしまった。

「雨真魏!!!!!!!!!!!!!!」

ドクンッ!

「なんだ？」

「梓……」

「憎しみで我を失うな。」

黒鳥が白の隣につぶやいた。

俺は……守りたかった……! 大事な人を! あいつを! ……

ドカンッ!!!!!!!!!!

「!?!?……」

殺の隣に居た死が誰かに吹き飛ばされた。

「あれ? ……何? もう本気になった?」

死は口から大量の血を吐いて不気味に微笑んだ。

「……やっぱり。梓はそっちの方がいいのになあ」ニヤリッ

梓の目は真っ赤な瞳で光っていた。

「やっぱり野獣の梓は僕は惚れるよ。」ニコッ

「……。」

梓は血だらけの瞬慧を抱きかかえて、学園の皆を連れて姿を消した。

「逃げちゃったか。」

「：退くぞ。少し遊びすぎたからな。」

「了解♪ ニコッ

「瞬慧！」

瞬慧は息をするのがやつの状態だった。

「志木！ 雨真魏！」

「白！」

呪マークが反応しないだと：おかしい。

黒鳥は何かを考えていた。

「優榎！ どこ！！」

一人の少女の声がした。

「！？：。。」

学園の皆は冷や汗が流れていた。

「主。誰か居ます。」

「誰よ？」

チャキッ！

「！？：。。」

白は少女に銃を向けた。

「白！」

「あつ…えつと…。」

少女は焦る。

「…!?!?…怪我してる…。」

「!?!?…。」

「…あの子。後30分もたたないうちに死ぬよ。」

「!?!?…。」

全員が驚愕した。

「渚っち! 優榎いた? ?あと翔っちも!」

「いないよ!」

後ろからは双子の少年が出てきた。

「ん?…こりゃ。酷いね。留灯!」

「…はいはい。」

双子が瞬慧の所で何かを始めた。

そしてなぜか、瞬慧の傷が治って行った。

「!?!? 瞬慧!」

「おい…お前等何してんだよ。」

そして、最後に一人の少年が出てきた。

51話 ヴァンパイア少年少女（前書き）

キャラが増えてきましたね W W
まあ、お気になさらず。

51話 ヴァンパイア少年少女

「優榎!？」

少女は頬を赤く染めた。

「どうしたんですか？主？顔が赤いです。」

「な、何でもない：別に：。」

「：誰？」

少年はぼかんとした顔で梓の顔を見る。

「??:。」

「：狼と天使か。」

「!?:。」

「俺は、河森優榎。かわもりゆうか」

優榎が梓の顔を見て。自分の名前を名乗る。

「：俺は幸杜梓。」

梓もつられて、名乗る。

「って：翔は？」

「優榎と一緒にじゃないの？」

「はぐれた。」

「じゃあ、優榎は僕物だあ！」

小さい少女(?)が優榎に抱きつく。

「留香。俺に抱きつくな。」

「あっ：そーだ。僕は青ノ国留香男だらかね」ニコッあおのくにるか

「：青ノ国留灯。あおのくにるび」

双子が名前を名乗った。

「：これが噂のヴァンパイアなんだ。」

「!?:。」

帽子をかぶった道化師みたいな少女が眠っている瞬きをじっと見ていた。

「お前、誰だ！」

「君は弱い。」

「えっ?…。」

梓に少女は言った。

「君が弱いから。この子が死にそうになるんだよ。」

それで、大切な人が守れると思う?」

「?!…。」

少女は梓にズバっと言った。

俺が…弱いから…。

「君。封印魔法があるね。」

「!?!…。」

少女は梓の事に築いていた。

「何?封印って!?!」

「私達そんなの聞いてないわ。」

「そうだな。」

皆が言う。

「……。」

「梓だっけ?あなた、この雨真魏って女の子にもう一生戦えないように、魔力の封印魔法を

かけられてるんだよ。だから、梓は何も出来ない化け物って感じだね。」

「……。」

「凶星だ。」

梓は黙り込んでしまう。

「で、貴様等。どこから来た。ヴァンパイアと言ってもヴァンパイアの殺気が違う。」

「…主。どうします?片付けますか?」

「駄目。優榎がどうかしてくれる。」

少女達はコソコソ話していた。

「あなたの名前は何て言うの？」

乃亜が少女達に聞く。

「私は、日向渚ひなたなぎさ。よろしくね」ニコッ

「私は、主に仕える者。ララです。以後お見知りおきを。」

少女達が名前を名乗る。

「で、どっから来たんだ？ わしはそんなところしか興味ない。」

黒鳥は鋭い目つきで優榎達を見る。

「：この世界に存在しない世界って言ったら、分かる？」

「信じる。だがどこ？」

「異世界とでも言えばいいのかな？」ニコッ

「へえ！：で、名は？」

「：春風しゅんかぜ。」ニコッ

「そうか。」

黒鳥と春風は案外似たもの同士。

「で！瞬彗は生きてるのか！？」

「：生きてる。」

優榎が無表情で言う。

「生きてる。留香の魔法は最強だから：。」

ガサッ

「ん？：。」

「優榎。」

「翔！？。」

「翔さん！？」

後ろから一人の男の人が優榎に抱きついた。

パチッ

瞬彗が目を覚ました。

「あっ起きた！」

「瞬慧！」

「…目の前のものを受け入れられる？」ボソッ
「?!…。」

春風は梓の耳元で囁いた。

瞬慧は座った。

「大丈夫か？瞬慧？」

梓が心配そうな顔をする。

雨真魏??:…。

雨真魏が顔をあげると…。

「!?:…。」

右は真っ赤な瞳、左は漆黒のように真っ黒な瞳に変わっていた。
そして、笑っても居なかった。
ずっと無表情のままだった。

「雨真魏??:…。」

「あなたは…誰ですか??:…。」

「えっ??:…。」

52話 無くした記憶

「雨眞魏！俺が分からないのか？」

梓は雨眞魏に聞く。

「：私は：あなたを知りません。」

雨眞魏はとても冷たい目をして梓に行った。

「雨眞魏！」

「記憶を見事に割った。」

優榎が横から言った。

「はあ？」

「あの女二人。見事に銃で記憶の欠片を割ったな。」

「！？：。」

梓は驚いていた。

俺は：雨眞魏：。

「：あなたは：私を知ってるんですね。」

「！？：雨眞魏：。」

「：？？」

「ごめんな：。」

梓は下を向いて雨眞魏に謝った。

「気にしてません。」

「雨眞魏！私の事覚えてる？」

劉禰が雨眞魏の前に出る。

「：分かりません。」

雨眞魏は無表情で言った。

「渚。」

「何？！優榎？」

「…ララと一緒に辺りを見てきてくれないか？」

「あっ！うん！ララ行こう！」

「はい。」

渚とララは消えてしまった。

「記憶喪失。これは結構記憶消えたね。」

「……。」

「見つけた！」

「！？……。」

梓達の後ろには死と殺が居た。

「お前ら！？」

「居たね。雨眞魏まだ生きてたんだあ」

「雨眞魏。大丈夫だ！お前はここに……。」

梓が言うが。

雨眞魏は立ち上がった。

「雨眞魏？」

「…守るという気持ちに変わりは無いです。」

「?!……。」

雨眞魏は死を目掛けて走って行った。

「雨眞魏！」

「はははは、死んじゃえ!!!!」

バンッバンッ！

「はあ…この世界の奴はいろいろ鬱陶しい。」

「優椶！危ない！」

「……。」

銃の弾が所々に跳ね返る。

「留香。」

カキンッ！

留灯は刀で銃の弾を半分に斬った。

「留灯！」

「大丈夫か?。」

「うん!」ニコッ

「雨真魏!!!」

カキンッ!!!!

「はははは、瞬慧よりも強いね。」

「…志木を馬鹿にするのは許さない!」

「はははははははは!」

ドカンッ!!!!!!

雨真魏は死の背中をかかと落とした。

「……。」

バンッバンッ!

「はははははは、僕は死なない!!!!」

「!?!?。」

雨真魏は下から撃って来る銃の弾をよける。

「雨真魏!」

梓が呼んでいるが、雨真魏は反応が無かった。

瞬慧…。

「梓、戦えば?」

「えっ?」

白が梓に向かって言う。

「今の雨真魏の魔法は弱まっている。梓でも壊せるよ。」

「!?!?…白。」

「大丈夫だって!」

梓は立ち上がった。

「白…。」

「ん?」

「俺がもしも…暴走したら、殺してくれ。」

「!? ……。」

白は驚愕しながら梓の方を見た。

「梓! ……。」

白には一瞬、梓の周りに天使の羽ではなく、漆黒の悪魔の羽が見えた。

梓…雨真魏…大丈夫だよね? ……。

53話 暴走狼

俺は…あの日から。逃げてきた。

何もかもから…守りたいと思ったけど…。

内心はとても怖くて臆病だった…。

俺は変わる。そう決めた！

だから…何もかも変えると決めたのに…。

「…狼いー。」

死は梓をおちよくった。

「……。」

「…とっとと死ねばいいのに!!!!」

「俺は…死なない。」

「うっせ!!!!!!」

「お前がうっせ!!!!!!」

梓は死が撃つ銃の弾を跳ね返した。

そして、その弾は死の肩をぶち抜いた。

「?!…なっ!!」

「死!」

「殺…。」

「チッ…。」

死と殺は消えた。

「梓! ヤッター!」ニコッ

「近づくな!!!!」

優榎が後ろから白に言った。

「えっ?…。」

バシッ!

白は梓に吹き飛ばされた。

「ガハッ!!!」

「白!」

白はたったの一発なのに、体は血まみれ。何もかもがボロボロになった。

「白!」

黒が白に駆けつける。

「何が起こってるの?!」

「渚!」

「えっ?…。」

梓が渚に襲い掛かる。

「主は私が守ります!」

「ララ!」

グサッ!

「!?!?。」

「ララ!!!」

ララが梓に素手で刺された。

ドクンッ!

「?!?!ゲホッ!!!」

「渚!」

渚は大量の血を吐いた。

「ちょっと!どうしたの??大丈夫?」

劉禰が駆け寄る。

「私達のいる…世界は。ヴァンパイアとヴァンパイアで契約をします。」

…そして、契約すれば……。」

バタンッ

渚は倒れた。

「ちょっと!」

「契約すれば…一心同体。」

「えっ?」

「…契約者が死なないように守るヴァンパイアが傷を負えば、契約者も傷を負うって事よ。」

春風が平然と言った。

「って梓!目を覚まさないよ!!!」

「…本来の力を取り戻して、意思が飲み込まれている。」

「そんな!」

「…梓…懐かしい名前…。」ボソッ

「ガウウウウウウウウウウウ!!!」

俺は…また、殺すんだな。

自分自身の意思ではない。

俺は…また臆病になった。

皆から恨まれる。

それでももういいと思った。

だから…もういい。

「梓!」

雨真魏…。

ごめんな…守れなくて…。

梓が白に目掛けて走ってくる。

「黒は俺が…?!」

「…大丈夫だよ…黒」ニコッ

「雨真魏…。」

黒と白の目の前には雨真魏がたった。

「梓…ごめんね…。」

グサッ!!!!!!!!!!

!?!?…雨真魏…。

「雨真魏!!!!!!!!!!」

血が木に飛び散った。

54話 泣いた狼

雨真魏は倒れた。

とても血を流して。

「!?…。」

「雨真魏!」

雨真魏は動かなかった。

ただ、血を大量に流して、倒れていただけだった。

雨真魏…俺は…。

「ウワアアアアアアアアアア!…!!…!!」

梓は狼の姿でほえた。

「梓!」

守るって…言ったのに!約束したはずなのに…俺は!

「渚。大丈夫か?」

「優榎」

「はいはい。」

「あの、雨真魏っていう子。結構やる子だね」ニコッ
「知るか。」

「優榎。あの子。魔力の量が半端ないよ。

って、今でも魔力が漂ってるよ。」ニコッ

「…はぁ…はいはい。」

優榎はあいまいな返事をした。

「雨眞魏！雨眞魏！…?!」

「凄い出血だ。俺が治療する。」

蒼弥が雨眞魏の治療をする。

「梓！…何してんのよ！返してよ！」

劉禰が涙を流して、梓に言う。

「!?!」

「?!」

「あんたは、雨眞魏を守るんじゃないの！ねえ！梓！

嘘ついたの！本当は大切な人を傷つけるのが好きなの!?!」

ねえ！梓！ちゃんと応えてよ！」

劉禰は怒っている半分悲しんでいた。

梓は狼の姿から人間の姿に戻った。

「俺は…違う…俺は！雨眞魏が守りたかった！

だけど…俺…は。」

「過去に縛られてるのは分かるけど！自分自身で自分を変えなさい

よ！」

「!?!」

劉禰は座り込んだ。

タツ…。

「おい！雨眞魏！」

「!?!…雨眞魏…。」

雨眞魏は血だらけのまま、梓の前に来た。

「…梓…。」

「雨眞魏…。」

「…大丈夫だよ…梓は悪くない…悪くないよ?…。」

「雨眞魏…俺は…。」

「変わってるよ…梓は…とても変わってるよ…」ニコッ

「!?…雨眞魏…。」

梓はとても不安な顔をした。

「雨眞魏…。」

「梓…ありがとう…。」

「雨眞魏…ごめん。」

ポタンッ

「…梓の泣き顔…初めて見たよ…。」

「雨眞魏…ごめんな…。」

梓はそのまま、雨眞魏を抱きしめた。

雨眞魏は優しい顔で微笑んでいた。

傷は治って行った。

55話 BLOOD(前書き)

黒鳥メイン!!!

55話 BLOOD

わしの目指すものは何一つない。

何もかもを捨て。

何にもとらわれず。

ただ、一人で生きてきた。

誰も必要してくれないのなら、死んだ方よかった。

だけど…そんな事できなかった。

わしには…遣り残してる事が合ったから…。

パチッ

黒鳥が目覚める。

「……。」

黒鳥はブーツとしていた。

何もかも…殺せば何も感じなくなるのか?…。

わしにはそんな事…できるのか?…。

「はぁ…。」

黒鳥はため息を吹いた。

「…絵本を持ってきていたな。」

机に置いていた絵本を黒鳥は手に取った。

「わしは、この話がとても好きだ。」

「そうなの？」

兎が出てきた。

「そうだ。この絵本はわしの理想だ。」

「ふん…読んで。」

「おう！」ニコッ

黒鳥は本を開いた。

昔、黒い鴉の伝説があった。

その黒い鴉とは…。

人々を恐怖に苦しめ、地獄に送った者の事。

人は何かに支えてもらえなければ、生きてはいけない。

だが、その黒い鴉は…たった一人で生きてきたという。

他人を捨て。両親を殺し。

何もかも失った。

そうして、感情がなく、感覚も無くなった。

何もかもを失ってしまったから。

誰もはその黒い鴉に恐怖した。

自分自身の何もかもを失ってしまうからだった。

目の前に居た者を即座に殺した。

そして…長い年月が経ち、その黒い鴉は消えた。

バサッ！

黒鳥は続きの途中に絵本を落とした。

「黒鳥？」

バタンッ！

黒鳥は倒れてしまった。

「！？…黒鳥！！！！」

意識が遠くなっていた。

この絵本を…家の本棚から見つけたとき…。

わしは、これに憧れた。

とても…とても…。

だから……皆殺した…。

56話 闇夢

” ありがとう ” … ” サヨナラ ” …。

なんて言葉…誰に言えればいい？

何でそんな事言わないといけない？

なぜ…わしは” 犯罪 ” を犯した？

絵本に憧れたから…。

それだけの理由…。

【ウハハハハハハハハハハッ！死ね！お前ら死ねばいい！ハハハハハハハッ！！！】

5歳で絵本の物語に憧れて、両親から殺し始め。

そして…なぜか、殺すのが楽しくなった。

だから…殺した。

町の中の人間を全員。

楽しく笑いながら。

だけど…泣いていた。

笑いながら泣いていた。

止まらない涙だった。

【わしは犯罪者になる！なってやる！！！！殺してやる！！！！】

町は燃え。人間は血だらけのまま、わしの故郷は消えた。

【ハハハハハ…楽しい…。】

【そうか、楽しいか？】

【誰だ？わしに殺されたいのか？】

【お前は、人魚か？】

【…はははは、何でもかんでも…わしの血が欲しいのだな。】

【お前がここで死のうが俺には関係ないが、俺はお前が気に入った。

】

【…勝手にしろ。】

【名は？俺は…迷^{めい}。】

【…わしの名前はない…。】

【なら…今日からお前の名前は、黒鋼^{くろがね}黒鳥^{からす}だ！】

【…ふん…気に入った。】

懐かしい…記憶の欠片か…。

パチッ

黒鳥が目覚めた。

「黒鳥！大丈夫か？」

「あっ…黒？」

目が覚めたら、黒が居た。

「どうして?…。」

「兎が黒鳥が倒れたって、俺に行ってきて。」

「そうか…悪かった…。」

「なんだ?この本？」

「わしの…大切な本だ。」

「ふん…。」

黒鳥は少し暗い顔をした。

「お前…変わったな。」

「はあ?!」

「何か、来た時よりも、何か顔が楽しそうな感じだぜ」ニコッ

「なっ!?!…そ、そんな事はない…。」

黒鳥は顔を真っ赤に染めた。

「まあ、いいけど。後でおかゆ思ってきてやるから、ちゃんと寝てろよ。」

「わ、分かってる!!!!!!」

「本当に…お前は変わらないかも知れないな。」ボソッ

「えっ?…。」

黒は部屋から出て行った。

ドクンッ!

「!?!…。」

黒鳥の様子がおかしかった。

「あっ!…ぐう…うう….:ウワアアアアアアアアアア!!!!!!!」

57話 呪マークの悲劇

黒鳥の首から、何かの模様が広がっていた。

「…呪マーク…うう!!!!」

黒鳥は苦痛に耐えていた。

戻りたくない…いやだ!…。

「ああ!!!!!! ウワアアアアアア!!!!!!」

ガチャッ!

「黒鳥!」

黒は急いで、黒鳥の部屋に戻るが…。

「黒鳥?…。」

部屋からは黒鳥の姿はなかった。

「…!? 血…?」

黒鳥の部屋のベッドには血が一粒落ちていた。

「黒鳥!!!!!!」

黒は急いで、黒鳥を追った。

「ハア…ハア…戻りたくない…ハア…うう!!!!!!」

黒鳥は森に潜んでいた。

「グッ!…いやだ…やめろ!…。」

黒鳥は木にもたれて、座った。

「…いやだ…。」

意識が遠のいてくる。

「…黒…夜…様…。」

黒鳥の目からは一粒の涙がこぼれたと同時に、
黒鳥は静かに目を閉じた。

「黒夜様！」ニコッ

「今日も元気だな、黒鳥」ニコッ

あなたの優しい笑った顔が好きだった。

あなたと一緒に居るだけで嬉しかった。

だから…わしはあなたに…。

「黒鳥！…！」

誰かが黒鳥の名前を呼んでいた。

「黒鳥！大丈夫か？」

「……。」

黒鳥はただ、目をつぶって黙っていた。

「おい！黒鳥！」

「…黒…今まで…ありがとう…。」

「えっ？」

黒鳥は小さな声でつぶやいた。

「おい！黒鳥！」

「…わしは…。」

「おい！大丈夫だよな！お前は皆の仲間だ！

だから…生きてくれよ!」

黒は黒鳥を担ぐ。

「…わしは…嬉しかった…。」

「えっ?」

「皆に…会えて…笑いあって…居場所が出来て…嬉しかった…。」
黒鳥の目からは大量の涙が溢れた。

「…今まで…わしと一緒に…居てくれて…ありがとう。」

「?!…黒鳥…。」

「…あり…が…とう…。」

黒鳥の声はどんどん、小さくなって行った。

「おい!黒鳥!死ぬな!!!」

黒は走った。

「黒…。」

黒鳥は小さい声で黒を呼んだ。

「…化け物は…永遠に…死なない…。」

「えっ?…。」

「今が…終えても…また次の世界…で…この記憶を取り戻すよ?…。」

「…もういいから喋るな!!!」

「…黒…また…会おうね…。」

「おい!死ぬな!!!」

「…化け物は…呪マークには…勝てない…。」

黒鳥はそのまま、静かに目をつぶった。

「!?!…黒鳥!おい…黒鳥…黒…黒鳥!!!!!!!!!」

黒夜様…わしは、あなたの望んだ…化け物に慣れたでしょうか？…。

「…わしと会うのは、また今度だぞ、おぬし等。」
一人の少女は闇の影へと消えた。

58話 また…10年後（前書き）

第一章終了ー！

58話 また…10年後

黒鳥が死んで、一週間。

みんな、とても冷たい空気の中をさま迷っていた。

劉禰と乃亜は突然二人同時に姿を消した。

誰も行方を知れなかった。

緋那と蒼弥が劉禰と乃亜を探しに行ったが…。

その二人もまた…行方不明になった。

それから、皆居なくなった。

最後に残ったのは…俺と雨眞魏だけだった。

雨眞魏は、なっていた。

とても…ただ…俺はそれを抱きしめる事しか出来なくて。

「う…梓…寂しい…怖い…皆居ない。」

「…分かってる。俺が居る。」

「梓…。」

「雨眞魏…俺が居る。一生お前の隣に居るから…。」

雨眞魏は安心して、眠った。

それが、俺と雨眞魏の日課だった。
だけど…ある日。

「梓…。」
ポタンッ

梓は、とてつもなく、強い魔力の持った妖怪に殺された。

「怖い！…いない…誰も…居ない。」

雨真魏は、一人の孤独に耐えられなくなり、
狂い始めた。

「…いない！…誰も居ない…皆どこ？…。」

「雨真魏…。」

「黒！白！…？！」

雨真魏は呼んだ声の方を振り返ると、
血だらけで死んでいる白と黒。

他にも劉禪、乃亜、蒼弥、緋那…梓。

「いや！…怖い！…いや！いや！イヤアアアアアアアア！…！！！！！！」

ドンッ！

「痛ッ…。」

「あっ！ごめん、大丈夫？」

「あっ…うん。」

一人の少女が綺麗な少女にぶつかった。

「名前は？」

「緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」ニコッ

「私は、嘉応劉禰。よろしく雨眞魏」ニコッ

58話 また…10年後（後書き）

次回から、第二章開始ー！

59話 訪れた人（前書き）

第二章開始！。

小説、更新遅れると思います。
すみません＞＜！

59話 訪れた人

「あつ劉禰！おはようなの！」

「あつ、乃亜。おはよー」ニコッ

「誰??:。」

「乃亜は鈴月乃亜。よろしくなの！」ニコッ

「私は、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」ニコッ

雨眞魏は優しく微笑んだ。

「おはよー！皆」ニコッ

「こら！白！こけるぞ！」

「あつ、黒。白。おはよ」ニコッ

ドクンッ！

「!?:。」

分らない…懐かしいのに…。

「蒼弥！さつさと歩きなさい！」

「そんな事言われてもな…。」

蒼弥と緋那が階段を上ってくる。

誰??:。

「!?:。」

雨眞魏は誰かに目をふさがれた。

「えっ!?:誰!?:」

「お前等、早く教室入れ！」

誰かが皆を指示していた。

「はいはい。」

「…?」

雨真魏から手が離れた。

「お前も、早く教室に入れよ」ニコッ

「!?!?」

「歪みの時間。訪れた人達かあ…。」
一人の少年がつぶやいていた。

「…あの子の、心は砕けたまま。」

「……。」

雨真魏は少し落ち着いてきた。

私は…誰も知らない。

タッタッ

一人の少年が廊下を歩いてくる。

「?!?!?」

少年は雨真魏に向かって歩いてくる。

「久しぶりだね。雨真魏」ニコッ

「えっ?!?!?」

少年は雨真魏の目の前に立つ。

「誰?!?!?」

「僕の事、覚えてない?」

「…えつと…。」

雨眞魏は考え出した。

「…八城^{やしろ}。」

「えっ?…。」

「僕の、名前は八城。思い出した? 雨眞魏」ニコッ
「…えっ?…。」

ズキッ!

「!?!…いつ…。」

雨眞魏は突然、頭に激痛が走った。

【八城!】ニコッ

【八城! 遊ぼう!!】

【また明日ね、八城】ニコッ

ドクンッ!

「?!…八城…。」

「思い出した? 雨眞魏」ニコッ

「八城…。」

「久しぶりだね。雨眞魏」ニコッ

「八城…八城!…。」
バタンッ!

雨眞魏はそのまま、気を失ってしまった。

私は…何かを忘れているのかな?…。

60話 十字架を背負う少女（前書き）

すみません。

久々更新です。

60話 十字架を背負う少女

タツ

「…早く会いたいな…雨眞魏様。」

「…?」

「どうかしたの? 蒼弥?」

「いや…なんでもない。」

「って…雨眞魏とあの男は誰なのかしらね?」

「知らない…。」

蒼弥と緋那は雨眞魏と八城を見ていた。

「雨眞魏、遊びに行こう」ニコッ

「うん。」ニコッ

雨眞魏と八城はとても仲がよかった。

「本当に…覚えてないのね。」

「当たり前だ。雨眞魏だけしか前世の記憶が戻っていない。」

「どうしてなの?」

「二重人格のせいで、記憶のずれが生じているのかもしれないな。」

「そんな事ってあるの?」

緋那は蒼弥に顔を近づける。

「まあ…今はあの二人をなんとかしないと。」

「えっ?…。」

緋那は蒼弥の差す方向を見た。

「!…。」

梓と白が落ち込み状態になっていた。

「プッ…アハハハハハハハハッ!!!!」

緋那は大爆笑した。

「緋那。笑い事じゃ、ないって。」

劉禰が言う。

「そうなの！これでも結構大変なの！」

「アハハハハッ！だって…アハ！だって…プツ…アハハハハハハハハッ！！！」

緋那の笑いは止まらなかった。

「はぁ…劉禰、乃亜。こいつはほっといていいだろう。」

「うん。」

「分かったの！」

三人は梓と白を見た。

「…はぁ…。」

「……雨眞魏…。」

二人は絶望と鬱状態だった。

「貴様は誰だ！」

廊下から、誰かの大きな声が聞こえてきた。

「何？」

ガラッ！

そしたら、雨眞魏と八城の前に一人の十字架を背負った少女が立っていた。

「誰？…。」

梓が立って、廊下に出る。

パシッ！

「えっ？…誰？」

「……。」

梓が雨眞魏の手をつかんだ。

「僕、なんか悪者みたいだね？」

「…はは…。」

雨眞魏は少し笑った。

「雨眞魏？」

「ハハハハハハハッ！お前ら何をしている？」

「瞬慧！」

「ん？…梓か。」

「お前…前世の記憶が…。」

「覚えている…ちゃんとな。雨眞魏の分まで、全て。」

瞬慧はとても悲しい顔をした。

「雨眞魏様！お久しぶりです！」

十字架を背負った少女が瞬慧に抱きついてくる。

「なっ？！…。」

「！？…。」

バタンッ！

二人は倒れる。

「痛…なんだ？お前？」

「雨眞魏様！お久しぶりです。随分、りりしいお姿になりました
！」

「はあ！？…。」

瞬慧は頬を真っ赤に染める。

「どうかされましたか？雨眞魏様」ニコッ

「！？…いいからどけ！」

「あっ…はい！」

少女立ち上がる。

「で、誰なんだ？」ボソッ

梓は瞬慧の耳元で囁く。

「俺が知るわけないだろう？」ボソッ

「はあ？！」

ムカツ

「おい！貴様！」

少女は梓の目の前に来る。

「!?!?」

「貴様、雨真魏様にそんな口を叩くなど、どういふつもりだ!」
少女の目つきが変わった。

「…怒りの色…」

「何を言っている、梓?」

「別に…」

梓は少女を無視して、どこかに行こうとする。

「おい! まで! 貴様!」

「貴様じゃないけど、梓。」

「!?!? 私、ロザ。」

「…そうか。覚えておく。じゃあな。ロザ。」

「なっ?! ……」

ロザは少し頬を赤めた。

ズキッ

「?!?!?」

瞬慧は少し暗い顔をした。

なんだ?! …このモヤモヤとしたようなムカムカしたような気持ちは
なんだ?!?!? ……」

61話 呪いの記憶

ボツ！。

「……。」

ここ数ヶ月、なぜかずっと瞬慧の人格のままで居る。

「……。」

それと、なぜか瞬慧はとてもボーツとしている。

「雨眞魏？」

「八城か……。」

「どうかしたの？」

「別に。」

瞬慧はちよつと寂しい顔をした。

「梓！」

「ん？ ロザ。どうした？」

「！？ ……」

ロザは梓に声をかけていた。

「梓、一緒にご飯食べない？」

「俺は、別にいいけど？」

「ヤッター！ じゃあ、雨眞魏様もご一緒に？」

ズキッ！

「…俺は…遠慮しておく。二人で…食べろ…。」

「あっ…瞬慧！」

瞬慧はその場から去った。

何で…こんな気持ちになるんだ？ ……。

「!?!?。」

瞬彗は突然、口を手で塞いだ。

「…ゲホッ!ゲホッ!ゲホッ!」

思い出したくない…。

【梓!いや…怖い!一人にしないで!】

もう…あんな思いは…したくない。

「…梓…。」

ボタンッ

瞬彗はそのまま倒れてしまった。

タッ

瞬彗が倒れている目の前に、知らない一人の双子が現れた。

「ならさ…消しちゃえば?」

「その思いも、記憶も何もかも。」

「「消しちゃえば?」」

瞬彗の倒れている周りに薔薇の紋様が広がった。

「!?!?」

瞬彗は一瞬にして、目を覚ました。

「!?!?…ガハッ!」

瞬彗は口から血を吐いた。

「僕達は、君を連れ戻しに来たんだよ?」

「志木様、人格から出てきなよ?」

「…ハァ…それは…無理な話だ!」

「志木様の能力…それは。」

「言うな!…!…!…!…!」

瞬彗は大声で叫んだ。

タッ！

「瞬彗！」

梓達が瞬彗のいる、所に来た。

「仲間？なら、もう1回同じ記憶を見る？」

「！？…やめろ…。」

瞬彗は紋様の中に入っているため、体が思うように動かない。

「志木様が”戻る”と言ってくれたら、やめる。」

「！？…。」

もう見たくない…見たく…ない…。

タッ

一人の男が瞬彗の後ろに立って居た。

「瞬彗！」

「雨真魏様に触るな！！！！！！！！！！」

ロザが十字架を武器に振る。

「……。」

男が手を叩く。

「！？…。」

「な…！？」

ロザは血だらけになって、そのまま瞬彗の目の前で倒れてしまった。

「！？…血…血…血。」

「……。」ボソッ

「！？…。」

男が瞬彗の耳元でつぶやいた。

「戻ってやる…。」

「！？…瞬彗？」

「志木！戻っちゃ駄目だよ！」

「：！？：うう：。」

瞬慧の様子がおかしかった。

「志木？」

白が心配そうに見る。

双子は瞬慧の隣に行った。

「！？：闇の色：。」

梓がつぶやいた。

「梓？」

「：う：うわあああああああ！！！！！！！！！！」

瞬慧の体から闇のオーラが大量に出ていた。

「！？：瞬慧！」

62話 消えるもう一人の自分

「うわあああああああ!!!!!!」

瞬彗から、とても闇のオーラが大量に漂っていた。

「魔力が…志木! 魔力を止めて!」

「…クッ…無理なのだ…」

「えっ?!…」

瞬彗は少しだけ言葉を話せた。

「!…お前…俺に何をした…?」

「呪文を唱えた。」

「それだけさ。」

男は喋らず、双子が喋っていた。

「!?!…う!…ガハッ!」

「志木!」

瞬彗は血をはいた。

「ねえ、この女の秘密教えてあげようか?」

「えっ?…」

「雨真魏の体でこいつ何したか教えてあげようか?」

「何…を…」

「!?!…やめろ!…言うな!!!!!!」

瞬彗は大声で叫んだ。

魔力が強すぎて、近づきたくとも近づく事が出来ない。
雨真魏と瞬彗の魔力は他の人より強い。

「志木!」

「…白…助け…」

ボタンッ

瞬彗は気を失って倒れてしまった。

「志木！」

「瞬彗はさ、雨眞魏の体で何人者、数え切れないほどの殺人を犯したんだよ？」

「！？…。」

「瞬彗の引く血は何か知ってる？」

「はあ？…そんなの、雨眞魏と一緒にで…。」

劉禰が言うが、双子はあきれた顔で顔を横に振る。

「瞬彗の引く血は、人殺しの血と人間の濃い血を引いてるよ？」

「！？…人間！」

グサッ！

「志木！」

瞬彗は刃を双子の一人に刺した。

「！？…。」

「志木！志木！」

「君も成長しないね。もう君は負けたんだよ？生き残ったのが…。」
ボソッ

「！？…思い出させたら…見たくないんだ…ゲホッ…。」

瞬彗は双子のもう一人に背中を刺された。

「ヴェンパイアの血なら…すぐ治るのにね。」

「…。」

俺は何もかも、要らなかった。

ただ、俺の存在理由を知りたかった。

俺を”人殺し！”と呼んだ奴から殺して行っただ。

初は殺すのが気持ちよかった。
だけど…だんだん、楽しくなくなった。
大切な人が出来て…死んで。
俺の人生駄目だな…。

「邪魔だ！」

上から誰かの声がした。

カキンッ！

「!?!。」

双子に攻撃してくる、一人の少女。

そして、魔力は少しずつ消えて行った。

「志木！」

「瞬慧！」

皆瞬慧の所に駆け寄った。

「志木！」

「…白…俺は…。」

「志木！」

「……ごめん…白…。」

「志木…僕を一人にしないでよ！」

”人殺し!”…あの頃からもう俺はいなかったのだな…。

「…今…永遠に…生きていられるなら…お前たちと…友に生きていたい…。」

「志木！」

「…白……サヨナ…。」

瞬慧の人格はそのまま消えてしまった。

「一旦退くぞ！」

一人の双子と戦ってた、少女が大声で言った。

「チッ：お前ら聞いているのか！？ さっさとしろ！ お前等も殺すぞ
！！！！」

「！？。。。」

一人の少女がとても大声でとんでもないことを言う。

63話 黒い鳥

「チッ、乱入者?? むかつくなぁ」

「…白! 最大魔力で瞬間移動する! 出来るか?」

「あっ…任せてよ!」

白が目をつぶる。

「…クッ…。」

白の周り電気が走る。

「…飛ぶ!」

「あっ…。」

「!?…。」

一瞬にして、皆消えてしまった。

ドンッ!!

皆が地面に落ちる。

「……。」

バタンッ

白が倒れた。

「白! 大丈夫か?」

「zzzz…。」

白はゆっくり眠っていた。

「雨真魏…。」

梓は不安な顔をした。

「それより、お前誰!」

「そうなの! あなたは…誰なの?」

乃亜と劉禰が言う。

「…もう忘れたか? 雨真魏はともかく、わしのことを忘れるとは、ひどい奴等だな。」

少女はかぶっていた、フードを脱ぐ。

「?!…。」

「黒鳥^{からす}!!!」

「前世ぶりだな!」ニコッ

皆学園のロビーで休んでいた。

「…やはり、ここは変わらんな。」

「そうだな。」

「全員、へとへとのようだな。」

「しかし、黒鳥。お前何をしていた?」

蒼弥が黒鳥に聞く。

「わしは、少し調べ事をしていた。」

「何の調べ物なのかしら?」

「二重人格。」

「??」

皆ぼかんとした顔をした。

「おかしいと思わんのか?」

「何が?」

「世界には、二重人格なんていうもの存在しない。

雨眞魏と瞬慧は特別だという事だ。

だがもう、瞬慧と言う存在も居なくなったがな。」

「!?!。」

「それって…。」

「瞬慧は死んだって事だ。」

「!?!。」

「雨眞魏…。」

梓は不安な顔だった。

「う…う…。」

雨眞魏はうなっていた。

「雨眞魏?」

『皆?…どこ?…。』

雨眞魏…。

『瞬慧!…。』

ごめん…守れなくて…ごめん。

『!?!…。』

瞬慧の顔が崩れ始める。

『いや!…怖い!』

雨眞魏が座り込んで、顔を伏せる。

『梓!…助け…て…梓…。』

【梓!…私を一人にしないで!…。】

『?!…私?…。』

【ごめんな…雨眞魏…守れなくて…。】

『!?!…。』

雨眞魏の目から涙が一粒一粒溢れて行った。

『皆…いなくなっちゃうの?…梓…皆…。』

居なくなる。お前のせいで。

『!?!…。』

「イヤアアアアアア!…!」

「雨眞魏?」

「イヤアアアア!…皆居ない!怖い!一人はいや!」

「雨眞魏！」

「!?!?…梓…。」

雨眞魏の目には大粒の涙が溢れていた。

「梓…分からない…思い出せない…。」

「何がだ?…。」

「夢を見たの…誰かが…居なくなった…夢…。」

誰かを失った…怖い…。

「大丈夫だ。俺が居る。俺が守ってやるから。」

「梓…私を…一人にしないで…。」

梓は雨眞魏の手を優しく握った。

「…記憶を戻ってきているか…。」ボソッ

梓と雨眞魏…記憶を取り戻すほど、雨眞魏は狂い歪な関係へ行く…。

64話 自分 前編

皆が笑うから、私も笑う。

私に意思なんていらない。

ただ、皆に笑ってほしいから。

私が自分の気持ちを伝えるなんて駄目。

自分自身が耐えればいい。

私の、迷惑な意思なんて伝えなくてもいい。

前世、皆で騒いだ夏。

夏の始まり。

「……。」

雨真魏は座っていた。

ただ呆然と椅子に。

「暑い……。」

「クーラーないのかよ、この学園。」

「ない！」

黒は大声で叫ぶが梓はキツパリ応える。

白は団扇で自分を扇いでいた。

「夏ってどうして、こうも暑いのかしらね？」

「ん？……！？」

蒼弥は顔を赤めた。

「何よ？」

「なんだ、その格好？」

梓が緋那に聞く。

「学園のプールで泳ごうかなって、思っただけよ。」

「じゃあ、僕も行く！」

「白が行くなら、俺も行く！」

「しゃーない。今日は全員でプール開きだ！」

皆学園の屋上に向かった。

雨眞魏が椅子から動こうとしなかった。

「雨眞魏、どうしたんだろう？」

「わしが見とくから、お前等に行っていいぞ。」

「分かった。」

黒鳥が雨眞魏の目の前にある椅子に座る。

「…雨眞魏。」

「……怖い…。」ボソツ

雨眞魏はつぶやいた。

「自分の意思を伝えないと自分自身の気持ちなんて、絶対伝わらないぞ？」

「…。」

「意思を心の底に引っ込めて、自分はただ笑ってるだけでいいと思っ
っているのか？」

「…。」

「雨眞魏のやっている事はただ、他人から逃げているしかわしには
思えんな。」

他人を遠ざけて、自分は関係ない。ただ他人を傷付けたくないと思
っているだけだ！

ただ、お前は誰かに構ってほしいだけなんだとわしは思うけどな。

「

「!?!?。」

パシッ!

雨眞魏は黒鳥の頬を叩く。

「?!?!?。」

「何が分かるのよ! 私は、自分の意思を閉じ込めてる! だから何よ! 私の迷惑な意思を皆に伝えなくても、私は、皆に笑ってほしいだから!」

「それが逃げているって言っている! 他人から逃げ、自分からも逃げろ!」

そんなに逃げて楽しいか? 他人の顔をよく見たことがあるのか!」

「!?!? : 黒鳥は何も知らないからでしょう! 何で、そんなに言われないといけないの!」

雨眞魏と黒鳥は廊下に響く声で言い合う。

「お前は、他人の顔色も心も気持ちを何も分かっていない!」

「?!?!? : 何よ : それ : 私がただ、自分一人が勝手にやっているとでも言うの!」

「そうだ! お前は自分自身で勝手にやっている! 皆笑っているようにでな :」

何かを考えているんだぞ!なのに、お前はその気持ちを踏みにじるのか!」

「!?!?。」

「皆、お前を心配していた。なぜ分からない!なぜだ!」

これ以上、雨眞魏を狂わせたら : 未来と一緒にになる。

「 : 黒鳥に何が分かるのよ! 私には梓が居ればいい! 梓だけが居れば私はそれでいいの!」

「!?!? : やっぱり分かってない : 仲間って言ってたのも嘘だったんだな!

梓だけがればいい? ふぎけるなよ! 仲間って友達って言ってた

奴の事も…。」

「あいつら、仲間でも友達でもない。私には梓が居ればいい。」
「!?…。」

雨真魏の目つきが変わった。

「私の意志なんて伝えない。」

「なら、もうお前を殺すしか未来は救えない！」
黒鳥は武器を構える。

「私は一生梓と共に行くる！」
雨真魏の刀を構える。

カキンッ!

「何か聞こえなかった？」

「そうか?? 空耳じゃねえーの?」

「そうかもしれないね」ニコッ

白は空を眺めていた。

『白…。』

「志木…。」

『雨真魏を助けてくれ! 白!』

「?!…志木!?!」

65話 自分 中編

「志木？」

『白、すまんが体を借りる。』

「えっ?!:。。」

瞬慧(?)が白の中に入った。

「チッ:あいつら!」

「!?::白?」

黒が不思議な顔をして、走って行った白を見ていた。

「お前はあいつらの気持ちを踏みにじった!わしは許さない!」

「知らない!私は、梓さえ居ればいい!梓が居れば、何も要らない!」

シュッ!バシッ!

雨真魏と黒鳥は酷くボロボロになっていた。

「じゃあ、なぜお前は一人になるのがいやなんだ!」

「私はそんな事言っていない!」

「!?::。」

やはりか:前世の記憶がまた戻っていないか:。

「コラァ!お前等!」

「えっ?!」

「?!:。。」

白が大声を上げて言った。

「誰もいないところで争うな!」

「白?::。」

「瞬慧か?」

「ハッ！黒鳥はいい。」

白は雨眞魏の目の前に来た。
パシッ！

「!?…。」

「瞬慧!？」

黒鳥は焦った顔をする。

瞬慧が雨眞魏の頬を叩いた。

「いい加減にしろ！何でもかんでも、梓、梓、梓！ふざけるな！

お前には仲間も居て、友達もいるだろう！

梓だけがお前の全てか！」

「?!…。」

「何でもかんでも！いい加減な事を言っていないで、みんな居るんだ！お前を支えてくれる奴等が！

皆いるんだ、お前と一緒にいてくれる奴が！

何で、気づかないんだ！」

「!?…。」

ポタンッ

白（瞬慧）の手に一粒涙のような物が落ちてきた。

「う…怖い…。」

「えっ？」

「怖い…一人になるのが…。」

「雨眞魏？」

雨眞魏は座り込む。

「…時々…とても恐ろしい夢を見るの…。」

「なんの?…。」

「瞬慧！私、怖い…その夢を思い出すのがとても怖い…。」

「雨眞魏!…起きろ!。」

「…。」

「?!…。」

グサッ!!

「瞬慧!」

「「君も邪魔。」」

グサッ!

「ガハッ!!!」

バタンッ!

「ん?…血の匂い?…。」

「梓?…どうかしたか?」

「いや…何でも無い!…気のせいかな…。」

「雨眞魏…。」

「…。」

「…やっと、見つけた。僕の手がかり。」

「…手かかり?…。」

瞬慧はそのまま目を閉じてしまった。

66話 自分 後編

私は優しくしてくれる梓が必要だった…。

「瞬慧！黒鳥！」

私は…。

「大丈夫か？」

私は…。

「あず…さ…雨…真魏…が…。」

「白！」

私は…。

『梓…怖い…皆？…！？いや…血…！！』

「チツ…。」

「黒鳥、立つなよ。」

「わしは…大丈夫だ。」

黒鳥から血がポタッポタッ落ちる。

「大丈夫じゃ、ねえーだろう？」

「わしは…あいつに伝えなければならんだ！」

「なら、大人しくしてください。」

「！?…。」

「深紅!？」

皆の目の前には深紅と深香が立っていた。

「兄様。お久しぶりです。」

「おう。」

「で、伝える事とはなんですか？」

「…別に…お前…。」

ボタンッ

黒鳥は倒れた。

「早く、医務室に連れて行ってください。」

「了解。」

白と黒鳥は医務室に運ばれた。

タッ

「梓…。」

「えっ?…?!」

梓の目の前には黒い着物を羽織った少女が居た。

「誰?…。」

「俺だ。瞬慧だ!これが俺の本当の姿だ。」

「…そうか。」

「奴等は、雨真魏が手がかりと言っていた。」

「手がかり?」

「そうだ。俺にはさっぱりだが。」

「……。」

梓は考え込む。

『梓!怖い!怖い!1人は怖い!…皆!』

パチッ

「……。」

雨眞魏が目を覚ます。

「…梓…。」

ジャキッ

雨眞魏に剣を向ける一人の男。

「貴様、あまり調子にのるなよ!」

「…誰?…。」

「!?!?…俺は…宮^{みや}だ!」

「…私、殺されるの?」

「貴様はこれから、葬^{そう}様に従うだけだ!」

「…分かった。」

雨眞魏は静かに黙り込む。

「お前、変な奴だな。」

「…もう…一人なら、死んでもいいよ…。」

「なぜだ?…。」

「…分からない…ただ。周りにいる人が死んだ夢しか見ないの!」
ポタンッ

「!?!?…。」

雨眞魏は涙を流す。

「…悪かったよ…泣くな。」

「…?!?…ありがとう…。」

宮がハンカチを渡して、雨眞魏は涙を拭く。

「俺も…。」

「ん?」

「俺も…昔そんな夢しか見なかった。」

「…そうなんだ。」

雨眞魏は少し悲しい顔をした。

「雨眞魏！」

「梓……。」ボソッ

届かない二人……。すれ違ってしまふ。

67話 すれ違い1

「黒！雨眞魏の居る場所、分かるか？」

「分かるが、結構遠いぞ？」

「それでも、急がないと…。」

「…。」

雨眞魏はベッドで寝かされていた。

「知っているか？」

「…何を？」

「これは、お前の、運命さだめだと。」

「…知ってるよ。」

雨眞魏の上には、人間の血が大量に入ったバケツが合った。

「人間を血を飲めば、飲むほど、私はもう…。」

「…悪い…。」

「宮が謝る事じゃないよ…。」

「…雨眞魏。」

宮はそっとレバーを引いた。

そして、バケツは雨眞魏の体一面に浴びせられた。

ドクンッ！

「?!…。」

「…。」

宮は部屋から出て行った。

宮は部屋に、鎖と鍵を閉めた。

もう一生出てこれないように。

「あ!!ガハッ!!…。」

雨真魏は苦しみながら叫んでいた。

「雨真魏：悪い。これも命令なんだ。」

宮はそのまま部屋から去って行った。

「さっさとしろ！！！」

「分かってるっての！梓急ぎすぎ！」

「これを手配するのに、時間かかりすぎだろう！！」

「しょうがないの！これは学園になかったの！！」

「はいはい。」

梓達はバイクに乗って、雨真魏がいる所に向かっていった。

「雨真魏！！！」

ギシッ

血だらけのベッドで雨真魏は座る。

「あ……けて……」

雨真魏はフラフラになりながら、歩く。

そして、雨真魏はドアの目の前に行く。

シュッ！グサツグサツ！！

「……。」

バタンッ！

雨真魏は後ろから、何本物刀に刺されてそのまま倒れた。

「チッ、先に行くぞ！」

「あつ待て！瞬撃！」

梓は狼の姿になる。

「あっおい！俺は運転できねえーぞ！」

「すまん、勝手に操縦してくれ！」

「おい！梓…。」

黒は文句を言うが、運転を始める。

「乗れ！！」

「まったく、横暴な奴だな。」

瞬彗は梓の背中に乗る。

「あっちゃっ！梓！」

緋那が止めようとするが、先に行ってしまった。

「はあ…。」

「雨眞魏！！！！」

そして、一つのお城を見つけた。

「梓、どうする？」

「窓から入るか。」

「そうだな。」

そして、梓は羽を出して、飛ぶ。

「突っ込むぞ！」

「おう！」

梓は一つの部屋の窓に突っ込んだ。

パリンッ！

「！？…。」

「なっ…。」

入った部屋は、血だらけの部屋だった。

そして…。

「！？…。」

「雨…雨眞魏！！！！」

梓と瞬彗の目の前には、血だらけの雨眞魏の姿が合った。

68話 すれ違い2

友達が出来ても、その人と距離が近くなっても…。

本当は遠い…私は誰とも近くに居てはならない存在だから…。

私が…”化け物”だから…。

「雨真魏！」

雨真魏は目をうつすら、開いていた。

「はははは。」

「雨真魏？」

「死ねばいい！！」

グサッ！！

「！？。。」

梓が雨真魏に腹を刺された。

「梓！！！！」

バタンッ！

梓は、大量の血を流して倒れた。

「アハハハハ！！！！死ねばいい！！私以下は全員死ねばいい！！！！」

雨真魏は血だらけの手をなめる。

「雨真魏！！…どうしたんだよ！」

瞬彗は雨真魏に聞く。

「私は、私だ！他の誰でもない！他しくもなってはいない！！」

「お前もいい加減、死ね！！！！」

雨真魏が瞬彗に刀を振ろうとする。

カキンッ!!

雨真魏の刀を瞬慧は自分の刀で受け止める。

「お前には少し、説教が必要だな!」

「ははは、私に勝てると思うなよ!!」

ガシャンッ!

二人は窓際を破壊して、外に出て行った。

バンッ!!

部屋には、息を切らした、宮がやってきた。

「?!…おい!大丈夫か!?!」

宮は倒れている様を見て、驚く。

「雨真魏の仕業か?…ん?こいつ、魔力に封をされているな。」

カキンッ!!!!

「チッ!」

「…アハハハ、お前もさっさと血だらけになれ!!」

カキンッ!!

「?!…」

ドカンッ!!!!

瞬慧は雨真魏に吹き飛ばされた。

「なぜだ…あいつは片手で刀を持っているのに…なんて力だ。」

これが死神とヴァンパイアの血を引く者の力?…」

「アハハハ!!死ね!!!!」

「!?!」

バキッ!!

雨真魏が刀を振ると、地面にヒビが割れる。

瞬慧はよける。

「お前…」

「もう、死ぬ?」

「梓！」

「?!…。」

瞬慧はいきなり梓の名前を呼ぶ。

「何を言ってるの?。」

「梓! 梓!」

「…いい加減に死ね!!!!!!」

雨真魏は刀を瞬慧に振る。

カランッ

「!?!…。」

「雨真魏?!…。」

ポタンッ

瞬慧の頬には、一粒の水が零れ落ちてくる。

「…なぜだ! なぜ! なぜ私には、こいつを殺せない! なぜだ!」

「雨真魏、帰ろう。」

「!?!…嫌だ! 私は! 私は一生ここで…。」

雨真魏は泣きながら瞬慧に訴える。

「お前は…なぜそんなに…。」

「…私は……。」

『雨真魏!』

「!?!…母様…。」

ボタンッ

「雨真魏!!!」

雨眞魏は涙をボロボロ零しながら、倒れてしまった。

69話 すれ違い3

ハッ!!

「雨真魏! 大丈夫?」

雨真魏は目を開いて、真っ先に心配そうに顔を除いてきたのは白だった。

「白? :。」

「大丈夫??」

「大丈夫 : : : だよ :。」

雨真魏は座る。

「! ? :。」

雨真魏は自分の手を見る。

「雨真魏? :。」

殺した? 死んだ? 血まみれ? お前が殺した?
誰が梓を殺したの? やめて : : 死にたい。

「雨真魏!」

「? ! :。」

雨真魏はとても顔色が悪かった。

「もう少し、寝たほうがいいよ」ニコッ

「 : : : うん : : : ありがとう。」

雨真魏はそのまま眠りについてしまった。

「 : : : 。」

雨眞魏が帰ってきた。

血だらけで、梓はなぜかフィンキが違っていた。だけど、無事でよかったけど。

雨眞魏はあれから、無意識に血を求めていた。

「ちよっ！梓！」

「ん？…。」

廊下の方で誰かの声がする。

白が行って見ると。

「！？…梓！劉禰！」

「チッ…。」

「梓？」

「雨眞魏を殺すとかって言ってきて…！」

劉禰が白に焦りを見せながら言う。

「俺は！…。」

バキューンッ！！

ガチャッ

銃声の音と同時のように部屋のドアがしまる。

「！？…。」

「雨眞魏は殺させない！」

白の目つきが変わった。

「…。」

梓の頬に銃の弾がかすって、血がたれてくるが、梓は表情一つ変えない。

「雨眞魏は僕が守る…。」
ドンッ！

「…。」

白が梓の腹を蹴るが、梓は腕でガードしていた。

「梓…何もわかってない…。」

「はぁ?…分かってないのはお前だろう?」

梓は剣を出す。

「分かってないのは!梓だ!!!!」

白と梓は窓から飛び出した。

「!?!梓!白!もう!」

劉禰は狼の姿になって、二人を追う。

カキンッ!

バンッバンッ!!

カキンッ!シュッ!!

「梓は何も分かってない!…。」

「何を分かって言うんだよ!」

「?!…。」

「こんな嘘ばかりの世界で平和一つない世界で…何を分かってって言うんだよ!」

「雨真魏は!…。」

「!?!…。」

白は悲しい顔をする。

「雨真魏は前世のお前が死んで、どれだけくるんでるかお前は知らないのかよ!」

「!?!…。」

「いつも…一人で泣いてる!怖い思いして、恐怖を絶えている!」

いつも、皆の前では笑おうって、そんな事を言いながら、本当は心も体もボロボロで…。

誰かに助けてほしくても自分の意思を閉じ込めるんだよ!雨真魏は!

何で、お前が一番雨真魏の隣にいたのに!わかんないんだよ!」

白は涙をボロボロ流して、梓に言った。

「俺は！ 見えないんだよ！」

「はぁ？」

「…色が…見えない。」

「…それがどうしたんだよ！」

「俺は、色がないと、人の感情も何もかも分からないんだよ！」

「！？…。」

梓は座り込む。

「なら、死ねばいい。」

「！？…。」

「雨真魏！！」

雨真魏は空に浮かんでいた。

「…私はもう…何も望まない。
お前ら全員死ねばいい！！」

「雨真魏！！」

70話 前世の記憶

私は、自分自身が傷つくのが怖い…。
とても、怖い。怖くて助けてほしくて…苦しい。

世界にただで…前世の記憶を思い出すだけで…。

「死ね！死ねば楽になる！」

「雨眞魏！」

「死んで楽になればさぞかしい気分だ！！」

「雨眞魏…。」

違う…。

「死ね！！！！」

グサッ！

！？…違う！…。

「ガハッ！」

「白！」

「大丈夫…かすただけ…。」

白は腹から血が出てくる。

「雨眞魏！！！」

梓が名前を呼んでも、雨眞魏の心には届かない。

「ハハハハハ、死ね！死ねばいい！」

雨真魏は刀を出す。

そして、それを白目掛けて投げる。

「チッ！」

「白！」

白は血を流しながらよける。

違う！…やめて！…。

「死ね！雑魚が！」

違う！やめて！…。

「白！」

「！？…。」

グサッ！！

嫌！やめて！違う！私じゃない！！！！！！

ドクンッ！

「！？…。」

！？…何が流れてくる！…。

『梓！血！私を一人にしないで！梓！嫌！いやあああああ！！！！！！』

そして、雨真魏はその悲しみに耐え切れず、ヴァンパイアと死神の力を暴走された。

自分でも制御不可能だった。

そして、そのまま力に負けて、そのまま帰らぬ人になってしまった。
それが雨眞魏の前世の記憶。

「!?…。」

バタンッ!

「…梓!…。」

白をかばって、梓が刺された。

梓からは大量の血が流れていた。

「梓…。」

雨眞魏は正気に戻ったが、混乱状態だった。

「あの時と一緒に…。」

『梓! 怖い! 一人は嫌! 私を一人にしないでよ! 嫌! いやああああ
!!!!!!』

ドクンッ!

「?!…。」

ポタンッ

雨眞魏の目には涙が零れ落ちていた。

「雨眞魏?」

違う!…。

『君は悪くない。』

違う!…。

『大丈夫。』

怖い!…。

『怖がる事は無いよ。』
全部…。

『全部壊してしまえばいい。』
全部…壊してしまえばいい…。

『そう、全て、君の物にしたらいいい。』
私の…物?…。

ドクンッ!!!!

「!?…。」

ジャリッ!!

「!?…。」

「!?…。」

「何?この感じ?」

「チッ!雨真魏め、自分の力に源の封印を解いたな!」
黒鳥はそのままどこかに走って行った。

「黒鳥!」

皆それを追った。

「雨真魏!!」

「…もう…壊してしまえばいい…。」

雨真魏の下から鎖と巨大な髑髏が出てきた。

「…壊してしまえばいい…何もかも…。」

「雨真魏！！」

ポタンッ

「…壊れて…。」ボソッ

誰も居ない…。私は分からない…自分自身が何者なのか…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9389v/>

化け物学園帝国

2011年11月24日16時48分発行